つて、十二因縁の六度のと云ふことかあれとも、みな十分いらぬことなり。一切の名目は、分別の名としれは、皆たることなり。細かに小刀細工のやうに知つても何にもならぬ。苦は皆一切苦なりと観し、集は一切分別して色々のことを集る故に、生死するぞと観し、滅は一切皆滅し盡して道の涅槃を悟らんとする、是れは皆刻佛法て埒明かぬこと。今般多くの禪者、隨分直指見性の法を知るやうなれとも、皆この四諦の修行におちて居るなり。故に右一々云ひたる如くよくよく合點すれは、直に根源を盡くして、只是れ本より不生なく不滅なり。なんの若集滅道と云ふことかあるへきそ。爰にとつくりと落着いて見れは、一切をあきらむると云ふ智も又なきなり。智もなき故に、得ることもなきなり、又得る者かなきと云ふ分別もなきなり。然れとも多くの禪者、佛學の上人か、爰て誤ることかある、いかにも、理はこの心經の如く合點しても、事と云ふ物は、漸々に除かねはならぬ。去るに依て、楞嚴の中にも理は頓に悟ると雖も、事は漸々に除くとあると云ふ也。是れは古代より多く覺ゑ違ひて居ることなり。先づ事と云ふものと理と云ふものと、二つに見て錯に落てをる。理と見るも、己か分別、事と見るも、己か分別なり。分別を離れて、事理か方より理じや事じやとは云はぬなり。さて楞嚴の理雖頓悟乘悟併消事非頓除因次第盡とやら

んあつた。此れは根の差別を計つていはれたることなり。上根の人は、直下に此經のことく點頭したれは、修行を用ひすして直に自性を悟りたる眼には、なんにもなく、目にかゝるものかなく、煩惱の、菩提の、佛の、衆生のと云ふこともありとあらゆること、のこらず合せ錯損するなり。然れともいやそれても地獄と云ふことかあり、さまゝのことかあり、はらもたち、欲もおこり、色々のことかあるに依てと跡すさりをするかさいで、いかにもその人は頓に除くことはならぬ、漸々次第につくして行くと云ひたることなり。然る間、眼の付處かちかふては、此事頓に成就することならぬなり。是れに付て多くかるはつみの輩か、佛法なく、衆生もなんにもないといつて、勤めもせす、佛前等をもおろそかにし、坐禪もいらぬと云つて打破にし、誦經もいらぬと云つて、ひやうきんなことのみにして居るやからもある、それは得手勝手の悟なり。坐禪もいらぬと云ひ、誦經もいらぬ、禮拜も用ひすならは、欲も用ひす、婬欲も用ひす、人を憎むことも、人を愛することも、人のことに善惡を付けることも、何もかも用ひぬはづなり、其方は大事ない、こちらはやくに立たぬと云ふのは、とつけもなきことなり。世間の上てさへ、子は父母の前に禮を厚くし、上たる人は、言葉まで差へぬやうにす。況やその人の云ひ付ることを背かぬは、常人の道

なり。その如く佛の一々其法を立ておかれてある故に、役に立たの立たぬのと云ふ、りかんなことはなし。佛以來世に傳てこそ、次第に合點する故に、その恩を知て、禮拜供養をなし、坐禪をもし、誦經をもし、何もかも時に應し節に任せてなすを、無作用と云ひ、無自性と云ふなり。されは坐禪と云ふものは、やくにたたぬと云ふ時に、この事珂明かぬ人は、坐して居る時に、色々出來る思はくを只知て見たかよい。それを取りもせす、捨てもせす、百千の事か競ひ出るとも多しともせす、何ともせす、自ら只知て見れは、中々自心の心得も詳になるなり。合點したるときも、坐禪して自ら知りたるかよきなり。坐禪かもしいらぬ物ならは、立つことも、行くことも、臥すこともいらぬものよ。なせなれは、行住坐臥は、四威儀とて定りたることなり。この内いつれはいらぬこと、いつれはいることと云ふことはなきなり。時に臨んで坐禪を叱ることもあれとも、それは坐禪したばかりか、禪じやと屈習するに依て甚た云ふこと、誦經その外一切の作す業ともに、なる程實義にするよきなり。一切世間のことても、佛法のことても、皆是れ空行なれは、空行と知て我儘にせぬは、自ら我を立てぬと云ふものなり。佛法の所作をは、やくに立てぬと云つて、妄に走れは、世間のことともそのやうにありさうなものなれとも、それはいかにも身を碎きて

よきやうに實義にするは、そかん佛法とて、自ら佛法と世間と別々なり。

以二無所得一故。菩提薩埵。依二般若波羅蜜多一故。心無二罣礙。無二罣礙一故。無二有恐怖。右一切事中なんの事もなく、財寶でも取ることもなく、捨ることもなく、なんでもかでも、子細もなく、ありの儘て分別なけれは、何を煩惱と立ち、嫌ひもなく、何を菩提と云つて、得へきこともなく、況や一切のことともその如くなるへし。かくの如く所得なきを、眞の菩提薩埵と云ふ。依般若波羅蜜と云ふなり。この時心にかゝはらさはることなきなり。碍りなけれは、恐怖のおそれなきなり。恐れなきとて六方がましきことにはあらす。故に返すく〳〵も菩提薩埵の般若波羅蜜のと云ふ、色々の名に迷ふことをかれ、みなほめたる名と心得へし。

遠二離一切顛倒夢想。究竟涅槃。一切と云ふ言を具に知るへし。世間色々のことは申すに及はす、佛と見るも顛倒なり、衆生と見るも顛倒なり、なんても目に掛かり分別におつる間のことは顛倒なり。聲を聲とするも顛倒なり、顛倒じやとみるも顛倒なり、爰で分別の手か離れ、無所得なるべき處なり。佛もこの佛果を得んと思ふ所得の念て、往來八千返じ玉ふなり。無所得の時、初めて阿耨菩提を得たと金剛經にある。顛倒と云ふも、夢のおも

はぐと云ふも、同事なり。一切所得顛倒分別の手が離れたらは、初めて夢がさむるごとなり。この時を涅槃を究竟したと云ひたることなり。さて涅槃は不生不滅と云ふごとなり。このうの事を前の題號の終りに本經て明すべしと云ひたれども、はやごのまへて不生不滅のことを澤山に云ふたほどに、云ふにおよばぬなり。

三世諸佛依二般若波羅蜜多一故。得二阿耨多羅三藐三菩提一。右の如く自性本來此の如くなるものと知つたを、今日大涅槃をきはめ終つたと云ふなり。是れ自らのみにあらず、三世の諸佛十方の諸佛も、この大般若の大智慧佛眼を開て阿耨多羅三藐三菩提を得たることなり。阿耨多羅三藐三菩提とは、無上正等正覺と云ふことなり。無上とは自性本來此の如きと知つたより外に、かみつかたはなきなり。正等とは、まさにひとしと云ふごとなり。何とひとしと云ふ時に、山をみれは山とひとしく、川を見れは川とひとしく、物々夫々萬境の上等しきなり、是れを平等と云ふなり。正覺もその如くなり、物々の上一つも覺え違ひはなきなり、正覺と云へは、ものともなくよいやうに聞ゆる。汝か思はぐなり。然る時に、この涅槃は、この事知つた人計りか究竟したかと云ふ時、一衆生として涅槃を出てたるはなきなり。迷も涅槃の迷、悟も涅槃の悟なり。迷て涅槃をいでず、悟て涅槃をいらず、出入のなきことなり。何やらの經の中に、涅槃にいるの佛もなく、成佛したる佛なしと云ふことかあつたも、この事なり。迷ふたと云ふは、己か家に居なから、忘れて餘所の家に居ると思ふやうなものぞ。我か家じやと知つたと云ふても、今初めて己か家に入りはせぬ、本來より本宅なり。然る故に、本覺〳〵と云ふことを云ふなり。しからは我は本より涅槃不生不滅の所に居ると、それは、それもはやに己か家を餘所にした。

故知般若波羅蜜多是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除二一切苦。眞實不虛。

呪陀羅尼は、唐の言葉にして、總持と云ふことなり。畢竟心の名なり。總持とは、すべてたもつと云ふことなり。自心能く知つて見よ、よきことあしきこと、長きこと短かきこと、聲も色も、なんでもかでも對する儘に、すべて通して一も餘ることかなきを、總持と云ふなり。この自心般若波羅蜜は、誠に大神通不思議の呪なり、大に明かなる光明遍照十方世界呪なり、是れより上のなき無上呪なり。上かなきに依て、又下と云ふことともなきなり。何にたくらぶへき物もなく、等しき物もなきを、無等々呪と云ふなり。自心の本然なる處を、色々にほめて云ひたることなり。右初めより終りまて云ひたる所を、念頃に知つてみよ、一切苦を離れ、一切眞實にして、みたくなることかなきなり。かく言へは、いつ

か眞實なぞと二物か出來て持てをる所かあるほどに、よく〳〵照すへし。是れより末の義理を知つていらぬこと、死句になり、餘のことになるほどに、わざとしるさぬなり。

故說二般若波羅蜜多咒一。即說レ咒曰。揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提娑婆呵。般若波羅蜜多心經。右は時の物語を書付て見たれは、やくにも立たぬことなれとも、彼の唐の人も云ひける糠をなむれは、米にも折節あたるといへる如く、千に一つも心に移ることもあらばと書いつくる。くときこともあり、たらぬこともありき。是れを判にあるると云ふことにてもなく、人に見せると云ふことにてもなく、只戯事のやうなやこと、見てのち丙丁童につたへ給はるべし。

〔丙丁童〕火のことをいふ。即ち火に投して焚くなり。

心經抄終

霧海指南

解題

霧海指南は、黒瀧山の潮音禪師か道俗のために四弘六度のことを垂誨せられたるもの、いはゆる霧海の羅針盤たらむか。

傳を按するに、禪師は、俗姓楠田氏。名を道海と云ひ、肥前の產なり。いはけなき時、慈雲寺泰雲に投す。十七歳のとき、江州瑞石山の如雪和尙に見ゆ。のち大光普照國師隱元和尙の長崎に來られしを聞き、直にゆきて參禮せしかど、思ふところありて、辭して瑞石にかへりぬ。のち二たび國師に槑山に見え、つゐに國師の用處を徹見したりといふ。元祿八年八月二十四日寂す。世壽六十又八、戒臘五十又五。

禪師は、博く禪敎神儒を學ぶ、行解相應し、その化功もまた大なりき。けだしまた槑門の龍象なり。

霧海指南序

前佛はすでに去り、後佛はいまだ世に出でず、此二中間に一切衆生邪見の霧海に迷ひ漂へり。此故に四弘六度の磁石の針を與へて、指南して覺岸に到らしめんとす。若し覺岸に着きたる人は、磁石を認めて實法の會をなすべからず。此國二百年來、霧海の中にたゞよひながら、磁石を用ゆる事をしらず、迷に惑をかされて、流浪しけるを見て、止むとを得ずして假に此說を作る。文辭の拙きを以て、意を害し玉ふべからず。

霧海指南

潮音禪師

夫學般若の菩薩は、僧俗男女を論せず、先づ四弘の願、六度の行を修して、人々具足箇々圓成しける佛性を明むべし。佛性と云ふは一心のこと也。此心は一身の主人、萬法の根元也。譬へば刀脇指の第一に肝要なる所はめくぎ也。めくぎなきときは名作とても用に立つべからず。人々に一心のめくぎ抜け候へば、世間出世間のこと成就すべからず。世尊五千餘卷の經を說き玉ふも、此心をしらしめん爲め也。又祖師一千七百則の公案も、此心を直指するのみ也。此心に眞心妄心の差別あり。眞心とは佛性のこと也。妄心とは眞如の自性海より一念の波起るを申す也。此二つの差別あるやうなれども、波を離れて水もなく、水を離れて波もなく、体用もとより一体也。又此色体を離れて本心もなく、本心を離れて色体もなし。此故に心經に曰く、色即是空々即是色と、又眞言家には卽心卽佛と申す義を立てたり、よく〳〵かやうの道理を辨へたまふべし。佛衆生本より同體なりと雖も、衆生は此心に迷ひて、六道に輪廻して、苦海に沈み頭出頭沒す。此故に諸佛菩薩、慈悲を起して此

衆生を救ひ玉ふに、最初に四弘の願を起す也。四弘の願と申すは、衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成の四つ也。衆生無邊誓願度、此心はほとりもなき衆生の六道輪廻するを救ひ取らんとの誓願也。煩惱無盡誓願斷、この心は數かぎりもなき煩惱の病を斷せんとの誓願也。法門無量誓願學、此心は佛の法門八萬四千あり、これを學し盡さんとの誓願也。佛道無上誓願成、此心は無上の心法をさとらんとの誓願也。

畢究菩薩の四弘願と申すは、一切衆生を救ひ盡して、其後我身成佛せんとの誓願也。此願なくて修行するの人は、自身得度の望みばかりにて、利益すべてあるべからず。是れを聲聞の根性とす。佛も殊更に嫌ひ玉ふ世間の中にも聲聞の根性ある人は、我身ばかり樂をきはめ他人は迷惑に及べともかまわざるが如し。斯る人一天の王、一國の主、一家の長となれば、天下國家の群生畜類まで塗炭に逢ふこと限りなし。惣して人の上に居る人二惡をなせば、其下たる人惱亂すること限りなし。一善を起せば、其下たるもの優樂すること極りなし。現世にて大名高家に生れ、我身一箇の榮花を極め、下萬民を救ふ慈悲なき人は、未來は必ず無間獄に落ちて、其果報盡きて、又餓鬼道に入つて、又其果報終つて、たまく人道に生れ出れとも乞食貧人の賤しき身に生るゝ也。今生位高く富貴なる人、能くく此

道理を辨へ給ふべし。高き所より陷る人は過ちすると強きが如し。涅槃經に曰く、發心畢竟二不別」この心は發心のはじめより一切衆生を得度するの心也。故に畢竟の佛と一體と云ふ義也。如是二心先心難」此心は上に云ふ所の發心畢竟の二心也。先心を難しとすとは、他人を救はんとする願ある人を得難しと云ふ義也。自未得度先度他」此心は自身は未だ成佛せずして他人を得度せんと云ふ義也。是故我禮初發心」此心は佛も初發心の菩薩を禮拜して貴み玉ふと云ふ義也。初發心已爲人天」此心は初發心の時に人天のために說法敎化すと云ふ義也。勝出聲聞及緣覺」この心は聲聞緣覺の二乘に勝れたると云ふ義也。初發心より化他の願ある人を大乘の菩薩と申す也。

六度と云ふは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠の六つなり。

先つ布施と申すは、天竺の辭にて檀那と云ふ。慳貪の病を治す。布施に財施、法施、無畏施とて三つあり。財施とは一切有緣のもの、或は無緣のものまでも財寶を施すを申す也。國王大臣は、第一民百姓家中のものに、それくの分限に知行財寶を施し、次には三寶、乞食、貧人、畜類までも財寶を施すを財施と名付けたり。法施と云ふは、佛法の道理を知らざる人に、一句半偈なりとも說き聞かせて、三寶をあがめ、三世の因果あるとをしらしむ

るを法施と申す也。財施よりは法施の重きことをよく〳〵辨へ玉ふべし。譬へは財寶を人に施しても、五十年か三十年の内自由するのみにて、身の後には用に立つべからず。法施の重きと申す理は、現世一生惡しき道に立ち入らざるのみならず、未來までもこの一句半偈の大乘の法理によりて、佛果菩提を成することなれば、有りがたきことにあらずや。余常になげくとあり、愚痴なる人は壹錢半紙を得ても喜びの心面にあふる、又大乘法理のそこばく有りがたきことを說き聞かすれども、是れを尊みて有りがたしと思ふけしきある人はまれなり。淺猿しきことにあらずや。無畏施と申すは、人間或は畜類虫類迄も恐れおのゝく樣に、辭にてもあれ、又は振舞もせざるを無畏施とは申す也。惣じて慈悲の心より三つの施を行すべし。慳貪の心、高慢の心、名利を求むる心にて布施すれば功德少し。施者受者施物の三つに、物我一体の道理を知りて施すを、三輪空寂の布施とは云ふ也。三輪空寂の布施は六一粒の米十方に遍滿する功德あり。大論に曰く、檀は寶藏たり、常に人に隨逐す。檀は破苦たり、能く人に樂を與ふ。檀は善御たり、天道を開示す。檀は善府たり、諸の善人を攝す。檀は安穩たり、臨命終のとき心怖畏せず。檀は慈相たり、よく一切を救ふ。檀は集樂たり、能く苦賊を破る。檀は大將たり、能く慳惜を伏す。檀は淨道たり、賢聖のよ

る處。檀は積善たり、福德の門。檀は能く全く福樂の果を得。檀は涅槃の初緣、善人衆中に入るの要法、稱譽讚歎の淵府也。處衆兼難の功德、心悔恨せざるの窟宅、善法道行の根本、種々歎樂の林藪、福貴安穩の福田、得道涅槃の津濟也。

持戒と申すは、天竺の辭には尸羅と云ふ。破戒の病を治す。戒に大乘小乘の差別あり、小乘戒は輪廻をいとふにより、淫戒を第一に立つる也。大乘戒は慈悲を專にするにより、殺生戒を第一に立つる也。此戒に品多し、三皈五戒六齋戒は在家の男女の通戒也。沙彌に十戒あり、比丘に二百五十戒あり、比丘尼に五百戒あり、是れは比丘戒とて小乘戒也。梵網十重四十八經戒は在家出家共に持つ。是れを菩薩の大乘戒と申す也。比丘の二百五十戒を持つより、菩薩の一戒を持つ功德多しと云ふこと、梵網古迹に委敷明かせり、戒遮持犯とて戒のさばき殊の外六ケしきことなり、爰にてはあらまし申す也。三皈と申すは、皈依佛、皈依法、皈依僧の三つ也。三皈を三寶とも申す。三寶に一体三寶、別体三寶、住持三寶の三つあり。一体三寶と申すは、宗鏡に曰く、一体三寶とは只是れ一心なり、心性自照より覺照するは即ち佛寶なり、心体本より自性を離れざるを法寶と名付けたり、心体不二なるを僧寶とは申す也。別体三寶のことは略して申さず。住持三寶と申すは、繪像木像

を佛と崇め、拜み貴ぶを佛に皈依するとは申す也。經陀羅尼を讀誦解說書寫し、又正法を說く人あらば、千里萬里なり共行きて聞くを法に皈依するとは申す也。剃髮染衣して僧形を具する人を尊敬するを僧に皈依すると申す也。佛門に入つて佛弟子となる人は、先つ三皈戒を受くべし。其仔細は人の家に入る時先つ門戶より入るがごとく、三皈戒を受けずして佛法門に入るとは成りがたし。三世諸佛菩薩の前に向つて、過去無量劫の罪業を懺悔して、今日より外道邪宗に歸依せず、盡未來際佛弟子とならんと誓を立て受くる也。この三皈戒を受けたる人は三惡道をのがれ、又晝夜の六時の中に三十六部の守護神附隨ふと經文に委しく說けり。其故に世間の徒にして役に立たざるものを、三寶のすてものとは申す也。聖德太子御憲法に、三寶に皈依する事を敎へ玉へり。亦古德の曰く、山に玉あるときは草木うるほひ、泉に龍あるときは水つきず、住所に三寶あるときは善根增長すると。然らば一國一郡を治むる國王大臣は、先つ三寶を守護し、涅槃會上の付屬を忘れ玉ふべからず。五戒と申すは、殺生、偷盜、邪婬、妄語、飲酒の五つ也。殺生戒と云ふは、一切有情の身命を殺さざるを云ふ也。在家は殺生戒を受けてよりは、我爲めに此魚鳥を殺して、料理して振舞ふと聞きては食すべからすと也。唯干魚、死したる鳥、是れを淨肉とて在家には佛も

許し玉ふ也。菩薩に慈悲の殺生と云ふとあり。一國一家に大惡人有りて、多くの人を迷惑さするときは、此惡人ころしても苦しからずと佛も許し玉ふ。惡人惡畜生を殺す時に、殺す人瞋恚の心一念なりともあつてころさば、皆罪業となるべし。殺しながらも慈悲の心を以て殺すときは、罪業あるべからず。惡人惡畜生は殺すと雖とも、自業自滅の理也。今生にして短命なる人、或は病者なる人は、皆過去にて殺生をなし、衆生に苦しみをかけたる罪業の報也。今生又殺生を好む人、未來の果報を能く〳〵鑑み玉ふべし。大名高家の無理の殺生を好み、家來百性を多く殺害しける人、國家を亡し、又其身も失ひたると目前に多し、擧げて數へがたし。智論に曰く、一切の寶の中には命を以て第一とす、諸罪の中には殺生を第一とす、諸善の中には不殺生戒を第一とす。又曰く、一には常に毒心を抱くと互にたへず、二には衆生惡眼をもして喜びて見ず、三には常に惡念、四には衆生これを恐るゝと蛇虎の如し、五には睡るとき心恐れ、覺めて又安からず、六には惡夢を見る、七には命終のとき狂死す、八には短命の業因、九には身破れ命終りて地獄に落つ、十には人間に生れても短命なり。此十種の道理、又雲樓大師放生文を見て、殺生を愼しみ玉ふべし。偷盜と申すは、他人の財寶を盜取る事也。一草一針迄も主あるものを案內なしに取用ゆる

は、偷盗戒を犯すると佛も制し玉へり。三寶互用とて、佛物を取りて僧のつかひ、又僧に施す物を佛と法の事につかふことを戒め玉へり。いま晝がんどうをする大賊人有り、智識長老座主阿闍梨と呼はれ、位にのぼりて僧の行法なき人は、法位を盗んで法王の座になほるもの也。又國王大臣の其位に居て其行作のかげたる人は、其官位俸祿を盗むに非すや。此二つは大なる盗賊なる故に誰も制法するものなし、悲み歎しきとにあらすや。今生乞食貧人の下賤の身に生るゝ人は、過去にて他人の財寶を多く盗み、官位俸祿を空しくつひやしたる報也。今生又偷盗をなす人、未來は餓鬼道に墮して苦みを受くべし、憐れなるとに非すや。智論に曰く、偷盗に十罪あり、一には物の主常に嗔る、二には人に疑はるゝ、三には非時に行して籌量せず、四には惡人を友とし賢善を遠くはなるゝ、五には善根を破る、六には罪を官より得るとあり、七には財物没入す、八には貧窮の業因をうゆる也、九には死して地獄に入り、十には若し人間に生し勤求して財を求むれば五家に失はる、王或は賊、或は火、或は水、或は不愛の子にとらるる也。斯の如くの十種の罪業をかんがみて、偷盗を慎ひべきと也。

邪婬と申すは、在家の男子は婦人一人を持ち、女子は夫一箇を守り、六齋日、或は産後産

前等に犯せざるを邪婬戒を持つとは申す也。諸の罪業のある中にも、此婬欲に過きて人間の惑の深きはなし、故に佛もつよく制し玉ふ也。今生にて夫婦の間あしくして、朝夕嫉妬の心にていさかひする人は、過去にて邪婬戒を犯じたる報也。今生又邪婬をほしいまゝに行する人は、未來は畜生道に墮して、たまゝ人間に生しても、女は男を嫉み、男は女を妬み、夫婦共に修羅道たゆべからず。いにしへより國王大臣の國家を亡し、其身を失ふをかんがへみるに、三國ともに是の邪婬戒を破りし故也。貴きも賤きも此邪婬戒をよくく慎み玉ふべきと也。此戒正からずして家の治ることはあるまじき也。佛戒には沙門は不婬と説き玉へり。

妄語戒と申すは、かつてなきとを有るやうに申しなし、有る事をなきやうに申しなすと也。主人の前或は他人に對してありのまゝに説けば、其人迷惑に及ぶとあるを、善きやうに申しなすをば、方便の説とて佛も許し玉ふ。眞に悟りもせぬ長老の愚俗をたぶらかし、下炬拈香して後世をたやすく受取りて助げんと云ふ、是れ大妄語なり。只錢をほしきと申すは眞語なるべし。智論に曰く、妄語に十の罪あり、一には口常にくさし、二には善神遠かり非人たよりを得るなり、三には實語をすれども人信せず、四には智人の謀議にあしなず、

五には常に誹謗せられて惡名天下にきこゆ、六には人に敬はれず、七には常に憂愁多し、八には誹謗の因業をうゆるなり、九には身壞して命終りて地獄に落つ、十には人間に生れても常に誹謗せらる。此十種の罪業を鑑みて妄語を愼み玉ふべし。此四戒を四重禁戒と申す。又は楞嚴經には性戒と立て、諸戒の根本と定めたり。性戒と云ふ仔細は、人々の本性より起りて犯ずる戒なるゆゑに、性戒と申す也。四重禁戒と申すは、此四つ諸戒よりおもしと云ふ義也。四重禁戒より外の諸戒は輕戒とて、此重戒を能くたもたん爲めのかきかべにて、遮戒とは申す也。

飲酒戒と申すは、酒をのむ事也。酒は迷亂起罪の本とて、佛殊更に戒め玉ふ。大論にも三十七の過失あるとを明せり。先つ酒を好んで呑む人は、士農工商の面々の作業をかきて、二日醉をして大疫病やみたるあげくのやうに成りて、世間の勉めなりがたし。飲むうちにも大酒をすれば云ひまじきとを云ひ、すまじきとをして、喧嘩口論を仕出すとまま多し。財寶を多くつひやすは酒に過きたるはなし。又四重禁戒も一時に破れ、佛法教法とも酒をのみぬればつとめかけ、はては用に立たず、今時在家人の父母供養の爲めとて、年忌月忌に旦那の僧を請じて齋の上に酒を呑せて諂ひ亂舞に及べり。父母追善の爲めならば酒をの

ませざるこそ功德なるに、ふるまう旦那、のみける僧、是れを呑むを功德と思へり。淺猿き有樣也。往昔大唐に貧女あり、娘一人持ちけるが、病死しけるに因りて、此母なげきのあまりに自身のかみを切りて、錢五百文に代へて、一兩日過きて、沙門五人門前を過ぐるを見て、家に請じて彼の娘の爲めに金光明經を賴みて讀誦させたり。其布施に件の錢を施しける。五人の沙門其家を出て二三里行きて酒屋ありければ、一僧云ひけるは、思ひもよらざる布施をとりける程に、此酒屋によりて酒をかひ呑まんと云ひければ、虛空よりさけびて云はく、某先きの讀誦の功力によりて生天せんとす、各布施の錢にて酒をかひ呑み玉はゞ、某又地獄に落つべしと申しければ、五人の僧慚愧の心起りて、其後五戒を正しくたもつて、佛果を成就するとあり。佛事に僧に酒を呑ますは大惡事なるべし。三國の傳記を見るにも、國王大臣の天下國家を滅し、其身を失ひしは、此酒を好むゆゑ也。佛世に祇陀太子とて國王の太子あり、この太子酒を飲みぬれば、慈悲起りて萬民をめぐみ、又酒を呑まざれば殺害の心起ると甚だし。佛この太子に酒を許して呑ませ玉ふとあり。今の世の國王大臣も慈悲の心起り、人を惠むとあらば飲み玉ふべし。惣じて五戒を破る人は、先つ天にあつては五星にたがひ、地にあつては五嶽に背き、吾身にあつては五臟を破り、世間

にあつては五常をそなふ。佛の五戒は儒の五常に同じ、仁を行ふ人は殺生せず、義に達する人は盗賊せず、禮を執る人は邪婬せず、信を守る人は妄語せず、智を師とする人は飲酒せず。五戒五常の三つ、名は替りて義は同意なり。今時惡智識あつて、愚人を集めて説法して曰はく、我等が様なる沙門の身にさへ持ちがたき五戒を、大俗人は猶ほ成りがたかるべしと申すにより、愚俗之れを聞て尤もと思ふ也。ひがごと是れに過きたるはなし。子細は五戒もし僧の身にさへ持ちがたしと云へば、盗をし、旦那の女房を犯し、うそをつき、大酒をのみ、殺生せんとの巧み也。箇様なる説法は、皷惑とて人にあしきことを、大皷つゝみにてはやしてすゝむるが如し。又今時に虚頭を學ぶ禪宗あつて、眞實の悟はなくして、酒をのみ肉を喰ひ、婬を行じ盗を行じても、我がさとりたる本性のさまたげにはさしもならぬと説く人あり。かやうの惡魔外道の説法、假初にも聞くべからず。佛曰く、五戒を持たざれば、狐顙野干の身をさへ受けがたし、況んや清淨の佛果をや。惣じて菩薩戒の心は破りても利益あるとあらず、犯戒とは申すべからず。子細は菩薩戒は意業を第一とする故也。聲聞戒は事相を第一にする故に、四重禁戒を一度破れば、斷頭罪とて比丘となるとはならざると也。在家の優婆塞優婆夷は菩薩戒を持ちて相應なると也。故に日本帝王の即位

（優婆塞、優婆夷）共梵語、優婆塞、此に清淨士といひ、優婆夷は、清淨女といふ、その自行清淨にして佛法に承事するをいふなり。

の時に、必す菩薩戒を受けて、帝位にはなほらせ玉ふと也。是れを以てかんかへ見るに、萬人の上に居る人、五戒なくしては萬の政道正かるべからず。宋の文帝、何尚之といふ臣下に問ふて曰く、謝靈運朕に告けて云く、儒書は俗を濟ふの眞要也、佛經を以て指南して治めば、率土の濱皆その化に從はゞ、朕居なから太平をいたさんと。何尚之答へて云く、釋氏の教可ならずと云ふ事なし、如何となれば百家の鄉、十人五戒を持つ時は、十人ながら淳謹也、百人十善を修る時は、百人和睦す、此風教を傳へて天下に周き時は、仁人百萬ならん、能く一善を行するときは一惡を去り、一惡を去るときは二刑やむ、一刑家にやむときは、百刑國にやむ、是れを陛下の居なから太平を致すと云ふもの也。是を以て知るへし、佛戒を能く持つときは、天下國家治まらすと云ふことなし。

忍辱と申すは、天竺の辭には犀提と云ふ。瞋恚の病を治す。誹謗、罵詈、貧病、寒熱、飢渴等の一切の逆境、堪忍のなりかたき事を堪忍するを云ふ也。忍の德たると、持戒精進も及ふてと能はず。然れば少しのことにても堪忍せすして、人を打たゝき怒る者あり、是れは瞋恚の業深きゆゑ也。惣して此瞋恚の業ある人はよく〳〵慎むべきこと也。國王大臣の國家を滅し、身分を失ふは、慈忍の心なき故也。古德の曰く、一念の怒の心起れは、百萬

（非人）鬼神の類をいふ。

の障門をひらくと。一切の善根功德をやきほろぼすは、瞋恚の火に過きたるはなしと古今の典籍に委しく載せたり。瞋恚の業は、現世にては人にいやがられ、未來にては修羅道に墮して、種々の苦を受けると佛も說き玉ふ也。忍辱經に曰く、忍を修せさるものは、所生の所に佛世に逢はす、若し人の身を得と雖も、みめ形醜陋なり、願と福と相違して天神賢聖の助け惠みもなし、吾今成佛して諸天に崇敬せらるゝことは、忍辱を過去にて行しゝ故也。然れは今生めみかたち端正に生し、富貴にして人に崇敬せらるゝ人は、過去に忍辱を行したる報也。慈忍を常に行する人は十種の利益あり、一には火に燒けす、二には刀にさかれす、三には毒にあたらす、四には水にたゝよわされす、五には非人の爲めにまもらる、六には身相の莊嚴、七には諸の惡道を閉つ、八には願のまゝ梵天に生す、九には晝夜常に安し、十には喜樂を離れすと、月灯三昧經に明せり。

精進と申すは、天竺の辭には毘梨耶と云ふ。懈怠の病を治す。一切の善根功德を委敷進みて勤むるを申す也、佛法世法此精進の心なくしては、萬事成就すると成りがたし。大論に曰く、在家の懈怠の者は俗利を失ひ、出家の懶惰なる人は法寶を滅す。懈怠の人の志は、今日はせずとも又明日すべしと思へり。此心佛法世法に付けて惡しきと也。一時の懈怠は

一生の懈怠也、何事も時をうつすと云ふとよからぬとにて有る也。善事とだに見ば、萬事を放下してなすべし。皆人の面々のすぎたるとの能あやつり、碁將碁の遊興を好む如くに、世法佛法の善事をいそぎ油斷せずば、一切の事成就すべし。念々に無常の殺鬼せめくれ共、人間は五慾の境界にふけるにより、是れを顧みず、此故にいそぎ佛法に入つて修行せんと思ふ者一人もなし。さすがにかやうなる人も後世なしと思はねども、今は年もわかし、此事彼事しすまして其后に、心靜に修行せんと思ふ也。淺猿き志也、無常鬼時を待つものかは。法花經に曰く、我阿難と空王佛の處にて菩提心を起す、阿難は常に多聞を願ひ、我は常に勉めて精進す、此故に成佛を早く成就すると也。

禪定と申すは、天竺の辭には禪那と云ふ。散亂の病を治す。坐禪をせんとするときは、閑靜の處に厚く座物をしき、香をたつべし、坐禪に結跏趺坐、半跏趺坐とて、二つのかわりあり、結跏趺坐は佛の坐也、半跏坐は菩薩の坐也。結跏坐のときは、右の足を左のもゝの上におき、左の足を又右のもゝの上におきて、其後に脊梁骨を竪起して、先つ右の手をあふのけて下におき、左の手をあふのけて上に重ねて、兩方の大指の頭をさし合せて、耳と肩と對し、臍と鼻とおなじやうにして、目を半目ひらき、鼻端を守り、口をとぢ、唇齒

を相さゝへ、舌上のあぎとをさゝへ、出入の息を鼻よりすべし。半跏坐のときは、左の足を右のもゝの上に重ぬべし。心身息の三つをよく調ふべし。心を調ふとは、昏沈せず、散亂せず、無記にならぬ事也。坐禪のとき、第一の病は此三つ也。坐禪する人、よく〳〵此三病におかされざる樣にすべし。何程坐禪をしても、ねぶるか、或は色々のことを思ひ、ぶらりとして坐禪するならば、本の坐禪にてはなし。多分此三病のなき人は稀也。若しあまり上の三病起らば、坐を立ち、經行か又は佛を拜すべし。身を調ふとは、あまり身をゆるりとしすぎ、又身を強しすぎ、身をくゝみすぐれば坐相正からず。息を調ふとは、息のしぶりもせず、なめらかにもなき樣にすべし。惣じて座中に息のあらく出る人は、心中に色々の念起るが故也。此外に眠を調ふと云ふ事あり、節せずとは、あまりねぶらぬやうにしすぐるを云ふ也。又恣にせずとは、余り放逸にねぶらぬ樣にすべしと也。あまり眠をこらゆれば氣がほれ〳〵となつて、工夫が純一にならぬもの也。そをも大疑團起りたる人は各別の沙汰也。食を調ふとは、あまり飢えざる樣にすべし、又飽滿すべからず。此三つを能き程にする時は坐禪しやすし。坐に入るとき、坐に住するとき、坐を出つるときの三つをよく〳〵愼むべし。坐に入り、はじめに身を按摩して、口より舊氣をはくべし。又坐を出

でんとする時も、漸々に心をはなつて身をさすり、手足を按摩してより出づる也。出てよりも身口意の三業をあらくふるまふべからず。坐禪は能くすれば四百四病を治し、あしくすれば病を起すと、天台の止觀にも見えたり。先つ坐禪の作法をよく〳〵辨へて坐すべきと也。扨觀法と申すは、上古は止觀を修する也。止とは一切の境界の相をやめて、正念に住して、唯心のみにて、外の境界なきを云ふ也、若し人只止計りを修すれば、心沈沒して懈怠を起し、衆善を願はず、大悲を起さず、是故に觀を修習すべし。觀とは一切境界の相を分別して、善をつとめ不善をやむるを觀とは云ふ也。止觀相助けて捨離すべからず、止觀を具せざれば菩提の道には入りがたし。中古より以來禪宗の祖師、下機の爲めに公案を與へて、學人に工夫をさせしむる也。されば共初心の學人に古則を疑へと云ふは、かへりて文字の義理にわたりて、あかかりものゝ樣に覺えて、をり〳〵は思ひ出し又はわするゝ也、只卽今見聞の主は何物そと工夫を下すべし。見る主きく主を、行住坐臥のうちによく〳〵眼を付けて見るべし。工夫一片になるときは、行に行事を忘れ、住に住事を忘れ、坐するに坐を忘れ、臥するときは臥を忘るゝもの也。かやうに疑團一枚になるときは、心身共に鐵壁をつき立てたるが如し、かゝる時に一念なりとも悟を待ち、又工夫一片になりたると

思ふ念の起るは大なる病なり。只有とも無とも思はず、思慮分別二點もなかざるとき、氣ある死人の樣に成りて、大疑忽ちに破れて、自己の主人公を徹見すべし。此工夫と云ふ事、在家は成りがたしと思ふべからず。子細は此見聞の主は、起にも居にも離れざるものなれば、我はひまもなし、工夫成りがたしと云ふべからず。又學問もなき程にならずとも思ふべからず。此見聞の主は、文字の相を離したるもの也。貧賤にて成りがたし共思ふべからず。貧賤なる人の見聞の主も、富貴なる人の見聞の主もひとつ也。然らば富貴貧賤學無學老少男女を論せず、此見聞の主人別に替りあるべからず。是れを一味平等の法と申して大乘とは申す也。今時は、諸宗には坐禪觀法の修行一圓失ひたる故に、只禪宗ばかり坐禪工夫はするもの、樣に、在家出家共に思へり。宗々の元祖、何れも坐禪なき祖師はあるべからず。天台宗には一心三觀、眞言宗には阿字觀、華嚴宗には法界觀、淨土宗には十六の觀想を觀ず。今時剃頭の外道あつて、坐禪工夫は末法の衆生はなりがたし、一向に誦經念佛題目を唱へよとすゝめなして、二天四海の男女念佛題目にて耳目をふさぎたる故に、一人も坐禪工夫するものなし。其中よりたまく坐禪工夫する人あれば、似合はざる事をするとてしかるのみならず、惡口をして頓て狂氣せしなどゝ云ひければ、愚痴なる人のあさま

しきはさもありぬべしと思ふて、一坐しける坐禪も止め侍る也。今生無智にして、坐禪工夫の道理のわからざる人は、過去にて坐禪工夫せざる人也。今生又坐禪工夫を嫌ふてせぬ人は、未來はいよく愚痴闇鈍の身に生るべし。坐禪工夫を成しがたきと申す人は、自身坐禪工夫の下戸なる故によりて也。若し上戸にてあらば、人をすゝめてさすべし。三世の諸佛ばんく に出世し玉ふに、皆坐禪して正覺を成ずと佛經には說けり。題目名號も大乘の心より唱へば、皆是れ坐禪工夫に替るべからず、正人邪法を說けば、邪法も正法となる、邪人正法を說けば、正法も邪法となるもの也。若し錯つて此邪法を信仰する人は、過去にて邪師に緣あつて、邪法を信ずるが故に、今生又正師に逢ふて正法を聞け共、却つて誹謗を生ずる也。此國二百年來禪家濟洞の二宗、日本の古德祖師の公案に、下語著語など付けおきたるを取りあつめて、是れを參則と定めて、碧前百則、碧岩百則、碧后百則、此三百則を數へて破參大悟と號して、行卷袋密參の箱に收めて、是れを一大事因緣と思へり。若しこの行卷袋密參の箱、火事に逢ひ、或は水に流れたらば、一大事因緣悉く一時に滅却すべし。此かゞへ參を敎る長老の中にも、多聞博學の人あり共名利高慢の心にさえられて、是れをあやまりと見てやぶるほどの人もなし、只烏の死したる鼠を取りて秘藏するに同

し。是れは余が惡口を申すにては少しもなし、佛經祖錄の中に先德の戒めしと也。よく〳〵眼を入れて見玉ふべし。此著語下語の意も一圓了解しえず、たゞ古德の付けおきたるを、漸く師家に本分の句、又現成の句を敎ゆられて、云ひあてゝおくばかりなり。兒童なぶなぶを說く樣に覺え侍るゆゑに、自己の本心はくらくして、破參したる智識長老の行作も愚俗にかわる所なし。あまつさへ法慢をして諸宗をあなどり、正法を誹謗す。この故に三百年以來禪の灯消えて、正眼の人一個半個もなし、此かぞへ參は大德寺養叟よりはじまりたると見えたり。一休の自誡集と云ふものあり、是れは此數へ參をしかりたると也。今時數へ參を敎ゆる智識長老も、此かぞへ古則、何れの世に誰人の仕出したると云ふことをだにしらずして、是れを仕すまさねば破參して、出世長老になりがたしと斗り思ひて、何の利益あるともしらざる也。余幼年のとき、此敎壞にあへり、後來眞正の智識に逢ふて此非をしる。又後學の此惑亂を數ふらんとを恐れて斯く申す也。衆寮江湖とて多の學者をあつめて、此數へ古則を敎へて、光陰を空しくおくらするを智識とやいはん、外道とやいはん。又二等剃頭の外道あり、是れは前に申したる外道よりは、少しは增しと見ゆれども、却つて空腹高心にして、多くの愚俗を敎壞する故に、罪業深しとぞ見る。此外道は佛經祖錄のきれはしを見て、坐禪を愛する人は、坐禪ならでは成佛しがたしと思ひ、戒法を愛する人は、戒法ならでは成佛しがたしと思ひ、念佛を愛する人は、念佛ならでは成佛しがたしと思ひ、面々の愛する方を是と心得て、祖師の活法は、無法を本とすることを夢にも知らず。又不立文字の宗は、戒律念佛等はなきものゝ樣に思ひて、坐禪戒律念佛する人を笑ひて、自分のさとりは即心即佛と心得て、此見聞の主を認めり、是れは外道禪の我見なり。又坐禪して一念も起らざる所を本來の面目と思ひて、自慢するものあり、是れは默照邪禪也。宗門に師承傳法正しき善知識に參じて、正眼を決擇して、印可證明をも受けず、自分に印可しておく、是れは無師自然の外道也。邪をあらはさねば、正法あらはれがたき故に、葛藤を說き侍る。孔子も似て非なるものをにくみて、紫をきらふは朱を奪へるによりてとぞ。坐禪工夫すれば魔にをかさるゝと申すは、一念なりとも我見高慢あれば、はや內魔をかしたるなり。內魔あれば外魔自から來る、楞嚴經に五十の魔境を委しく明せり。畢竟は不見不聞を以て、魔を退治すべし。これより又坐禪の功德を說く。坐禪儀に曰く、珠をさぐるには波の靜なるときなるべし、水を動かせば取ることかたかるべし。定水澄淸なれば、心珠自ら現る。圓覺經に曰く、無礙淸淨慧は皆坐定より生ずと。爰に知る、凡をこえ、聖を超ゆ

るでとは必ず靜緣をかり、坐脫立亡はすべからく定力によると云ふことを。起信論に曰ふ、此三昧を修學する人は、十種の利益あり、一には常に十方諸佛菩薩に護念せらる、二には諸魔惡鬼に恐怖せられず、三には九十五種の外道鬼神に惑亂せられず、四には甚深の法を誹謗することを遠離し、重々の業障せん〳〵に微薄也。五には一切の疑と、諸々の惡覺觀を滅す也。六には如來の境界に於いて信心增長することを得たり、七には憂悔を遠離して生死の中に於いて勇猛也。八には其心柔和にして憍慢を捨て、他人の爲になやまされず、九には定を出でずと雖も、一切の境界の處によく煩惱を消損して世間を願はず、十には若し三昧を得ば、一切外緣の音聲の爲めに驚動せられず。先佛偈に曰く、若し人靜坐一時なりともつとめは、恒沙の七寶塔を造るにまされり。寶塔は化して塵となる、一念の靜心は正定を成ず。正法念經に曰く、四天下の人の命をすくふよりは、一食の間の坐禪にはしかじ。大覺禪師の坐禪論に一時の坐禪は一時の佛、一日の坐禪は一日の佛、一生の坐禪は一生の佛とあり。龜山法皇の御世に、禁中宮女の居りけるつぼね〳〵の戸、故なくて夜にひらきける、法皇是れをなやみ玉ひて、天下の諸寺諸山の高僧貴僧に勅ありて、祈禱をさせられけるに、一圓しるしなかりき。聖一國師の弟子普門和尚へ勅問ありけるは、禪宗にかよ

うの魔障をのぞく法ありやと。普門和尚二十箇の僧侶をつれて、禁中にて一夜坐禪させ玉へば、其夜より魔障やむ。又法皇深く叡信あつて、南禪寺を建立して、禪宗を崇敬し玉ふあまりに、法堂地築の時、自身に錦囊に土を入れ運び玉ひける。皆是れ坐禪の功能ありがたきにあらずや。

智慧と申すは、天竺の辭には般若と云ふ。愚痴病を治す。此智慧に二種あり、一には根本智、二には後得智也。根本智と云ふは佛性の事也、或は本性、或は本心、或は本分の田地、或は本來面目、名は替はれども躰は同じ。此般若の智くらくしては、世間出世ともに成就すべからず。然る故に般若は冥闇を破る大明灯、貧賤を扶ふの如意珠、苦海を渡るの船筏、病苦を除くの良藥也。惣じて菩薩の云ふ、波羅蜜は般若を第一とせり。若し般若の智闇きときは、餘の五度を修しても有漏の行となるべし。智論に曰く、帝釋意におもへらく、若し般若是れ究竟の法を行せん人は、只般若のみを行せん、何ぞ餘法を用ゐん。佛答へて曰く、菩薩の六波羅蜜は、般若波羅蜜を以て、無所得の法を用ひて和合する故に、是れ即ち般若波羅蜜也。若し只般若行じて餘法を行せざる時は、功德具足せず。譬へば愚人の飯食の種具をしらず、醬油是れ衆味の主なりと云ふを聞きて、醬油ばかり呑んで味を失ひ、患

を出だすが如し。行者も又斯の如し。着心を除かんとする故に、唯般若を行ずることを教ゆと雖も、かへりて邪見に墮して。善法を増進することなし。若し五波羅蜜を和合せば、功徳具足し、義味調適せん。今時斷見破相の僧俗、此大論の文を鑑み玉ふべし。大悟見性の人は、此六波羅蜜は修せざることの様に心得て、眞正の善知識の六度を行ずるを見ては、却つて誹謗を生せり、つたなき邪見なり。後得智とは、化他利益の方便智を申す也。此方便智は、佛經祖錄其外あらゆる世界の言語又藝能を辨知して、衆生の性慾にしたがつて教化するを云ふ也。是れを差別智とも申す。若し人根本智をあきらめ得たりとも、差別智闇くしては、衆生の化度なりがたし。楞伽山頂經に曰く、菩薩速疾の道に三つあり、一には方便道はよき因縁也、二には般若道はよく寂滅に至る。是れを以て、般若に方便なくば無爲の穴に沈れん、方便に般若なくば幻化の網に立入る。二輪滯らずば、一道かくることなし。權實ならず行じて正宗まさにあらはるゝことも也。般若方便の二つ相たすけて、自利々他は成就するもの也。今時無師自然の外道、根本智はくらくとも、せめて差別智なりとも明かなればよかるべきに、差別智さへ闇き故に、善知識の善惡邪正をも辨せず、只我見を長じて、多くの僧俗を敎壞して邪見に墮せしむ。惣じて佛の法門八萬四千あり、是れをすぶ

るときは六度也。是れをつゞむるときは三學也。此三學をつゞむるときは一心也。一心に一切を具す。故に曰く、頓に如來禪を覺了すれば、六度萬行躰中に圓なりと。菩薩は三大阿僧祇劫を經て、四弘の願六度の行を修して、衆生を敎化し盡して正覺を成ずる也。僧侶發心の志あらば、先づ四弘六度を行ずべし。今時坐禪工夫を暫時もなしぬれば、我も大悟、彼も見性と云つて、行業はあら凡夫よりは猶ほあさましきものあり、正因を雖も却つて惡果を招くと云ふは是れ也。正因修行の人は、願行を第二にすべし。たとひ今生にて大悟せずとも、大菩提心を發して修行の正道をあやまらずは、此悲願力に乘じて、地獄に入つては地獄の能化となり、餓鬼に入ては餓鬼の能化となり、畜生に墮しては畜生道の能化となり、人道に出ては人間の能化となり、天上に生じては天上の能化となつて、終には正覺果滿を成すべし。若し一歩ふみたがへは、千里の路をあやまる也。願行は車の兩輪、鳥の兩翼の如し、一つをかきては用に立つべからず。永明壽禪師曰く、行あつて願なくば、其行必ず孤、也願あつて行なき人は、其願必ず虛也。行願相從て自他兼利すべし。華嚴經に曰く、大願を發せざれば魔に攝待せらる。是を以てしるべし、願行は修行大綱なる事を。或人難じて曰く、初發心より化他することを圓了解しがたし。答へて曰く、菩薩に悲增の菩

薩、智增の菩薩のかはりあり。智增は自身成佛して後に利他せんと也、悲增は一切衆生を救ひ盡して其後に成佛せんと也。此二つ畢竟は同意なり。子細は萬法唯心の道理なれば自他一体也。箇樣の疑心のおこり待るは、自分聲聞の根性あるがゆゑなり。初發心より利他の願ある人は、佛果に同じとあれば、大發心の人は僧侶男女によらず、諸佛の不動位に入りたる人也。有りがたき事にあらずや。華嚴に曰く、菩提心は、種子のよく一切諸佛法を生ずるが如し。又華嚴に曰く、常に地獄に處すと雖も大菩提をさえず、若し自利の心をおこさば、是れ大菩提の障也。

或問如何是般若。余驀拈筆頭進云。畢竟作麼生。擲下筆退去。

霧海指南 終

ねころひ草

解題

閑田子の畸人傳に據るに、丈草禪師、俗姓を内藤氏といひ、尾州犬山藩の士なり。はやく母をうしなひ、繼母に仕へて至孝なり。繼母、子あり、すなはちこれに家をゆづらん欲し、手の疵をいひたて、家をいで、髮をそりこぼちぬ。偈あり、

多年貧屋一蝸牛。化做二蛞蝓一得二自由一。火宅最惶涎未レ盡。偶尋二法雨一入二林丘一。

實に貞享元年八月五日のことにして、その歳二十五なりきといふ。これより玉堂和尚に依りて一大事を明らめ、のち俳聖松尾桃青の門にあそび、其角、嵐雪、去來らとならひ稱せられて、蕉門四哲の名あり。桃青の身まかりてのち、義仲寺のちかき丘のうへに小庵をむすびてかくれ、つねにこゝに寂をしめす。時に永祿十七年の春二月二十四日なり。

ねころひ草は、禪師が流俗を警ひためにとてかきつゞけらしにや、いとありがたきものにして、閑田子も、その名はねころひ草なりといへれど、ねころびては讀みかたきものなりと

いひき。その文もまた句々珠をのべたるごとく、洵に當時希れに見るの好文字なり。そもこの書は、享保元年、禪師の十三回忌にあたりて、その教へ子なる方舟、魯九が徒、はじめて梓にのぼせり。今や舊本をもて校合し、此に載するごとゝなしつ。

ねころび草

丈草禪師

心にまかせたる身ならば、いかでかゝるものうき世の中には生れ來たらん。すでにかく生れ來て、ものうき世の中に、いかで此身の心まかせならんや。猶このすゑ久しくも、山水のとゝまらぬことわりを悟ることなく、たゞ目になれ、耳にふるゝ品々を、まことゝのみ思ひくらさば、いかなる境にか迷ひ、いかなる苦みをかうけなん。「明日ありとおもふこゝろにほだされてけふもはかなく暮しぬるかな。」と聞えしは、むかしも今も、この道のでゝろにかゝらぬにはあらねど、ひしゝくゝと思ひきはむる人いまれなるにこそ。むべなるかな。世の人もものこゝろつきて、物ごとしのばしく、いつとなくさしむかふ鏡のうちより、かぎりなき色にめで迷ひ、わが粧ひをつくろふは、人のよそほひにまよふがためなり。さて品々にうつれるは、ねたみの角たゆめるひまなく、心ひとかたになづめるは、おもひの刃むねをけづれり。くる夜も、あくる夜も、うつゝ心なき迷ひに、あと追ひかくる髫髪童、いくらともなく出できて、ともし火のもと、燈のほとりに、はまの座とりまはしたるは、

〔八苦〕 生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦なり。

いつの程の年月にやと、うち驚かれける夫婦の顔むせ、眞葛が原に風さわぎし情も、いつしかあら竹のすげなき友すれのてゐ、梅かほる夜の月影は消えつゝ、ほし菜懸けたる軒の松風とは吹きかへぬ。貴きもいやしきも、身をわけたるいとをしみは、野にも山にも離れがたし。たまくにさゝくる佛の花をだに、まづこれをあたへて、しばしの泣をすかし、ろの咲顔に老のなみだをすゝむ。これよりして、道の心いよくすゝなく、世のいとなみ、骨をたゆめるにひまなし。かれがろの歳にならば、家をゆづり、こそくと髪そりこぼちて、世の中見し聞しとはいへど、七十年八十年にてときれし病の床にも、白髪かき亂したるは、何おもひ出にとも見えず。しかれども、これらはみな八苦のうちにこもれり。人としてのがれかたし。猶も心にまかせぬなげきは、女の身にこそとりつむべけれ。たまくに人と生れ落ちたるより、女なりと聞かば、父母をはじめ寄來る人も心おとして、うはべには、男まさりともてぞきながら、すゑくには、又うたけしきなんといひくやめり。弟見ぬうちは、さすがものくしけれど、世をつぎ、家をおこすべきものならねば、なほざりのもてなし次弟におとれり。いはけなき頃より、内をつとむる習のしなくに、一つとして心をはるけぬべきことなし。脉をしき門の雪あそびは、乳母がためにいなまれ、手に入り

〔五陰〕 法華に出づ、一に不得作梵天王、二に不得作帝釋、三に不得作魔王、四に不得作轉輪聖王、五に不得作佛、これを五陰といふ。

たる花の胡蝶も、弟にあなどられぬ。母の膝もとをはなれえず。父の髪けづるより、弟兄の帶するわざまで、閨の起伏に立めぐりて、やうくに人となり、面影はいはけ近からず心あつかひして、富めるにも、まづしきにも、その幸をねがひ、おつるもの梅ある窓の春ふかく、縁さへ遠きは、ともし火をまもりてうつりゆく年月、親にだに心おかるれば、つきくにも耻ぬべし。あるひは、するくと媒とゝのふりて、いかなる家にもとりむかへらるゝきはゝ、定まる縁にしにひかれて行くといひながら、その人の心のきは見えねば、燕の巣ばなれしで風をあやぶみ、鴛の波わけそむる翅も、うひくしき夕は、古里の空なつかしく、楊太眞が涙、紅葉をきはつけ、もしは情も壁もうずき佗寐の宿なれば、卓文君がしらべも、いたづらにくつをれ果てしおもかげ。老いゆくにつけては、家をつぎし我子ながら、ものごとに氣をかね心をうかゝふ。夜半にあそびて歸へらざれば、こゝろを門のほとりによせて、夢さへ霜に苦しむべし。指を齧みても、しらすべき子ならばこそ、孝なるにも不孝なるにも、まかせはてたる老の身こそかなしけれ。此三從のくるしみにかさねて、五障のなげき又いかゞせん。たゞ變成男子の心ひとつをたくましうして、法の道に入るより外なし。はたかゝるごとかいつくるは、わが身に似氣なきわざ、殊さら旅寢の床にも

のわすれねて、いかにして筆とるべしとも覺えず。しかれども、病をたとゝふは、功德の第一といへるに催されて、つく〳〵とうち案じでしるせる。右よりのなんさ(何さ)なうさ(何さ)は、おぼろにては、なか〳〵遁るゝにたよりなし。今かゝる病の床よりして、誠の道におもむくべき因緣にこそ。人病をおもふ時は、塵の心おのづからしりぞき、人死をおもふ時は、道の念おのづからきざせり。瓦のごとくにして全からんよりは、玉のごとくにして碎けんにはしかじ。けふのでゝさしをつゝけてつめはげむには、つゝかなき身をうらやむべきかは。相かまへて人なみならましかば、この春をこの秋をなんと、かりにも思ふて、となかれ。世の中に立めぐる人をいやしみろしるにはあらず、たゞ曉の寐さめかちなるころ、夕べの空の心しづかなるときに、ねてろび草のかりなる言葉をおもひはかりて見るべし。』

つら〳〵世のはかなきならはし、あら玉の年立かへる注連かざりは、千代かけてさしそふ初日影ととぶきあへれども、わづかなる齡のはや一日をしづめて、終の薪の身をからしゆく光ならずや。松は薺菜にひかれて、千年の陰をうしなひ、竹は左義長に燒かれて、百尺の綠をたふす。島海老の生ながら養られて、さしもくるしげにかゞまりたる姿に、あ

やかれなといへるはいかにぞや。田つくり數の子は、よしなき名のつきたるゆゑに、かはねをさらし、雉子のかしらは、いけるがごとくもたげしめ、鯛の尾は、とびかへるべくはねしむれども、いつしか落ちくばみたる眼のうち、うらめしげに牙嚙いだしたる、いさゝかも悅べるけしきとは見えず。是れのみならず、海にすなどり山に狩して、いまく〳〵しき肉つみかさね、股かひな、血しほに引きちらして、この日の賑とす。ものゝ命を奪ひて、おのれをたつることは、殘害の道なり。年月日のめぐみ初める三つのもとを愼みて、齡をのべ、命をたもたんとならば、かゝるたぐひも憐みすくはんこそ、天つ心にもかなふべきものなるを、物いはざればとて、命のをしからざらんや。かたばしより屠りくるしめて、あはれよき春かなといへど、かれらかためには、けふいかなる惡日ならん、さこそ夢見もあしくまよひいでたるらめ。かねて寶舟をも敷かせて、この難をもすくはましきことよ。老の枕の邊にも、貘の札ひらめかして、何ごとも夢の世の中とは、露おもへる氣色もなし。香そめの袂きらめく法師まで、いみ葉言に身の毛よだつ、この日なればとて、死門のふさがるべきかは。慈惠大師の終焉の眦をしめし、一休禪師は、髑髏をさゝけて洛陽の貴賤を、いましむ。かりの名にまよひて、かぎりなき罪をつくることをいさめり。かゝる折ふしにも、

世にまじらはぬ病の床には、眠しづかにたりて、つねづねの念珠わするゝことなく、あら玉の年をかさねて、心の玉の光もやはらぎ、やゝ解そむる氷の涙いさきよくそゝぎて、花に柳にうつりゆく。桃の節句は、殊更ばかなき戯のまじいり、雛の姿も、去年は今年に氣歴れて品くだる坐敷の有さま、盛衰の世の中になぞらへぬべし。あたり隣うちまじはりて、競ひのゝめくと儀ひ、ひとへに起きあがりの小法師よりも現でろろなし。蓬のもちひ、酒爭ひのみ、胡葱の口に紙引あほぶ、なほ色をつくろふ罪重かるべし。かぐのごとき極熱草のたぐひは、そのまゝに服すれば、瞋恚を起し、薬につくれば、婬慾をきざせり。すべて善神の守りをはなるゝことゝ、ふかく經中にいましめられしものをと誦めいたれば、膝に頭おしあてゝ、髓いでたる姥の、いくらとゝもなく田螺つらぬきたる串をもろ手にもたげて、眼鼻の雫すゝりしはぶきたるいはんかたなし。同じくばかきをぞさしてほしもすべきはまぐりよりは名もたよりあり。」と詠みけん西行法師の像も、まのあたりにいますがごとし。庭に遊べるは、多くの雞合に蹴爪の刃を磨きて、雞冠の血しほをくたき、濱に潮干の渚に群れゐてかず〳〵の小貝、小魚に息もつかず携へ來て苞苴とす。すべて到るところにからきめを見せ、命をうばふことを樂とす。菖蒲切卯地打は、專ら男の興ずるわざ、田舎人は殊更にいさみて、徧にさゝえ、廣野によせ合て挑み爭ふに、眼鼻うちひしがれ、手足ねぢ折て、一期の片輪まうくるもの、年〳〵にたえねど、意の馬は綱おしきり、心の猿は鞭引はづして、物くるはじき方には、人のあつまるとこそ。父母かねてより家々の惡太郎を制して、かたく門立を留むれども、うら道をぬけいて、枝折のりてしなどして、とゝや遲しとかてにゆきて見れば、親さへ伯父さへ、肩肌ぬぎの力紙、味方もにくむは兀の鉢巻、あい〳〵聲して山伏のいでられたるは、麥畠ふまるゝ腹たち、馬かたの横鍵は、竹の子くれざる遺恨なりけん。入日まぢかふ並松はあからみ立、眞白なる河原の石のかず〳〵も盡きぬと見えしも、やう〳〵疲れて相引にひきとる。畦傳ひ磯つたひに、腕おしさすりて、鬼の首とりたる顔に、紙のぼりひらめきたる町口、うらも隣もぬけて留主居のさびしさ。菖蒲ふく一夜は、女の宿なるものをと獨言するかた手わざ、殘りすくなき粽の篠に疵つく指を湯のしみて、洗足時のたそがれに、親子うちつれ破れ編笠、上座横座にころ〳〵と、手にあたるもの枕にて、二日三日の高うめき、誰がたのみたるあやまちぞや。智なきものゝ暇あれば、よきことをばたくみえず、ことさらもの悅ぶ日よりぞ、物怪は出來るものなる。しばらくも心しづめて身をやしなひ、その日のつとめを考ふべし。桐の葉風のものになり、雲の氣を

をもつ初秋には、七夕の賑ひ、書は築地の蹴鞠や、六角堂の立花見にとて入こぼれたる門の前、社祢祓に玉の汗をそゝぎかけ、若男の刀に袈裟ひきかくるもわきまへず、爪立かねて口あきたる僧のありさま、たとへに及びがたし。けふ墓の草とり塵はらふつとめに心つくもあれど、歸へさより今宵の遊びをたくみあひ、蔀やり戸明はなちて、思ひ〳〵の簾かゝけ、立琴に香炷そへ梶の葉に硯ならべたる奥ゆかし。机を井のもとにからめかし、黍畑の透間には、竹にひらつく短冊、庇に上し神酒徳利こけて、西瓜のあやふかりけり。心〳〵の祈も、唯ひとことをのみかなへたまへり。五色の絲に蜘のいのかゝれるをしるしとすとかや。桂男のひとり寢にこすでとなしとて引籠るは、宵まどひなり。拙きかな。太虚の清くきよきにむかひても、月星のあきらかなるによりても、迷ふ心を先たて、たはふれあかす一夜の戀種は、わが國もしとの國も、紅葉の橋に色めきたるろの穢は、銀河をかたぶけても清めがたからむ。葉月は、たのむの祝ひといへど、さしも興することなし。木綿は、いまだ坐柿の葉ふりにつゝかず、禮者もてなす酔よりうかれて、茸狩の道すがら、谷峯にきく鹿笛のたくみをうらやみゆくは、渡り鳥の聲〳〵。家に歸らば、網引むすぶべき心をいとくり立て、鳩の足をくゝるは更らなり。鵙の眼をぬひふさぎて、ことさかしく携へさせ

〔劍鐵磨〕劉尼は潙山の法嗣なり。鐵磨は、鐵にてつくりたる磨なり、蓋し劉尼が機鋒捷俊にして磨齒の快利なるか如き故に斯く號したるとか。

〔牧牛〕碧巖二十四則に曰く、劍鐵磨到潙山。山云。老牧牛汝來也。磨云、來日盛山大會齋。和尚還去麼。潙山放身卧。磨便出去。

〔ふつゝみ〕輪嘲なり。憤るといふに同じ。

孫引つれし男もあるぞかし。老の名のありとも知らで、四十雀とあはれみはづかしめたる言葉は、この輩の爲めなるべし。過ぎこし秋は、すみやかにて、明ゆく夜半の遲きことは、病の床の曉、風さへ霜さへ置きまどはせる菊の祝は餘所になして、藥いたゝく枕もと、煙の埋火を力にて、鳴よる竈馬の聲もなやめり。明障子の朝日影、手水盥の湯氣ふかく、一葉うかめる柿紅葉は、見に出ぬ人を問ひ貌なり。佛には、櫻の花をといひけんも、折を得たる手向なるべし。竹のいけ菊、重のまゝ栗、けふの初穂の心はかりと書きおこせとも、霜うすく立居はかなき閨の戸に、出かはりいそくはした女も、別れをしのぶ聲〳〵。網のつな手も引すてゝ、うき桶の身は、さだめなき行すゑ。東とやいはん西とやいはん、北より見れば南となる、志賀の浦浪かけはらひたる月影は、碎けては猶ほ源に歸り、靈照女が破衣を投すて、劉鐵磨が牧牛を鞭うつべし。若しいまたしからずは、香の煙の一すぢに、一乘の經力をわするゝことなかるべし。草の菴の苔の板戸に啼きつくせし蟋蟀、古寺の松の軒にわだかまれる蛇だに、八神の妙音にひかれて、たゞちに沙門の身とうまれり。たとひ今病つかれし身はものうくとも、かの秋にすだきし業因にくらべむや。胸におこせるふつくみの折ふしはあるとも、角ふりたつる鱗の瞋恚にたくらふべくもなし。いかに況や如法

修行の窓おし開き、諸法實相の月の眞壹を拜まば、千生萬劫のひまうちあけて、いつも正月なるべし。たゞかへすゝ心にまかせぬ身に心を留めて、娑婆の煤拂にましはる事なかるべし。つゝしめやゝ。

元祿七年甲戌仲冬下院。

懶窩野衲　丈草述

ねころひ草　終

澤水假名法語

解題

傳を按するに、禪師、法諱を長茂といひ、澤水と號す。十二歳の時、その友なる童子が驚風といふを病みて一夜の中に死せしを見て、これより生死の無常なることを感し、寢食やすからず、一室に閉居すること六七日、みつからいへらく、佛道には成佛のことありと聞けり、われ個事を學すべしと、つひに羽州高寺にゆき、格外和尚を禮して髮をそりおろしき。時たまゝ拔隊和尚の假名法語を得て、その言のごとく、少しもたかはす工夫して、大疑を破りぬ。そのゝち、越後蒲原の龜庵和尚に見ゆ、龜庵は、中峯和尚十三世の尊宿なり。一見して悉く印記を授けられたりといふ。かくて江戸に錫を曳き、大住庵に住みて、大に僧俗を化度すること二百有餘年、元文の末にいたりて寂を示す、實に世壽一百六十餘歳なりといふ。

この法語は、すなはち禪師が緇白の幻病に應じてあめされたるを、その近侍の僧惠俊が聞くに隨ひて書いつけたるものあり。のち寶曆中にいたりて、活明和尚また遺を拾ひてつけ

添へき、卷末に補遺としるせるもの是れなり。

相傳へていふ、古へよりこの法語の示すごとく工夫して打發したるもの少からずと、白隱禪師の法語に見えたる山梨平某居士の如き即ち是れなり。扨隊となり、澤水となる、一に讀者の精修如何にあるのみ。

假名法語

澤水禪師

一　白骨無常を示す事

師一日、四衆に示じて曰く、人々此の世のかりなる事、此の身のかりなる事、夢のごとく泡影に似たり。出家は、夢のうちに暫らく寺をもち、在家は、夢のうちに暫らく妻子をもち、夢のうちに種々の難苦をうけ、夢のうちに暫らくいろ〳〵の歡樂を愛するに似たり。此の世のかりなる事、たとへも及ばず、言にもの べかたきこと共也。此の理を能く〳〵聞かさる中は、如何ほど利根の人も、かりなる事を眞實に思はざるもの也。只幾百年も生つけに有るやうに思へり。是れより色々の謀を設け、數々の惡心惡念增長す。畢竟この身のかりなることを思はざるゆゑなり。昔も今も人皆口には夢の世界、一生はわづかなりと云ふといへども、此の身實にかりにして、賢愚貧福、貴賤老若相互に遂には白骨となることを慥にわきまへず、しりたる路に迷ふと云ふは、此の事也。只日々の世わたりにのみ深く着して、此の身のかりなること、一生のうち一日片時なりとも、眞實に考へたることも

なく、解脱の道あることをもしらず、神道の極意は如何なることぞ、儒道の極意は如何なることぞと云ふことをもわきまへず、只明けても暮れても目前の事のみに頓着して、遂には一生の罪業を身にまとひ、地獄の業をつくること世人往々皆しかり。此の世のかりなることは、父母師長といへども、一たびは白骨となり、夫婦の中も終には白骨となり、兄弟朋友一門一家も皆此の如し。前後の差別ありといへども、一人も殘るものなし。外の事にはあたりはづれありといへども、白骨となることは一人もはづれなし。しかも年よるまで堅固と云ふ證據もなく、二十にても死し、三十にても死し或は三四にても死し、腹のうちにても死す。設ひ七十八十乃至百二百千年二千年長生したりとも、終にはまた白骨となれり。此の身のかりなる事人皆此の如し。如來經中に老少不定と說き玉ふは、此の事也。金銀衣服榮華をきはめ、一生貯へもとめたる器物財寶、孫にゆづり子にゆづるといへども、其の孫も其の子も終には又白骨となり、親に先だつもあり、子に後るるもあり、暫らくあとになからへたりといへども、終には又一面の白骨となれり。此の如く此の世のかりなる事、今はじめてある事にあらず、昔よりして世上のならひなり。此の如くの理、大涅槃經をはじめ如來悉く說きつくし玉ふ、老僧が私の言にはあらず。只今にも臨終におよばんとき、何でもをかたのむべき、藥力にも及ばず、佛力神力にも叶はず、妻子眷族もその苦にかはることあたはず、金銀財寶も此のときに至て用に立つべからず、只かねて心かけたる信心の一のみ、此のときの用に立つべし。平日たゞ此の身のかりなることを能く〳〵思ふべし。夜のあけ日のくるゝにつけても、此の世はかりの宿とおもひ、時の鐘を聞くにつけても、此の世はかりの宿とおもひ、老少互に死うするを見るにつけても、わが身をおもふべし。今日は人をとぶらひ、明日は人にとぶらはるなど能く〳〵思ふべし。平日此の如くなるときは、無益に苦しむ心も自然にうすくなり、惡心惡念も漸々にのゞき、信心の志日々にふかくなるもの也。平日此の身のかりなることを思ふときは、親に不孝のものも、自然に孝行の志おこり、主に不忠のものも、自然に忠節あることは、此の身もかり、親の身もかり、主君につかふることも、わづかの間主從互にかりの身と、つね〳〵合點あるゆゑなり。しばらくも此の身のかりなることを忘れ、人々白骨の道理をおもはざる時は、只幾萬年もながらへあるやうに心得て、わづかのことに腹をたて、あるまじき親にあたり、おのれを忘れて主人に不忠あり、親の面を見るも只是れわづかの間、主君につかふることも只是れわづかの間、夫婦の交も只是れわづかの間、兄弟朋

友の交も只是れわづかの間と、此の如くつね〳〵おもふときは、一切おのづからむつまじきもの也。此の如くつね〳〵おもふ時は、上を敬ふ心おのづから出て、下をあはれむ志自然に起るもの也。此の身のかりなる道理を能く〳〵合點あるときは、如何ほどきびしき奉公役儀も、少しも苦にならず、如何ほどまづしき世わたりも、少しも苦にならざるものなり。さて此の如くに志のうちより、心地の工夫信心ある時は、まことに人間に出生したるかひありて、殘る所もなきこと共也。信心と云ふは、拔隊法語の工夫信心也。これ即ち佛法信心、萬種の中の極意にして、如來四十九年の要なり。佛法のみならず、諸道の根本至要也。拔隊の法語能く〳〵披見あるべし。

三、諸人心地修行なくんば有るべからざることを示す事

ある人來參、問ふて曰く、佛法信心の事、我もとより武の家にて、佛法を信ずることを相應すべからず、佛法信心、坐禪工夫は、只出家のみにして、在俗のなすこと心得がたし。師の曰く、佛法の二字の意味、いまだ明師より聞かれざるのあやまり也。佛法の二字の意味すら、容易にはしられざるもの也。一切經論、諸子百家を悉くそらんじたる大學者も知ることかたし。元來佛法は、分別學解の能く及ぶ所にあらざるゆゑなり。こゝを以て教外

の玄旨と云へり。圓覺經に曰く、善知識を求むべし、善友を尋ぬべしと也、學者をたづねよとは說き玉はず。たとひ手をよく書き、諸經をひろく見、詩文を作るとても、知識とは名付けじ。知識といふは、一句一字を學ばずとても、實に佛祖のごとく一心を明らめたる人を知識と云へり。かようのことも聞かざれば惑多し。さて佛法と云ふは、貴賤男女をわかたず、草木瓦石にいたるまで、おの〳〵具足の佛法にして、出家のみ信ずべきことにあらず、只今手を動し、足をはたらかし、目に色を見、耳に聲を聞く、此の如く老僧が庵室へ來るも去るも、これ何の道理ぞ、是れ人々具足佛法の妙用也。佛法と云ふは、人々の一心の名也。一心の名と云ふことをしらずして、我出家にあらず、佛法信じかたしと云ひ、或はそしりにくむば、直に我一心をきらひにくむにあたる也。是れ大愚にあらずや。若し儒において佛をそしらは、儒の極意を未だしらざる人なり、神道において佛をそしらは、神道の極意を未だ味はざる人なり、佛において儒道神道をそしらば、佛法を夢にもしらざる佛法者也。佛門中彼我の宗論あげてかたるにたらず、まことに恥づべきこと共也。かるがゆゑに佛法は武において武道の極意たり、歌道において歌道の大本たり。其の餘の諸道百藝、その至要に到りては、すべて一心にをさまる也。さて坐禪工夫は、きつと坐して居

て、耳に聞く主を工夫せん人は、聞く主を工夫し、其の外古則いづれなりとも、只一公案をとり定めて、路をゆくにも工夫し、いねてもさめても深く疑をおこして工夫すべし。工夫疑團と云ふは、しられざる所をかく考ふることなり。深く考ふる所を工夫とも、坐禪とも、疑團とも、觀法とも、觀念とも、禪定とも、思惟とも、三昧とも、大信心とも、大菩提心とも云へり。其の外工夫の異名數ふるにいとまあらず。坐禪の事、坐して居るのみを坐禪とは云いず。行住坐臥ともに深く公案を疑ふを、眞實の坐禪と云へり。いかほど長坐不臥にして、端正に坐すといへとも、ふかく疑ふ心なくんば、坐にあらず、禪にあらず、默照の邪禪なり。六祖大師の曰く。道由レ心悟。豈在レ坐也と。ここをもつてしるべし、坐禪は只た深くうたがはしめて、自性をさとらしむるためばかりの方便なることを。悟といふは、一心をあきらむることも也。あきらむるとは、自心の明になりたることも也。かるがゆゑに、一心あるものは、一心の修行なくんは有るべからず、武家は武にして工夫をなし、百性は耕しながら工夫をなし、貴賤男女その職をなしながらなすべき佛法信心也。さるによりて、信心とはまことの心と書けり、まことの心となりて、惡しといふ人は、諸宗諸道諸藝のうち、一人もあるべからず。一心をあきらめず、心くらく邪曲にして善しといふ人は

諸宗諸道諸藝のうち、一人も有るべからず。こゝをもつてしるべし、佛法信心は、世間一切の人すべてなさずんはあるべからざることを。佛法とは一心の名也、信心とは我が一心を信ずる事也。坐禪工夫は、格別にかはりたる事のやうに人みなおもへども、只た一心を明にみがくための修行也。此の工夫信心は、手足をも勞せず。道具の求めもなく、只た意の中にてなす信心ゆゑ、佛法信心數多き中にも、第一なしやすき信心なり。もし實に工夫をなし、大疑俄にやぶれ、大悟發明するときは、拔隊法語にあるごとく、一字を見ずして七千餘卷の經をよみつくすべし。七千餘卷は、只少分をわけ玉ふ。儒道一切の書及び神書歌書、あらゆる書籍の大意を悉く見つくすべし。老僧此の如く云ふとはいへども、少しも疑あらん人は、直に大疑團をおこし、即今自性を見得してしるべし。古人の曰く、終日喫未嘗喫一粒飯。終日行未嘗踏一片地と。實に此の如くにいたらば、たとひ百萬騎の敵陣にひとりかけ入るとも、前後左右に人ありとも思はじ。豈不レ快乎。

三、修現者に示す事

あるとき、修現者相見ゆ問ふて曰く、某眞言の法印より阿字觀の指南をうけ、祈念あるとき、一心に阿字を念提すれは、不動と一味にして、尤も利益あることをうけたまはる。是

〔役小角〕大和の人、即ち大峰をひらきたる行者なり。

なりやいなや。師の曰く、然り。修現者の家、元來心地修行一偏の立派にして、悉くよきおきて也。役の小角居士、此の工夫信心を專として、今に到りてその名海東に瀰滿す。いづれもその元祖のおきて浮薄の事にあらず。今時只所癖をもつて根本とおもふこと大なる誤なり。不動の二字の意味をかたるべし。不動と云ふは、元來人々自己一心の異名也。不動明王を本尊とし手本とおもて、役の優婆塞の教のごとく心地修行して、不動と我と一体になるべきための修現者也。不動とは動せずと書けり。何ものが動せざる、人々の此の一心世間一切のとんちやくに逢ふて、少しも動せざる事なり。貧苦にあふても少しも動せず、富貴にあふても、此の一心少しも動せず、愁にあふても少しも動せず、慶にあふても少しも動せず、色慾にあふても少しも動せず、金銀財寶を見ても、此の一心少しも動せず、大病苦に逢ふても少しも動せず、臨終のときも、大安穩にして少しも動せず、此の如く能く到りたるを直に不動明王と云べり。此の如く能く到りたる人を成佛と名づけ、大善知識となづけ、如來といひ、安養世界に生るとも云ふ也。此の如く能く到りたる人を、儒には聖人とも君子とも天命に達すとも云へり。大乘の說に到ては、直に一心をあきらめて成佛せよと說き玉ふ。死後の成佛と云ふことは、更に一句も說き玉はず。小角居士器量ある人にて、その敎皆以て大乘也。或は大峰と云ふことあり、山の名とのみ心得て置くべからず。臨終心鑑抄に曰く、一乘菩提のおほみねに入りて、まさに大事因緣を知るべし云々。直に人々の一心を指して、一乘菩提のおほみねと云へり。有相の大峰にとゝまる事なかれ。さて阿字を工夫せられば、阿の一字を大に疑ふべし、ゆくにもうたかひ、坐しても疑ひ、いねてもさめても、平日深くうたがふべし。工夫忽然としてやぶれは、不動と我とふたつなきことを知るべし。此のとき始めて何物を名づけて金剛界、胎藏界と云ふことを知るべし猶又工夫用心の事、拔隊法語を拔見あるべし。

四　經中の妙語を示す事

師一夕、徒衆にをしへして曰く、如來經中にの玉ふ、世界と云ふは、世界にあらず、これを世界と名つくと云々。師又嘆して曰く、此の意味甚深微妙也。をしいかな、知音のまれなる事を。諸禪者、懈怠なく大工夫をなすべし。實に自性を明らむる時は、これらの妙語、掌中の物を見るごとく分明也。世界と云ふは、世界にあらず、これを世界となづくと、甚深也。臨濟禪師の曰く、山僧が見處に約せは、釋迦と別ならずと。實にさとるときは、如來と毫末の差異あることなし。生死事大、無常迅速也。綿々密々に工夫をなすべし。

五　參學の徒に示す事

一僧來參して垂語を求む。師示して曰く、それ出家は、元來おもき役人なり。その仔細は出家の二字の意味、三ぞく無明のいへを出離するを云ふ也。無明の家を出離して、佛祖の惠命をつぎ、一切の衆生をみちびきて成佛の實地にいたらしむる役人也。さるによりて、はじめより父母につかへず、俸祿をもとめず、耕作を事とせず、賣買を心とせず、ただ頭陀の境界にて、心地修行一偏の出家也。少年晩年をわかたず、頭髮をそりおとすとひとしく、心中無量のとん求、無量の憎愛、無量の怨恨等、俗のときの心をすべてそり落して、工夫一偏の心となり、諸方を行脚して諸善知識を訪尋して、自己一心を佛祖のごとく窮明し、佛祖に代りて一切衆生を濟度すべきための大役人なり。此の故に釋尊經中に說き玉ふ實に一心を明らめざる間は、寺をも住處をも定めず、水上の浮萍のごとくにして、善知識善友を求めよ、もし知識にあはんときは、知識の敎に毛頭もそむかず、私の心をさきとせず、純一に修行せよと。釋尊後來のため此の如くの大悲心、粉骨碎身も報するに足らざる所なり。其の外達磨大師、六祖大師、臨濟禪師みな以て此の如し。その流を酌みながら、暖に着、あくまで食して、心地窮明の志なきことは何ぞや。釋尊、一心を悟らざる僧を呼

ひて、へんふく僧或は法賊と呵責し玉ふ。豈に慚愧なからざらんや。在家といへども、自心を明らめたる人を有髮の僧とほめ玉ふ、女人といへども、悟りたる人を變成男子と說き玉ふ、男子といへども、悟らざる人を女人と說き玉ふ。しかるに身に佛衣をつけ、佛種と稱して十方の信施をうけ、心地修行は夢にも事とせず、しかのみならず、心頭には大寺大院の住職を求め、名聞利達を求めて空しく光陰をおくる事、これ法賊にあらずや。問答商量のはたらき、偈頌即席の働は、臨濟、德山をもあざむくほどなれども、却てろの心頭を探るときは、色慾にれぼれ、金銀を求め、食味をむさぼり、病苦になやまされ、生を愛し死をいとふ、これを出家といはんや、これを禪宗と名づけんや。禪とは一心佛性の名也、專ら心地明了なるを以て、禪宗と云へり。むかし禪律相まじへてありしとき、百丈禪師、禪律交加して、後代禪の敎律におちんことを長れて、禪の一宗を格別に立たまふ、まことに深き旨あるかな。工夫はいづれの公案なりとも、ただ一公案をとり定めて、ふかく疑ふべし。大疑下に大悟あり、毫髮ばかりも自己の分別を加へば、坐して百年を經るとも了期あることなし。知識の指示にそむかず、おの〳〵工夫したまはゞ、百人千人といへども、悟らざる人あるべからず。もし又實に大悟せん人は、直に般若の大智にいたる、今日何に

事のかくるゝことありて、しゐて文才を學ばんや。老僧幼歳より禪定三昧にして、實に一句一字をも學せず。しかりといへども、今日いかほど雄辯博學の人出頭し來て、朝より暮にいたるまで、前後左右より難問難句を詰問し來るとも、老僧毫末とも思はず、これ又何の力ぞや。老僧世間邊のことは、幼年より學せざれども、佛道の事は、いかほど高き處、いかほど深き處なりとも難問し來るべし、何ぞ一點もをしまん。これ又老僧が手柄にあらず元來出家は、佛祖に代りて法柄をとり、佛祖の敎のごとく、後來を濟度すべき導師なり。いづれも出家は、かく有るべきこと也。老僧此の衰年、明日も期しがたし、只眞實を以て此の如く說く、猛く精彩をつくべし。

六　平常三昧を示す事

ある僧、參見して問ふて曰く、和尙、平日青天白日のごときやいなや。師の曰く、維摩經に曰く、法に比あることなしと云々。這個の佛性、白日のごとく青天のごとく、實に比あることなし。僧又問ふ、和尙、平日工夫をなすや、又なさずして居たまふや。師の曰く悟了分明なるときは、今は工夫なすときの、今は工夫をなさざるときの差別ある事なし。平日三昧にして、甚深微妙也。僧又問ふ、和尙、平日ねむるときと、ねむらざる時と一味なりやいなや。師の曰く、ねむるとさむると差別あることなし。餘人の目には、老僧今はねむると見ゆれども、ねむるが元來ねむるにあらず。餘人の目には、老僧今は動き働くと見ゆれども、動くが元來うごくにあらず。此の如くに到ては、大極睡のうちに醒運動の全体あり、醒運動のうちに大極睡の全体あり。甚深なる事此の如し。大德、歩を退けて大工夫をなすべし。見ずや、道元禪師の法語に曰く、皮肉骨髓終に死せざることをわきまへんと。往々皆此の自性には、生滅なしといへども、此の身には生滅あるやうに思へり、大なる謬なり。元來此の身にも毛頭ばかりも生滅の相もなく、動靜の相もなし。幸なるかな、大德、元禪師の餘流。猛く精彩をつくべし。

七　人として道なくんは有るべからざることを示す事

師一日、四衆に示めして曰く、春もすぎ、夏もつき、秋も半になり、今日は八月十三日となれり。此の如く春夏秋冬、時々刻々におしうつりて、光陰寸の間も人を待たず、中〳〵油斷あるべきことにあらず。元來光陰と人の身と一味一体にして、春夏秋冬のみおしうつるにあらず。人々の一命も又一日〳〵とおしうつりて、一日すぐれは、一生の壽命一日分減少し、一月過き終はれは、一生の壽命一月分減少す。この故に梵網經に曰く、人の命の

無常なることは、山の水よりもすきたり。今日は存すといへども、明日は又保ちかたしと云々。これらのこと千偏百回耳に聞き口に誦すといへども、實に我が身の事とおもはず、或は書籍のうへのことゝおもひ、或は昔の事とおもひ、或は人の事とおもへり。おの〳〵平日見たまふべし。風雨をえらばず、寒熱をわかたず、老少貴賤相まじへて、燒場の煙のたゆる間もなく、寺々のらんたふにうづめたる土のかはく間もなし。かくのごとく人々無常にして、一人も殘るものなし。是れによりて、昔より儒道相續して人道を教へ、佛道ありて解脱をみちびき、神道ありて諸道をつくさしむ、諸道の立ち來ること、全く閑事にあらず。いつれからなりともその道に入りて、その祖その師の教に隨ふて、少しも私の分別をまじへず、須らく道を修すべし、人として道なくんは有るべからず。ただ日に口すき世わたりにのみ深く着して、一生を朽ち終はらんこと、惜しむべきこと共なり。虫の類鳥の類の日々西に飛ひ東にかけること、畢竟これ何のためぞや、只食餌を求め、妻子を求め、住處を求むる心のみ也。鳥の類虫の類だも、その日をわたること、すでに自在を得たり、人間何ぞこれにならはんや。たま〳〵人間に出生し、慈悲善惡をわきまふるしるしには、專ら心地修行して安穩解脱を得ることこそ、人に生れたるかひありて、喜これより大なるはなし。心地修行とは、平日坐禪工夫して、實に自心をあきらめて成佛を得るを云へり。大乘の說に到りては、死後の成佛のことは一句も更に說き玉はず。此の身堅固にして、快く食事をなす間に、ふかく信心修行して、生ながら成佛をとぐることのみを說き玉ふ。是れ即ち佛法の眞說、成佛のちか路にして、少しも方便を加へず、老僧平日示す處は、大乘のうちの又大乘最上乘の本法なり。直に釋尊に相見して、成佛の本法を問はれんに、釋尊といへども、此の外に一句も說き玉ふことあらじ。佛法のみならず、儒道に靜坐工夫あり、神道に靜心(しづこころ)ありか又安坐工夫あり、その外醫道、軍術に到るまで、いづれも一心をもつて極致として、おの〳〵工夫有りか、ただ其の書により處によりて、その名かはるといへども、全く外のことにあらず、是れによりて孔子も智行の二を說けり、智ありといへども、行なきときは、鳥のかた羽なきがごとしと。又孔子、十哲を判じて曰く、彼は禮の道にかなふといへども、未だ義をつくさずと。此の如く門下をせめ玉ふこと、畢竟これ何のことぞや。或は神書の要語に曰く、一心の定る準をあけば、即ち天の命にかなふと。又曰く、人は天が下の神なり。或は曰く、天地の神と同根なり。天地の神と同根なるが故に、萬物の靈と同体なり。或は六根清淨の理、眼根清淨、耳根清淨、鼻根清淨、舌根清淨、身根清淨、意

根清淨と、これまた何の道理ぞや。實に此の如くに到らんとおもはゝ、須らくつねに心地の工夫あるべし。若しよく右の如く六根清淨なることを得ば、神者は天照大神の本志にかなひ、儒門は孔子の本懷に相應じ、佛者は釋尊の直指に達すべし。工夫信心の事、職分渡世のはたらきをやめて、格別にいたされよと云ふにはあらず、渡世のうちより信心をなし信心のうちより渡世を營むべし。人倫は鳥畜の如く、はだかにてもあられず、その人相應の衣物、その人相應の住居、その人相應の入用もなくんばあるべからず。此の如く內外かけみちなきうちより心地の工夫あるときは、誠に人に生れたるかひありて、神佛聖賢の敎にそむかざる人なり。

八　日蓮宗の信士に示す事

一士來參、師に呈して曰く、我が祖代々より日蓮宗にて、我が宗の道者より妙觀を聞き、より〳〵觀念すといへども、未た何のしるしもなし、却て思ふ、題目をとなへんこと利益あらんと、願はくは仔細に慈示を玉へ。師の曰く、それ日蓮の一宗は、もと天台よりわかれて、法華一部を依經として最も大乘の宗門なり。法華經の敎のごとく信心ある時は、釋尊の本懷にかなひ、大乘妙典の至要に達す。妙法蓮華といふは、別のことにあらず、人々の一心の名目也。本來此の一心には、名もなく字もなく、過去久遠劫よりかはる色もなく、明々歷々として、今古佛衆生のへたてなしといへども、凡夫しらずして己に迷ひ、外に佛を求め法を求むるゆゑに、釋尊しねて此の一心に妙法と名を付け、蓮華と名ざして法華經を說き玉ふ。しねて阿彌陀となづけて彌陀經を說き玉ふ。名字をとめて實となすことなかれ、ただその本体をしるべし。その本体全く他より得るものにあらず、遠方にあるものにあらず、ただ今手を動し足を動す体、是れ何ものぞ。是れ卽ち人々具足の妙法なり蓮華なり、一乘の法也。此の外に佛を求め法を修する人を、釋尊、迷の凡夫としかり玉ひ、或は長者の窮子にたとへたり。法華經の敎のごとく、能く〳〵信心ある時は、人々妙法の全体に到ること也。妙法の全体に能く到るときは、禪宗の全体に到り、淨土の極意に到り、天台眞言その外諸道の全体に一時にいたると、掌を指すよりも易し。提婆品に、八歲の龍女ふかく禪定に入て諸法を了脫すと云々、是れ又何の道理ぞや、深く禪定に入て諸法を了脫すとは、深く妙觀をなして一心を悟りたる事也。禪定といひ、妙觀といひ、坐禪といひ、觀法といひ、皆是れおなしく工夫の名也。深く禪定に入て自心を了達せすんは、此の意味もわかちがたきものなり。八歲の龍女すら悟れり。況や人においてをや、諸經諸宗とかすか

（長者の窮子）とはある長者の一人の子が家を出て他國に落魄流浪し、のち吾が父の家をも知らずして偖に立しを父の長者見て、汝は吾が子なりとさま〳〵誡し始めて長者の子なることを悟らしめたることを法華の中に喩に說玉ひしなり

ずにわかれて事多しといへども、その根源を尋ぬるときは、此の一心より外に法もなく佛もなし。このゆゑに法華經の中に、十方佛土中。唯有一乘法。無二亦無三と說き玉ふ。十方佛土中といふと、細に論する時は言長し、今略して云ふべし、十方佛土中とは、天竺、大唐は云ふに及はず、無量無邊の嶋々、天外地外までおしくくりて云へる言也。唯有一乘法とは、只一乘の法のみありといふこと也。無二亦無三とは、二もなく亦三もなしと云ふこと也。右のごとく此の世界こと〳〵く廣しといへども、法といふものは、只一ありて外に二三はなしといふこと也。法といふは、これ心法なり。心法とは、人々の一心法也。此の心法は、昔の釋尊にも今の凡夫にも、一面にそなへて少しも差別なし。此の心法の一が、過去七佛にも、達磨大師にも、日蓮上人にも、法然上人にも、禪宗にも眞言にも、草木馬牛に到るまで、一面におしわたれり。是によりて悟れば、衆生即ち佛也と云へり。能く此の道理をわきまへて、ふかく信心あるべし。儒にも、天地の間に色形のある物には、性といへるもの一々そなはりたることを說けり。醫道にも、三才は蓋し一氣也と云へり。こゝを以てしるべし、聖賢佛祖いづれも其の根源を同しくして、外の事にあらざることを。信心工夫の事、妙觀も元一同也といへども、大疑の起しやう、その外微細の修錬、拔隊法語

に悉く述べ玉ふ、くはしくは拔見あるべし。士又問ふて曰く、上代の人は上根にして、一心を悟るやすく、末世の凡夫はかたきと承る、此の義如何。師の曰く、此の一心を悟る工夫修行は、ただ末世の凡夫、迷の凡夫のみなすべき工夫修行也。諸經は凡夫の爲め末世の爲めばかりに說き玉ふ。此の理、釋尊直に諸經の中に說き玉ふ、諸經は佛の爲めには說き玉はず。佛はすでに悟りて成佛す、信心修行をもちひて何かせん。若し末世の凡夫は悟ることなりかたしといはゝ、法華經をはじめ諸經は皆いつわりならん。諸經もしいつわりならすんば、一切諸經を悉くおしやぶる也。此の如く謗法の罪擧けてはかるべからず。上代といへども、火はあつく、末世といへども、水は冷に、上代といへども、天は高く、末世といへども、日月地におちず。こゝをもつて知るべし、上代末代差別なきことを。ただ大乘のをしへのごとく知識の示に少しもそむかず、深く工夫をなすときは、百人は百人ともに悟ること速也。直に一心を指して佛とも法とも云へり、何のかたきことかこれあらん。法華經に曰く、彼の久遠を觀ずるに、猶今日の如しと。又これを以てしるべし、上代末世のへたてなきことを。上代末世といふことは、佛在世を去るの遠近を以て、かりに上代末世といへども、此の一心佛性においては、正法像法、末世の沙汰毛頭ばかりもあらし。此の故に

古人曰く、悟らざる人にしらるゝ經の文、一句もあるべからずと。能〳〵おもふべし。

九　諸人に三大事あることを示す事

師一日しめして曰く、人々具足して三の大事あり、いはゆる生の大事と死の大事と一大事因緣の大事なり。此の三の大事は、人々知らずんはあるべからず。いかほど賢達利根の人といへども、見さることと聞かざることとは、なりかたきものなり。おの〳〵ねむりをさけ、心をしづめてたしかに聞くべし。生の大事とは、生はむまるゝとよめり、人〻今日此の如く出生したりといへども、生れざる以前のこと、智慧分別を以ても知りかたく、學解才覺を以ても分明なりかたし。我か此の本体出生以前、いつくにありて如何やうの形体やら、釋尊出世のときは、いづくにありしやら、七佛のときは、いづくにありしやら、さて〳〵何を便にしるべきやうもなく、學問にも分別にもおよびかたき所なり。是れを生の大事といへり。次に死の大事とは、人々此の如く出生して、百年千年のおもひをなすといへども此の身のかりなることは、夢のごとく空花に似たり、富貴をえらばず、老少をわかたず、今日は有りといへども、明日は無し、たとへば旅人の行きては息ひ、息ひては行くが如く、しばらもく住るものなし。むかし雄名の諸大將、所々に一城を開築して、百物盛なり、朱

樓翠殿、善つくし美つくし、勇士剛兵、金馬をつらね、銀鞍を輝し、廣學秀才、榮を爭ひ名を求む。朱樓翠殿も今は無し、勇士剛兵も今は白骨となれり、白骨も終に土となれり。此の世界のかりなること、萬事人々此の如し。金剛經に曰く、一切有爲の法は、夢のごとく幻のごとく、泡影のごとく露のごとく、亦電のごとし、まさに如是の觀をなすべしと說き玉ふあまり、人々此の世のかりなる事たとへん方もなきゆゑに、古人も蝸牛の角の上にして、此の何をか爭ひ、又此の何をか論せんと云へり。蝸牛はかたつむりのことなり。人々此の世界に住居せることは、蝸牛の少し角をいだしたる處にすまひしてあるにたとへたり。此の如くかりなる處に暫らく居住してありながら、此の何をか爭ひ、此の何をか論せんと云ふこと也。さて又此の如くかりにして、天地の間一人として死せざるはなし、死しての後、いづれの處に如何やうになりて落在するや、此の事學問にも分別才覺にも及びがたき所なり。是れを死の大事といへり。次に一大事因緣の大事とは、さて右のごとく此の身かりにして、幻のごとく夢のごとく人々白骨となり、白骨も終には土となりうすると見ゆる中に、一のたのもしきことあり、人々具足して、萬劫億劫を經ても、生滅にもあづからず、夢幻にもあづからず、火に入りても燒けず、水に入りても溺れず、減もせず增もせ

さる一心佛性の一大事、貴賤男女をわかたず、草木瓦石に到るまで、一面におし通せり。此の人々具足の一心佛性は、未だ天地も開けざる以前より今に到るまで、うつりかはる色もなく、盡未來際天外地外までおし通して、明々歴々として晝夜の差別もなく、十方大千沙界に堂々たり。此の一心佛性は、昔の釋尊達磨にも、今の凡夫衆生にも、てきうすきの差別もなく一同にそなはりたり。昔の佛性は、直に今の佛性なり。今の人々の一心は、直に昔の釋尊諸佛にそなへたる一心なり。法に二法なく、佛に三佛なしと云ふは此のいひなり、是れを一大事因緣の大事と云へり。人々の此の一心に本來名もなかりしに、ゑねて名をつけ、衆生に說き聞かする時、一大事因緣と名付け、心法と名付け、佛と名付け、禪と名付け、眞如法界と名付け、圓覺と名付けて圓覺經を說き、妙法と名づけて法華經を說き玉ふ。其の外一心の異名無量にしてかぞへつくすことあたはず。儒には明德と名つけ、或は天理、或は至善、或は天命と名づけたり。神道には神と名つけ、靈(みたま)と名つけ、心と名つけたり。其の外、書により處によりて名の差別あれども、只是れ一物也。世上往々文字かはり、名目かはり、よみてゑかはれば、その事物も又かはりたるやうに思ふこと、大なる謬也。平日工夫修行して能く此の一心を明らめて、天地と我と一体の處に到りたるを成佛と名づけ出世の聖人といひ、大菩薩といひ、極樂往生といひ、娑婆即寂光土といひ、智識といひ、如來といひ、道人といひ、法界三昧といへり。其の外悟了の名も擧げて數ふに遑あらず、老僧只た大數をあくるのみ。如來といひ、菩薩といふは、梵語なり、格別の思をなすことなかれ、ただ是れ悟了の人の名なり。いづれの宗、いづれの道も、此の一心を根本極意として、種々まちまちの數あり、ただ此の一心を明らめしめん爲めの階梯なり。古人曰く、書籍によすることも、只是れ道に入らしめんがためなり。手跡にのぼすることも、只是れ道に入らしめんためなりと。名號題目を唱へ、誦經書寫等の化門は、此の一心佛性の道理を明師より聞く緣もなく、たまたまに聞得るといへども、きくしることあたはざる人のために設けたり、ありかたき因緣なり。上のごとく先づ名號書寫等の方便を以て、漸く善利にも近つき、心もやはらきて、因緣じせつを以て直示の本法に赴かは、諸佛の大誓願にそむかざる人也。もし又眞僞邪正をしらずして用ゐば、諸佛の大悲にもるゝ人也。佛道の本法は、直に一心をあきらめて、生なから成佛をとぐること也。天台宗に止觀あり、眞言に阿字觀あり、淨土に一法句、或は已心の彌陀、唯心の淨土あり、法華經に禪定のこと詳也、儒に靜坐工夫あり、神道に靜心(しづこころ)あり、その外醫方算書歌道劍術に到るまで、根元の工

夫悉くそなへたり。書により宗によりて、その名格別にかはるといへども、只是れ自性をあきらむる修行の名也。文字名目に泥みて、本分を失ふてとなかれ。

十　悟に賢愚なきことを示す事

一士來參、問ふて曰く、自性を明らむる事、かしこき人はをしへを待たずして明らむべし我等ごとき愚暗は、至てかたかるべし。師の曰く、自心を悟ること、かしこきにもよらず愚なるにもよらず、學あるにもよらず、無學なるにもよらず、只信ふかきときは、賢愚ともに悟ること速也。むかし諸葛孔明、その才三國に飛雄して、その名萬世に傳ふといへども、只たやすく軍を出だし、謀を以て人を沒死することのみを知りて、此の一心に不生不滅の大事あることをしらず、未た賢といふべからず。是れを以て彼をしるべし、賢き人といへども、知らざることはなかりたきことを。その外異國歷朝の諸士、いづれも聰明奇才なりといへども、自己の明德を明にして、儒術を專とせし人は稀なり。只是れ儒の明師に逢はざるの謬なり。

十一　來參の士に示す事

一士來參、師に呈して曰く、今生にて僞も云はず、殺生をなさず、無理なく盜心なくんば

後世を願ふにも、又工夫信心にもおよばざらんか。師の曰く、世上惡業をなさゞる人はありとも、惡業をまぬかれたる人は至て少し。此の故にいへることあり、悟のまへの善惡は善惡共に善なり、迷のまへの善惡は、善惡共に惡なりと。士がごときの見處は、細麁淺深の差別はあれども、無事甲裡の見といふに屬して、是れ又一の大病也、其の道の達人によりて聞かざるの過なり。むかし子路の未た孔子に見えざりしとき、天賦仁厚にして、一鄕に勝れたり。ある人、子路にいふて曰く、師によりて學ぶべし。子路が云ふ、我何ぞ師によりて學ばん、不義ならず、不仁ならず。ある人これを孔子に告ぐ。子の曰く、子路がごときは、たとへは山中の直き竹に似たり、ただ是れ山中の美竹たるのみ、人の調法とならず、若し此の竹を以て矢師に作らせは、苦をつけ羽を致し、空を凌くの能ありて、國家の調法たらん、子路がごときは是れに似たりと。子路この言を聞き、驚きて孔子に學ぶと聞けり。老僧恰れたり、今ろの大略を語る。子路猶此の如し、孔聖の語仰きつべし。子路がごとく直に志を改め、まことの道に入るべしと也。

十二　工夫疑團を示す事

ある人來て工夫を問ふ。師しめして曰く、工夫は聲を聞く主を疑ふべし、むかし觀音菩薩

のなし玉ふ聽法底の信心也、首楞嚴經に見えたり。唯今一切の聲を聞くことは、たしかに聞く主のあるゆゑ也。耳を以て聲を聞けども、耳の穴が聞く主にはあらず、耳はただ聲を聞く道具のみにして、耳より外に聲を聞く主たしかにあること也。若し耳の穴が聲を聞く主ならは、死人も聲を聞くべし、死人にも耳はあれども、聲を聞くこと能はず。ここをもつて知るべし、耳はただ聲を聞く道具のみにして、耳より外に聞く主のあることを。平日聲の聞ゆる時もきこへざる時も、聞く主何物ぞとおしかへしおしもづして、ふかく疑ふべし。口にて唱ふることにてはなし、色々の分別妄想おこるとも、少しもいろはず、ただ深く疑ふへし。一身の力をつくし、先にあてをせず、悟らんともおもはず、さとるまじともおもはす、小兒のむねのことくにして、いよ〳〵ふかく疑ふべし。又種々の妄想少しもあらんときは、是れは工夫の疑よわき故なりと心得て、いよ〳〵深く疑ふべし。いかほど深く疑ふても、聞く主しれざるものなり。しれざる所について、此の時いよ〳〵深くおしきはむべし。拔隊法語に曰く、料簡更にたえはて、如何ともせられざる、是れよき工夫なりと云々。前後左右をかへり見す、一心不亂にして、こゝにわが身のあることをしらず、大死人のごとくにして、ふかく疑ふべし。だん〳〵深く工夫して、茫々となることあり。此の時又聞く主何物ぞと大疑を起し、通身汗を發し、大死人のごとくいよ〳〵深く疑ふべしのち〳〵には大死人といふことをも知らず、大疑工夫といふことをもおぼえず、通身大疑團となりてあるうちより、大夢のさむるごとく、死はてたる物の急に活るがごとく、忽然として大悟といふ所に超出す。此の如く大疑情を起して工夫をなさは、悟道見性、何ぞ時刻をかぞへ歳月をつまん。眠工夫なゞさみ工夫にいたし、分別知解を存して見性を求めば恰も木によりて魚をもとむるがごとし。毛頭も自已の情慮を加へて見性を求めは、東にゆくべき者の西に赴くが如し。工夫もし大疑情なくんは、坐して百千年を經るとも、悟了の日あることなけん。もし又先きにいふごとく大疑情をおこして工夫をなさば、一夜にも悟り、一時半時にも悟るべし。古人十歳にしても悟り、十三十四乃至十五十六の女子すら悟りたりためし少しとせす、況や血氣雄壯の人をや。諸方參學の諸大德、純白貞實にして、道を學すといへども、往々龍頭蛇尾となること、此の工夫にも如何ほど工夫をなせは、悟るといふ限あることを聞かさる故也、此の工夫にも慥に限あることなり。工夫の限といふは、大疑の一念、底に徹するほど工夫をなせば、百人は百人共に大悟し、千人は千人共に大悟ある事也。師拂子を竪起して曰く、還て會麼。元來大道工夫、修行の力をかるべから

す。もし未た會せずんは、歩を退けて大工夫をなすべし。

十三　悟證の上に大事あることを示す事

一僧來參、師に呈して曰く、某すでに個事を究明して求むることもなく、捨ることもなく盡未來際までただ一日と見得して、茶に逢へば茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫して、自己の妙用自在を得て、安穩なることを述べかたし。和尚、願はくは聖胎長養の工夫をしめし玉へ。師の曰く、今時佛法の弊風、華夷一般、そのうちより斯くまでの力量、若僧甚だ感得す。そのうへにまた〳〵一大事あり、猶以て精彩をつけ、底をつくして修錬あるべし。佛法は大海に似たり、轉た入れは轉た深し、我悟れり會せりとおもふ念慮、米一粒を百分となし、その一分あるだも、未だ實悟にあらず、古人の容易に人を許さゝることは是れが爲めなり。若し實に悟るときは、我悟れり證せりとおもふ心念、底をつくして一點もなきの也。況や佛法邊にのぞむときは、佛法を會したるやうにあれども、やゝもすれば人前に露呈しかたき見くるしき念慮うかびおこるをや、心が問はゝ如何答へん。僧の云ふ、我悟了すでに分明なり。夢幻空華何ぞはしやくを勞せん。師の曰く、大德實に恁麼ならば、古人の語を見るべし。ある僧問ふていふ、祖意と教意と同か別か。ある禪師答へていはく、

金烏東上人皆貴。玉兎西沈佛祖迷と。此の意旨如何。僧摸様をなさんとす。師の曰く、摸様をなさず、喝をも用ひず、速に道へ速に道へ。僧擬議す。師の曰く、擬議にわたらは六十棒、速に道へ速に道へ。僧禮拜す。曰く、大德、先きにいふごとくんば、これ底の祖語何ぞ難からん。若し實に悟るときは、目前の茶碗を見て、分別料簡を加へず直に茶碗といふごとく、扇子を見て直に扇子といふごとく、一切の佛語祖語、一時に分明なり。大德いまた悟らずして悟れりとおもふて、大なる誤なり。却て長養の工夫を問かんとす、悟了實なるときは、長養の工夫何ぞ人にもとめん、自ら知るゝことなり。大德皆以て誤れり。今日より歩を退け、舊見を放下して、大疑團を起し大工夫をなすべし。設ひ千了百當も皆是れ心の知るところにして、實悟にあらず。實悟は迷悟の兩頭を萬里にはなれ、生滅苦樂の二頭を萬々里にはなれたり。世尊、圓覺經に說き玉ふ、ろの心には、ないし畢竟了知如來淸淨の涅槃を證するも、皆是れ我相也と云々。此の如く如來微細の眞語、たゞ〳〵人を して眞正の見解を得せしめんための大慈大悲なり。或は菩薩十地の階級ありて、等妙の二覺を超えて佛地に到り、又ゝ佛地をもはるかに乘り超え、限りなき所に到ることを說き玉ふも、ただ悟に悉く淺深高下あるゆゑなり。臨濟和尚錄中にも、悉く修しつくすことをの

べ玉ふ、猶又披見あるべし。老僧幼年より禪定三昧にして、ことゝく修しつくし、その後諸方に遊歷してあらゆる諸大德に見え、酸苦を嘗盡して、今日此の如し。況や此の老衰他日の相見も期しかたく、設ひ虛に出頭し來るも、實に出頭し來るも、老僧ただ眞實をもつて垂語す、諸方參學の諸大德、昔も今も小見を以て足れりとし、古則公案を管見して、我大悟すと思へり、或は空寂をとめて悟と思ひ、皆小見解に腰をかけ、足ぬのおもひをなして工夫をやむ、是れによりて大器量の人天下に稀れなり。古人曰く、大唐國裡還て禪師なきことをなるや、禪なしとはいはじ、ただ是れ師なしと。或は云ふ、千里の名馬は世に多しといへとも、名馬に仕なすほとの伯樂なきを慨く。老僧むかし十二歲の時、手習の友とせし童、同年にして驚風の病を以て一夜の中に死す、我是れを見てより生死の無常なることを感して、寢食やすからず、一室に閉居すること六七日、そのとき自らおもふ、佛道に成佛のことあり、まさに此の事を學すべしと。そのころ羽州高寺に格外和尙あり、こゝにゆきて剃髮す。その後他の一僧より拔隊の法語を得て、法語のごとく毫釐もたがはす工夫をなす。拔隊法語に曰く、ただ幾たびも悟らるゝ悟を打すてゝ、根にかへり本にかへりて工夫をなすべしと云々。そのとき自らおもふ、いくたびなりとも悟のおよぶところを打すてゝ、ふかく工夫をなすは、後には必す大悟大徹の處に到るべしと。此の意を篤く信じて、これよりいよ〳〵工夫に入る。その後いくたびといふ限もなく悟所あれとも、終に工夫をゆるさす、或は山居、或は店居、歲月春秋を忘却して坐す。その後越後の國蒲原郡に龜庵和尙に逢ふ、龜庵和尙一見して悉く印可付法す。此の如く印可付法にあづかるといへとも、猶又長養精修して、奔馬にむちうつが如し、氷の水より生してまさるこをを覺ふ。世尊、一大事因緣を說き、無上の大道を說き玉ふ、毛頭も容易の思をなすこをなかれ。若し此の一心佛性に是れまでが悟の分、是れより外に悟なしといはゝ、無上の大道と名づけし、無上とは上なしといふ義なり。世間諸道諸藝の中、是れにならぶ物なく、これに超ゆる物なく、達所も又窮りなきを以て、無上の大道と名づけたり。公案は何れなりとも、ただ一公業をとり定めて深く疑ふべし。實に一公案を悟明せば、一千七百則、一時に見究すべし。一句了然として百億を超ゆといへり。公案の事、此の公案を工夫して、又外に移り聞く主をやめて、趙州の無にうつりなをするときは、心頭二途にわたりて、大疑團おこらざるものなり、ただ初めより末々まで一公案を深く疑ふべし。愚人は笑ふべし、智者は能く是れを知る。佛道の導師となること、等閑のことにあらす、毫厘も差あれば、天地の隔あ

り、愚暗の凡夫をみちびきて成佛の實地に到らしむること、毫髮の差ある時は、一盲の衆盲を引て火坑に入るがごとし。師は針のごとしといへり、針に毫髮のまかりあれば、あとにつく糸のまかるがごとし。抑も佛道の師といふは、我が生れさる以前、我が本体いづれの所に如何やうにしてありし、死して後、我か此の本体いづれの所に如何やうにしてありしや、釋尊出世のときは、我か本体いづくにありし、釋尊今はいづくにありし、その外過去七佛を始め、達磨大師及び臨濟禪師、自餘の祖師菩薩、或は孔子、我は天照大神、我は文武無數の諸賢人、その外自餘の父母兄弟、自他の親族朋友まで、生前死後、いづれの所に如何やうになりて落在すと、手の中の物を見るごとく分明に見徹せざれは、まことの佛道の師にあらす、若し此の如くならすんは、生死自在を得る大解脫の人とはいはじ。此の如く老僧幼年初心のことまでを談するも、ただ人をして眞實の修行をなさしめんがため也。大德、綿々密々に工夫をなすべし

十四　和光行脚の時學士に逢ふことを示す事

師一日、衆に語りて曰く、むかし老僧和光行脚の時、越後の國にゆく、ある太守の家中に一千石を領する士あり、早歲より好學にして、文才甚た多し、近隣の各寺和尚長老といへ

ども、是れに敵する人なきが如し。よつて四書五經朱子の註釋を本として、佛法をけづりないがしろにして、僧侶を見ること奴僕のごとし。その雙親後日の果報をおそれて、老僧をして異見を加へしめんとす。老僧即ち是れに對面して云ふて曰く、佛法をけづりにくまれし由承る、佛法の本体、佛法の根源を能く〳〵見定めて、實に惡といふことを知りつくして、かく佛法をそしりにくみ玉ふや、佛法のみにあらず、世間一切の事、能くその根源をつくさゝれは、慥に善慥に惡とは名は付けがたき物なり、士如何ぞや。士曰く、さてさてきびしき難問かな、これほど細なる問は始めて承る、ただ佛法は地獄ありと說き、鬼ありと說きて、すべて方便虛誕のみにして、元來何もなき事とおもひ、これによりて佛法をそしりたり。老僧曰く、さて〳〵學者には似合はざることかな、これつらのことを難問なとゝいひ、或は佛法はただ方便虛誕のみにして、元來何もなき事と思はれしこと耻かしきこと共也。佛法とは何物を名付けて佛法といふことを知りたまはす、却て佛法をそしりにくまるゝこと、謬といはんか、愚といはんか、言語道斷のこと共なり。何物を名付けて地獄といひ、何物を名付けて鬼といひ、何物を名付けて佛法といふことを知りたまはずんは何物を名付けて儒といひ、何物を呼びて明德といふことをも、いまだ知られまじ。抑も佛

法佛道と呼ひて、昔より名目の世間に流布し末代に響くことは、佛法に慥に本体ある故なり。本体慥にあるゆゑに、佛法と名を付けたり。ただ佛法のみならず、世間一切の物、本体なき物には、その名つけかたきもの也。書籍は慥に本体ある故に、書籍といふ名をつけたり、硯は慥に本体あるゆゑに、硯といふ名をつけたり、鎧と名つけ、甲と名づくることも、又々斯の如く、一切の草木禽獸に到るまで、慥におの〳〵本体あるゆゑに、おの〳〵その名具足せり。風といふものあり、目にも見えず、手にも取られざれども、枯木を吹倒し人家をくつかへして、慥に音相を具す、よつて風といふ名をつけたり。影といふものあり鏡にうつる影、人の影、その餘の一切の影、手にもとられず、なしといはんも宜べなれども、慥に色相を具す、よつて影といふ名をつけたり。世間一切の物、音相もなく、色相もなく、行相もなく、すべて形体なき物には、その名つけがたきものなり、ただ何もなき所をば、空とより外は名つけかたし。佛法もし何もなき物ならば、空といふべし。去かるに往古より佛法佛道と呼んで經論にのせ、人口に鳴動す、佛法豈に本体なからんや。士低頭して云ふ、我迷ふこと甚し、願はくは佛法の眞旨を聞かん、微細に慈示し玉へ。老僧曰く夫れ佛道といふこと、別の事にあらず、惟今手を動し、口を開くこと、これ何の道理ぞ、

是れ人々具足佛法の妙用なり。此の一心の名を佛法と名つけ、佛道と名つけたり、これを佛道は元來何もなき事といはんや。若し元來何もなきことならば、即今の手を動し、足を働す底、これ何物ぞ。佛法とは我か一心の名といふことを知らすして、却て佛法をそしりにくむは、直に我か一心をそしりにくむにあたるなり。これ大愚にあらすや。大文盲にあらずや。士が學ふ所の書籍は、是れ何等の書籍ぞ。天地の間あらゆる書籍は、或は儒書か、或は神書か、或は佛書か、或は道書か、或は歌書か、或は軍書か、或は醫書か、何れも皆身と心との二を說けり、畢竟此の何をか學問するや。身と心とをはなれて、外に書籍ありといはゝ、邪書なり、外道の書なり。士云ふ、某多罪、今日始めて此の如きの妙理を承る今より舊見をひるかへし、願はくは師の誨をうけんと云つて、禮をなすこと再三なり。老僧、此の士の宅に滯留せしこと三十餘日、此の士後に大工夫者となれり。

十五　大疑工夫を示す事

師あるとき衆にしめして曰く、工夫疑團は、百萬騎の大敵をただ一人にて拄へるごとくにすべし。聞く主を疑ふものは、聞く主何物ぞと、大疑團を起して深く工夫し、趙州の無を工夫せんも、又此の如く何處までも深く疑ふて居る、その中より色々の分別、妄想起らば

是れは妄想の大敵に味方の工夫の城郭を奪取らるゝと心得て、いよ〳〵深く疑ふべし。大疑の一念を寶劍として、妄想の大敵少しも出來らは、直に聞く主何物ぞと斬りすつべし。此の如く行住坐臥共に修せは、太平の日極めて有るべし。老僧此の如く千變萬化亜語すといへども、ただ是れ人をして深く心性を悟らしめんためばかりの言なり、記憶しておくてとなかれ。

十六　淨心妄心を示す事

師一日、しして曰く、人々具足して二種の心あり、工夫修行の人、必す聞かすんはあるべからす、人々二種の心あることを、智識より能く〳〵聞かされば、動もすれは工夫に退屈して、生死の大事をとくることと能はさるもの也。此の故に如來を始め、千里を遠しとせす善知識を尋ねよと說き玉ふ、百里三百里すら法のために步を運ぶこと、大親切にあらずんは能はす、況や千里を遠しとせざることをや、誠に深き旨あるかな。二種の心といふは、いはゆる淨心と妄心となり。忘心といふは、分別妄想の心念なり。淨心といふは、分別妄想の起源なり、これ即ち淨心佛性なり。淨心妄心、元來同一にして又二なり。たとへは燈と光との如し、燈の本体あるゆゑに自ら光あり、淨心佛性の本体あるゆゑに、分別妄想の妄心なり、淨心は本体、妄心は用なり。往々平日の人は、妄想分別の心をおさへて、これ我が誠の一心なりと思へり。是れによりて工夫の人、動もすれはこのやうなる惡念妄念多きあさましき一心にては、佛菩薩なとの如く悟はことなるましと思へり。これより工夫にも退屈し、我は凡夫なりと云ふて、惜いかな半途にして一大事を廢することを。或は分別妄想の心をおさへて、これ我か本心なりと思ふゆゑに、人十人あれば、一心も十色ありと思ひ、百人は一心も又百色あるやうに思ふこと、大なる謬なり。淨心佛性は天地も未たひらけざるの以前より今にる到るまて、うつりかはる色もなく、昔の釋尊諸佛にも、今の凡夫衆生にも、草木禽獸にも、てきうすきの差別もなく、一面におし通せり。心經に、生せす滅せす、增さず減せすと說き玉ふは、此の淨心佛性のことなり、工夫修行は、妄心の分別の心を以て、專ら工夫疑團して、淨心佛性を明らめ悟ることなり、能く〳〵得心あるべし。

十七　悟に古今の別なきことを示す事

僧來參、問ふて曰く、たとひ今時十分悟了したりとも、釋尊の見處には遙に及ふまじ、仔細は如來は八千度往來し玉ふて、諸餘の行法修を盡して、圓覺果滿なればなり。師の曰く此の事は知解情慮、諸經論錄のうへを以て、全くはかり及びかたき所なり、大德直に大疑

圖を起し、實參實悟して、分明に自知すべし。設ひ老僧辯懸河の如くにして、古今一點も差別なきことを論するとも、ますゝ疑心多からん。見すや、臨濟禪師の曰く、山僧が見處に約せは、釋迦と別ならすと云々。大德、臨濟の餘流ならずや、祖師は妄語し玉ふや否や。はぢを祖門にあくることなかれと、師詰問すること三四回。僧ただ黙坐するのみ。師の曰く、これらの祖語、千偏百回眼に遮るといへども、自已の受用をなさゝることは、信不及なるがためなり。此の故に如來經中に末世の衆生誤あらんことを畏れて、法に古今の二法なく、悟に佛衆生の隔なきことを喩を以て說き玉ふ。其の喩に曰く、先づ一挺の蠟燭に火をともし、その跡より蠟燭十挺二十挺を以てその火をうつし、此の如く展轉して、百挺二百挺乃至二千挺、或は一萬挺、此の如く始め一挺の蠟燭の火をわかち移すに、終りの萬挺の火に到ても、始め一挺の火と毛頭もこきうすきの差別もなく、始め一挺の火は甚たあつく、終りの萬挺の火は少しあつしといふ差別なきを以て、自性を悟ることも、又々此の如しと、釋尊說き玉ふ大悲心にあらずや。こゝを以て知るべし、實悟なるときは、釋尊の悟と今時と全く差別なきことを。すべて諸經は經義とて、義を以て述へ玉ふ。經中種々の奇怪の事多しといへとも、皆一心佛性のことのみを、彼になぞらへ是れになぞらへて說き玉ふ。看經の眼なくんは、惑多からん。かるか故に文の如く義を解せは、三世の諸佛のあだなりと呵責し玉へり。如來八千度往來は、ただ大數をあけ玉ふ、何ぞ啻に八千度のみに限らんや。或は世上に觀音の再來、文殊の化身なりといへることあり。天地一切の人、一切の物、再來にあらざるは一箇もなし。老僧かくいふといへども、いよ〳〵狐疑をまさむ、實に實悟見性して、自ら知るべし。元來大道修力をたのむ物にあらず。

十八　扳隊法語の初行を示す事

師一日しめして曰く、扳隊法語の初の行に曰く、輪廻の苦をまぬかれんと思はゝ、直に成佛の道を知るべし。成佛の道とは、自心を悟る是れ也と云々。此の一行、成佛の捷徑、如來四十九年の要、最上乘の直說あり。三世諸佛の應現も是れがためなり、無邊衆生の願欲もこれがためなり。輪廻とは、譬喩の言にして車の輪のめくることなり、何を輪廻の苦といへは、世間貴賤貧福、老若男女の人々、平日十二時中、この心の一が善につけても惡につけても、車の輪のめぐるごとく、めぐり苦むことなり。身上のよき人は、よきにつけて此の心がめぐり苦み、身上の惡しき人は、あしきにけつてめぐり苦み、老人は、年のよりたるにけつてめぐり苦み、若かき人は、若かきにつけてめぐり苦み、女人は、女人一道に

つけで此の心がめぐり苦み、商人は、賣買につけてめぐり苦み、百姓は、耕作につけてめぐり苦み、高位は、高位なるにつけて此の心がめぐり苦み、下賤は、下賤なるにつけてめぐり苦むなり。この事終れは彼の事來り、喜去れは悲來りて、一年一月の中といへども、一日も安穩といふこともなく、此の心一つが八方十方へくるり〳〵と車の輪のめぐる如く萬事につけてめぐり苦むなり。このめぐり苦む心を指して、法華經に、三界は安きことなし、猶火の宅の如しと說き玉ふ。此のめぐり苦み心をそのまゝ來世に持てゆく時は、直に惡道地獄と轉しかはりて、今の百倍の苦あり、外より得る地獄にあらず、人々手作の地獄なり。すへて今生來世の苦をおしあつめて、輪廻の苦とは云ふなり。此の輪廻の苦をまぬかれて、大安樂の處に到らんと思はゝ、直に成佛の道を知るべしとなり。直にといふは、緩々たることにあらず、惟今眞直に直に成佛の道を知るべしとなり。直にと云ふは、死しての後のことにあらす、惟今生きて居る間のことなり。成佛の道とは、佛になる道といふことなり。大半世間の人は、今生にて後世と云ふものを能く願ふ時は、死しての後にとてともなく、佛といふ物になるやうに推量して、然かも慥に成不成のわけもしらす、愚なること甚し。誠の成佛を遂くるといふことは、惟今直に一心を悟りて、不生不滅の全体に能く到りたる所をいふなり。此の如く能く到りたる人を、佛とも大菩薩とも名つけたり、佛道の本法極意は皆此の如し、なか〳〵とほ〳〵しきことにあらず。自心を悟るとは、自分の一心を悟るといふことなり、悟といふこと格別のことにあらず、ただ一心を明らむることなり。悟を明らむるとは、元來同し言なり。世間の人は、悟といへは、佛菩薩の再來なるやうに心得て、常の人は至てなり難きやうにおもふこと、大なる謬なり。明らむるといへは、誰もなりやすきやうに心得て、私は斯の樣にあきらめたり、彼の人は明らめのよき人なりと、平日の言にはいへり。元來悟とは明らむることをいふなり。隨分工夫信心して、自分の一心を明らめたる所を悟といへり。この一心を悟る工夫信心は、末世の迷の凡夫のみなすべき信心修行なり。佛菩薩は、悟によりて佛菩薩の名を得玉へり。佛菩薩の再來なるばかり悟といふは、甚た謬なり。此の故に諸經の中に末世のために說くとの玉へり。能く〳〵この道理をわきまへて、平日油斷なく心地修行して、速に成佛を得べし。惟今にも臨終に及はば、何事を以てか其の時の苦にあつべきや、渴にのぞみて井をほることなかれ。

十九　分別妄想の辨別を示す事

一士來參、問ふて曰く、前日より和尚の慈示を蒙りて、工夫をなすといへども、分別妄想いよ〳〵盛なるが如し。この妄想分別つきずんは、一心を悟ることなるまじ、猶又垂語を玉へ。師の曰く、元來この工夫修行は、妄想分別を拂ひつくすための修行にもあらず、心氣をおづむるための修行にもあらす、只念のおこるにも、氣のおづまるにもかまはす、只ふかく工夫して、一心を悟るための修行なり。分別を拂ひのぞき、氣をおづむることは、小乘或は外道仙人などの修行なり。紫朱黑白よく〳〵わかつべし。釋尊、經中にこれらのことを譬喩を引て說き玉ふ。その喩に曰く、山岳深き處に一の岩窟あり、人跡不到にしてこの岩窟甚た暗し。二人の男あり、この處に到る。一人の男、箒を以て岩窟の中の暗物を拂ひのぞかんとして、力をつくせども暗物更にのぞかす、いよ〳〵力を竭して日日拂ふといへとも、更につくることあたはす。彼の一人の男、火をともして岩窟の中に入る、右の暗物忽ち打うせて、明なること晝の如し。火を燃して入ると、暗きものはつくるとも見えず、忽ちうせたり。人々一心を悟ることも又々此の如し。一心を悟るときは、妄想分別の打うすること、岩窟に火を燃し入ると、暗物忽ちつきはつるが如し。釋尊、火を燃して入る所を一心を悟りたる所にたとへ、箒を以て暗物を拂ふを妄想分別をきらひのぞくに喩へ玉ふ。人の心は昔も今も一同なり。火を燃して入るが肝要なり。暗きを拂ひのぞくは愚人なり。

二十　近侍の僧に示す事

師の近侍の僧、おばらく遊方して他の一寺の長老に相見す。長老問ふて曰く、澤水老師、平日如何が衆に垂語すや。僧の曰く、老漢、平日萬事を放下し、諸緣を忘却して大疑を起し、佛祖のごとく直に自性を悟るべしと也。長老云ふ、澤水老師のしめす所大に謬なり。僧の曰く、先德皆以て此の如し、澤水老師の誤いづれの所にかある。長老云ふ、見ずや、六祖大師の曰く、本來無一物。何處惹塵埃。本來無一物の所に强ゐて疑團工夫をなして、この何物をか悟らん、若し實に悟るべき物あらは、六祖大師何ぞ本來無一物といはん。てゝを以て知るべし、澤水老師、人をして誑惑せしむることを。僧忿懟して言をつくせども かなはす、十有餘日を經て歸庵し、即ち師に一々前事を呈す。師叱して曰く、汝、平日不信、是般のことを以て他の長老に屈慢せらる、何ぞ檀經中の大師の語を以て、蕊直に他をいひつくし、空見の者をして正見となさゝるや。僧の云ふ、檀經の中、無一物を破却する底の語も亦ありや否や。師の曰く、歷々として有り。汝、幼歲より眼に見、口に誦すとい

へども、恁麼の敗闕、信不及の致す所なり。見すや、六祖大師、衆にしめして曰く、我に一物あり、頭なく尾なく、名もなく字もなし、諸人還て知るや否やと。僧駭然として罪を悔ゆ。師の曰く、これを無一物と云はんか、有一物と云はんか、若し實に無一物ならば、大師何ぞ我に一物ありといはん。こゝを以て知るべし、文の如く意を解せば、實に三世諸佛の寇なることを。僧これより深く工夫に入る。

廿一　文字の事、山居の可否を示す事

あるとき僧來參、呈して云ふ、某元來修道の志ありしに、不幸にして吾が師はやく化す、よつて素志を遂けず、惟今住職の身なれば、文字書籍等も取扱はねば、寺役なりかたく、山居の志あれども、當時の事にかなはず、兎角日用文字言句、修道の障ならんか。師の曰く、此の一心佛性は、文字言句などに惑はされ縛せらるゝやうなる物にあらず、文字言句は、はるかの後に人の分別才覺を以て作り出したる物なり。此の人々の一心は、人の作り出したる物にあらず、天地未分の以前より、自ら明々として、今に到るまでかはる色もなく、十方世界に偏滿せり。平日深く工夫して一心を明らめ、天地と我と一体の所に到りたるを、成佛作祖の田地とす、釋尊諸祖の本説は皆此の如し。隨分寺役をつとむるうちより、

深く工夫あるべし、兎角文字言句を忘れはつるほどに工夫あるべし。山居の事、畢意無益なり、此の一心、所により境によりて改るものにあらず、いかほど山中の靜所に居るといへども、元の散亂の心を伴ひてゆく故に、靜所いよ〳〵散亂す。六祖大師曰く、道由心悟、豈在坐也。この一心坐にもよらず、住所にもよらず、いづくにあらんも、只た親切に工夫をなすべし、所により境によりて悟ることにあらず、只た工夫によるべし。

廿二　戒行を示めす事

一士來參、問ふて曰く、和尚の慈示をうけてより、信心怠惰なしといへども、この頃おもふに、五戒なりとも保持せずんは、畢竟工夫も無益たらんか、若し又五戒を保つ時は、人世の交會に差支もあらんか、この義如何致すべきや。師の曰く、此の工夫修行は、佛道の本法、成佛の捷路にして、全くせばきことにあらず、老僧平日示めす如く、聞く主何物ぞと、間斷なく路を行くときも工夫し、家にある時も働く時も、ねてもさめても、深く工夫をなすべし、讀むこと書くこと算用の時は、工夫なしかたし。右の用事終はらん時は、直に又本の如く工夫をなすべし。日々此の如くなるときは、五戒十戒は物の數にあらず、平日定共戒にして、萬法戒を保つに當るなり。戒といふは、これ心戒なり。大唐徑山寺の額

に書して云ふ、百千佛を建立せんより、一句自然を悟るべし、無量の戒行を保つより、心の一戒を保つべしとなり。もし又老僧示めす如くに工夫をなさずして、萬法戒を保つといはゝ、この理あることなし。士又問ふて云ふ、時々渡世のことにつき、分別を致すことあり、工夫の障ならんか。師の曰く、公用内用我は渡世のことには、分別を用ひて、隨分方々やうすよく取はからひ、萬の事、平生の人に少しもかはることなきやうに心得て、少しも人をあなどらず、專ら兩親を大切にし、主人あらん人は、主君のことを我が身のことをはからふごとくにして、高位をば幾重にもうやまひ、下賤をば隨分あはれみて、さて平日無益の分別了簡をは打すて、この工夫信心に取かへ、いよ〳〵深く工夫あるべし。士喜びて退く。

廿三　釋尊在世の誘導を示めす事

師あるとき衆に示めして曰く、三千年に一度ひらく曇華には逢ふといへども、この大乘正法を聞くことを到て難きことなり。如來四十九年の間、偏圓半滿の說、權實頓漸の敎、衆生の機に順ふて、法門萬種にわかるといへども、菩薩諸祖の論錄、病に應して藥法無量ありといへども、只た今日人々の自性を悟らしめん一の大悲なり。佛祖聖賢の洪恩、おの〳〵忘るべからず、むかし靈鷲山會上、釋尊在世し玉ふときは、僧俗をわかたず、信者を分類別局して導き玉ふと聞く、その理鋭にして、直に自性を悟る工夫信心に入るものをば、その類を集めて一所に修行をなさしめ玉ふ。以下中乘及び小乘の類をば、又一所にあつめて修行をなさしめたり。或は名號を唱へ、書寫誦經を好む信者をば、又その類を一所にして信心なさしめ玉ふ。此の如く一切を捨て玉はず、利生廣大なり。さて釋尊、信者のじせつしゆくひを勘辨し玉ふて、中下の信者及び名號書寫等の信者にの玉ふには、汝信することを久し、今の修行より外にありかたき修行あり、汝又これをなさんや否や。信者のいふ、是れより外に一重よき信心あらは、世尊何ぞ先年より其の修行を導き玉はざるや。世尊のたまはく、汝先年は剛氣猛情にして、なか〳〵合點あることにあらず、年久しく書寫或は名號を修行したる德ありて、今日汝此の如し。信者いふ、この外に一重よき修行のあらは、速に敎へ玉へ。世尊のたまはく、今猶早からんと、此の如く三回四回しんじやくし玉ふてその後心地工夫に入れしめ玉ふ。その餘の信者をも此の如く導き玉ふとなり。然るに今時は理のよく直に一心を悟る修行に入るべき人にも、名號題目或は誦經、理のあしき信者にも、年久しき信者にも、題目名號或は書寫、一朱階梯方便のうちにのみ留置せしめて、這

箇の玄旨を埋却す、悲むべし惜むべし。たとへば醫師ありて、風氣にも敗毒散を與へ、中暑にも敗毒散を與へ、その外氣血痰むし腹にも敗毒散を與ふといはゞ、この理あるべからず。釋尊諸祖の本懷、豈に此の如くならんや。もし又右の道理を深くわきまへて教化し、信者も又右の道理を能く〳〵心得て信心せは、百川おのづから大海となるごとく、枝葉おの〳〵根株に歸するが如くにして、一切を攝取して捨てず、誠に利生廣大なるものなり。

廿四　學文の次第を示めす事

一僧相見、問ふて曰く、和尚平日僧徒の學問せしことを嫌ひ玉ふと承る、實なりや否や。師の曰く、老僧元來大好學なり、何ぞ學問を嫌はん。僧のいふ、恁麼ならは、僧徒にいづれの書籍をか學せしむや。師の曰く、世間一切の書籍を一々學せしむ。僧いふ、一切の書籍甚た多し、おそらくは妄語し玉ふか。師の曰く、何ぞ妄語せん、夫れ世間一切の書籍は儒書か、神書か、佛書か、莊老の書か、軍書か、醫書か、歌書か、これらの書おの〳〵身のもちやう心のおさめやうのみを說けり、老僧平日この書物等に少しもそむかず、いづれも皆用ゆ、何ぞこれを學問を嫌ふといはんや。大德云ふ所の學問は、いづれの學問ぞや、平日眼に視、口に誦するといへども、その書の敎の如く學せされば、學問といふにあらず、學問といふは、書を見てその書の敎に少しもそむかず、身のもちやう心のおさめやうを學ぶを學問といへり。若し又身心の外に書籍あらは、學ふに足らず。經に曰く、法なほ捨つべし、況や非法をやと。その實參實悟に到ては、法すら捨つべしと云へり、況や悲法においてをや、思ふべし、愼むべし。

廿五　絕學の次第を示めす事

僧來參、呈して曰く、某五六年間、筆硯を手に取らす、書卷をも手にとらす、絕學にいたし、平日工夫のみ致すといへども、未た大事究明の日に到らす、願はくは開示し玉へ。師の曰く、工夫は只た疑ふかくして、他途にわたらす、一公案を提撕ある時は、了悟の日極めてあることなり。了期なきことは、只た工夫の疑よわきゆゑなり。大疑の二字、千語萬句の要なり。さて惟今絕學といはれしこと、大なる誤なり。絕學とは、悟了底の人のことなり。眞覺大師證道歌に曰く、絕學無爲閑道人と。筆硯を手にとらす、書籍一卷をも手に取らす、工夫修行一偏の人をは學人といへり、絕學とはいはじ。臨濟和尙を始め、修行底の人を學人と呼び玉ふ。一言半句といへども、誤なきこと肝要なり。

〔絕學〕自己の心地を了悟して、善惡是非、生死涅槃等一切對待の見を脫し、一切の感知分別を離れたるをいふ。

廿六、儒釋道の次第を示めす事

一僧問ふて曰く、儒釋道といひ、儒佛神といへり、この三道四道一致と承る、おかるときは釋尊、孔子、老子、天照大神この四見所、これも千斤、彼も千斤にして、少しも輕重なきや否や、師の曰く、佛祖聖賢及び諸道諸傳燈等、おの〳〵途を異にし轍を同じふすといへども、もし又權衡を以てせは、悉く輕重淺深なくんはあるべからず。僧いふ、いづれをか輕とし、いづれをか重とせん。師の曰く、門より入るものは家珍にあらず、大德、平日前後左右を顧みず、純一無雜に工夫をなすべし、生死事大、無常迅速なり。見ずや、臨濟禪師の曰く、汝か久しく住する所にあらずと。たとひ諸家の萬論を學得し去るも、無量の佛語聖意を聞取し得るも、皆これ一夕の夢にして、白骨ちかきにあり、念々頭然を救ふかの如くにして、速に見性すべし、實に見性分明なるときは、佛祖聖賢諸傳燈、歷代諸祖の輕重淺深等、掌中の物を見る如く分明なり。その時はじめて知るべし、これは輕、これは重、これは淺、これは深、これは虛、これは實といふことを。

廿七、白骨の大厄を示めす事

一士來參、問ふて曰く、世上に二十五の厄或は四十二の厄といふことあり、實なりやいなや。師の曰く、二十五の厄或は四十二の厄は、到てかるきことにて勝けて論するに足らず、人々一の大厄あり、士知るや否や、人々一の大厄といふは、高位高官、賢愚貧福をわかたず、白骨の大厄なり。この白骨の大厄をば、何を祈りてか免るべき、愚なることの甚しきなり。士又問ふていふ、神道に生れたるを穢とし、死したるを穢とし、死したるを穢とせしことあり、もし實に死を穢とせば、神を祭るに魚肉を獻すること心得かたし、魚肉はもと畜生の死したるなり、天照大神及び諸神、人をさけて何そ畜生を愛し玉ふや、神においてあるまじき事也、願はくは和尚の慈示を受けん。師の曰く、天照大神の本志は、士の推量とたがふことと雲泥なり、神者に生れたるを穢とし、死したるを穢とせしことと、甚た深き道理あり、今士がために是れを語らん、慥に聞くべし。元來この人々の身と心とに、毛頭も生滅の相もなく、去來の相もなし、然るに凡夫この道理をさらずして、生れたりと云ふて喜ひさわぐこと、聞きたうもない穢はし、本來死するといふ事なき所に、死したりと云ふてなげき悲ひこと、聞きたうもない穢はしといふことなり。天照大神の示は、本來此の如し、世間ろの根源を知らずして、謬て神靈を侵し、浪に神者をうつこと、大なる過なり。世間一切の事、その根元を見盡し聞きつくし知りつくさずんは、是非を論することなかれ。

廿八　學徒平日の用心を示めす事

師一夕、徒衆に示めして曰く、古人曰く、參は實參なるべく、悟は實悟を要すと。毛頭も退屈の心を生ずることなかれ、個事は大海の如し、轉た入れは轉た深し、悟所邊際なく、達所窮りなし。天も自己佛性より涌出し、地も自己佛性より漏出し、日月及び草木國家山河も自己佛性より漏出したり。此の如く能く到りたる人を法王と名つけ、成佛の境界といへり、諸禪者、容易の念を起すことなかれ。世間の技藝劍術手跡の指南すら、十年二十年の修學にては、妙所をつくしかたく、師道をはりかたし、況や佛道の大導師をや。たとへは手習の如し、三年實に習ふときは、三年分の成功あり、十年習ふ時は、十年分の成功そなはれり、又々よき師をあらひて、その上をつくす時は、いかほどの能書にも到ることなり、又々その上を修する時は、世上に見知る人なきにも到る。心地修行も亦復た此のことし、幾たび悟所ありとも、直に舊見を打すて、初心の時の心になり、もとの如くに大疑情を起して、悉く修し盡すべし、性相一如となること到て難し。古人十年二十年或は身を終るまで、粉骨碎身するは是れがためなり。諸禪者、頭陀にめぐる時も、工夫一偏にして施者の男女の相、貧福の家をわかつことなかれ、是れ又諸佛の規繩なり。諸禪者、平日心をつけて、飲食の節を失ふことなかれ、食は道の基本たり、不時の物を食することなかれ多食飽食することなかれ、煩はくは此の身勇壯のうち、速に大事を窮明せんことを。住所は只たその師をあらふべし、衣食をあらふことなかれ、工夫の時、壁によることなかれ、四方をはなれて正身に坐すべし。工夫に退屈せん時は、此の身かりにして、老若たがひに白骨となることを觀すべし。如來も經中に、晝三度、夜三度、白骨觀をなすべしと說き玉ふ。工夫は只た公案を深く疑ふべし、深疑の二字、一切藏經及び百千の論錄、千句萬語の要なり。工夫の時禪境あるものなり、或は人面、或は鬼形、或は佛形、或は花形、或は通身清淨、或は女形、或は通身なきがごときことあり、これは工夫の疑よわき故なり、工夫大親切なる時は、禪境を愛する心なし。心に隙ある故に、種々の障あり、長るべからず、貴ふべからず、この時はいよ〳〵深く疑ふべし。諸禪者、工夫に昏沈散の病あり、知らずんばあるべからず、昏とは眠なり、散とは散亂なり、此の二種の病は、誰人も知るといへども、沈病尤も知れがたし、工夫の人、十に八九は沈病をとめて殃を招くことあり、沈病とは眠にもあらず、散亂もなく、妄想の念慮すべてつきたるやうにして、然かも慶快清淨にして、久坐すれども勞せず、天地一たび平等の如くにして、空にもあらず、寂にもあら

す、有無是非にもあらずと思へり、工夫の人、これをとめて悟道と思ふものあり、甚だ畏るべし。こゝに住る時は、是れより邪路におつ。この趣あらん時は、一切を放下して、いよ〳〵大疑を起すべし。諸禪者、僧人は女類の事、魚肉の事、金銀の事すべて語るべからず、これ又光德の誠なり。諸禪者、昔も今も幽靈亡魂、火の説、或は神木古木より血を出し、或は古き石佛、石地藏の類、或は化け、或は夜行の説すべて取あぐることなかれ、又なすことなかれ。天地の萬物一々佛性を具す、奇怪異珍なくんはあるべからず。もしその根源を知らんと思はゞ、人々先づ自心を悟るべし。師拂子を拈出して曰く、這箇を見ても直に悟ることなり。諸禪者、還て會麼、元來大道修力をかるべからず、もし未だ得せずんば、歩を退けて大工夫をなすべし。

拾遺

あるとき念佛誦經の信者、師の示を聞きて工夫修行におもむけり、信者あるとき來て、師に呈して曰く、先の日より和尚の慈示に隨ふて工夫をなすといへども、動もすれは前日の

念佛誦經におちて純一ならず、いづれか眞の信心たるべきや、疑心甚た多し、願はくは又〻開示し玉へ。師の曰く、夫れ理の分明ならざるに當りては、二つ物をりと云ふにして考へ、是れは理の重きことなり、これは理の輕きことなりとして、何事も理の輕きを捨て、重きに隨ひ、厚きを取て薄きをすつべし。此の如くならざれば、何事によらず明人にはなりかたし。釋尊、經中に喩へ玉ふこと、今汝かために語らん、至心に聞くべし、まづ二人の兄弟あり、あるとき二人、ふかき山中に入りて、ろこばくの辛勞して薪をきり、二人おの〳〵伐りたる薪を脊に負ひ來る、山を下ることわづかにして、道の邊に銅ある事夥し、その弟は是れを見て、右の薪をうちすて、銅を負ひ來る、兄は斯くまて骨を折りて伐りたる薪を、今更うちすつるは惜しきことかな、後に來りて銅を採るべしとて、終に銅を取らずして、右の薪をおひ歸る。又路八九町ほど下りて見れば、路中に銀子あることを夥し、弟これを見るとひとしく、右の銅をうちすて、わが力にまかせて銀子をおひ來る、兄は又かくまて辛勞して採りたる薪をうちすつるは、惜しきことなりとて、薪を負ひて銀子を採らず。又路一里ばかり過きて見れは、路邊に黃金あることを夥し、弟これを見て、直に右の銀子を打すて、脊も破るまでに黃金を負ひ歸る。兄は又もとの言をなして薪を負ひ、黃金を

採らずして家に歸る。兄のちに右の銅銀子黃金のありし所へ往きて見るに、跡はてもなし、終に手を空しくして歸るとなり。釋尊かくの如くの大慈願、後人何を以てか是れを報せん、人々今日たまゝ大乘の本法を聞くといへども、智識の示の如く修せざれば、右の銅銀子黃金を採り得ず、只た徒に薪を負ふ人に似たり。理の輕重において、右の銀子黃金を採り得たる弟の如くすべし。樊噲も大行は細瑾を顧みずといへり、世間の大行を遂げんとする人すら、なほ此の如し。況や今日愚暗の凡夫、生なから成佛を得ること、豈に大行にあらずや。然るに人の誹、此の障、この遠慮などにからめられ、千萬劫無量の大寶を失ふこと。愚といはんも甚だおろかなり。

二

師つねに示めして曰く、如來、遺教經に說き玉ふ、汝等比丘、もし勤めて精進せば、事として難きものなしとの故に汝等まさに勤めて精進すべし。進むときは、譬へは小水の常に流れて能く石を穿つか如し。若しくは行者の心しばゝ壞廢すること、譬へは火を鑽て未た熱せずして息めば、火を得んと欲すといへども火を得ること難きか如し。これを精進と名づくと。又曰く、木中より火を取らんと欲する人、火のいづるを限りとして、退屈なく木をもむときは、火必ず出づ、もし中頃に退屈せば、如何ぞ火を得ることを得ん、工夫疑團も又々此の如し、能く〳〵思ふべし。

三

師つねに示めして曰く、諸大德、常に飲食の節を失ふことなかれ、身躰を保育し、生命を安全することは、偏に飲食の二にあり、常に多食することなかれ、能くその瓦毒を辨して食すべし、その當分は、その毒目に見えず、心に覺えずといへども、終に病因となりて、或は頓死、橫死の殃を招くことあり、常に好味麁食ともに多く食することなかれ、食は飢をやめんがためなり、衣は寒をふせかんがためなり、このゆゑに如來、經中に汝等比丘、もろ〳〵の飲食をうけては、まさに藥を服するが如くなるべし、好においても惡においても增減を生ずる事なかれ、わづかに身を支ることを得て、以て飢渴を除けと、又常に慚愧すべし、古人も白法を用ゐて、無上の道を成就し玉ふとなり、白法とは慚愧のことなり、我幸に無上道を聞くといへども、未た成就せず、この身のかりなること實に空花に似たり、此の身はおしつけ白骨となりさるべし、此の如くの不信心、さて是れ何事ぞやと、自ら誡め自ら鞭うちて、只た常に聞く主の知れさる所を深く疑ふべし。拔隊和尙示めして曰く、

ぶかく疑へといふも、悟らせんかためなりと。大疑工夫の外、一切の事、一切の業、皆悉く枝葉なり。右の如く常に慚愧をなし、今日も明日も日々にすゝみ、夜々に怠らずんは、誠に至道無難ならん。

四

師一夕、示めして曰く、古今諸大德の法語語錄かず〳〵ありといへども、その中至要なるは到て少し、隨分邪正を辨し、是非をあらふべきことなり。或は知解に走るもあり、或は活達に走るもあり、或は殊勝におつるもあり、皆これ法の病なり、能く〳〵あらひ用ゆべし。實に見性の釋尊諸佛に少しもたがはざるときは、殊勝に見えて殊勝にあらず、活達に見えて活達にあらず、或は活僧と見え、或は殊勝と見え、此の如くの輩、今人の智識と呼ばれたる中にも多し。然れども見性なきにはあらず、只た眞實に修しつくさゝるの故に、未た大悟大徹にはあらず、底をつくして修しつくさゝるの誤なり。かるが故に示にも又足らざる所あり、只た示の足らざるのみにあらず、且又誤等所々に見えたり、能く〳〵飲み恐るべし。只た修行の人大工夫による、工夫は只た公案を深く疑ふべし。ふかく疑へといふは、成佛の根本、佛學の至要なり。實に見性悟道する人は、殊勝なるべき時は殊勝に、活達なるべき時は活達に、いそぐへき時に當てはいそぐ、ゆる〳〵すべき時にはゆる〳〵し、やはらかなるべき時は隨分やはらかにし、はげしうすべき時には悉くはげしうし、時にのぞみ物に應して、自由自在を得たり、豈に慮智才覺分別の及ぶ所ならんや、さるによりて鬼神もはかることなく、外道波旬も窺ふに路なく、佛眼も見ること能はず、況や凡夫の眼に奇妙なり、不思議なり、殊勝なり、活僧なりと見ゆるほどなるは、皆是れ凡夫妄想のはたらきなり。

五

師示めして曰く、世上すべてあさきうわ通りの有相信心の說のみにして、この大乘の正法を說くもの聞く者、千萬人の中にも到て稀なり。この故に如來の本懷、この大乘本法を興隆せんに、大底のことにてはかなひかたし、むかし釋尊も一方の導師ともなるべきほどの諸大菩薩にの玉ふは、汝等無佛國土において、わが此の正法をおこさんに、必す我慢邪惡の輩、種々の障をはなさん、そのとき汝等如何すべきや。諸大菩薩等答へていふ、たとひ邪見我慢の輩、種々惡々罵辱するとも、少しも瞋恚を起さす、少しも畏をなさす、一切の誹、一切の寃、悉く堪忍すべし。如來の曰く、左様のあさき心懸にては、邪見無法の中に

て、この大乘正法をおこすこと、なかなかなひかたし。邪見無法の輩、たとひ刀杖を以て打たゝき、或は毒藥をあたへ、或は鼻をそぎ、目を抉り、腕をたち、脛を折るとも、すきと見ぬ分、聞かぬ分にして、心を大死人の如くにもちなして、すきと先きにいろふことなかれ。もし此の如くならざれば、大法をおこすこと能はず。又この無上道をかるゝしく人に語り聞かすることなかれ。還て謗を起して、甚た法に害あり、愼むべし。又先きより尋ねもとめんに、毛頭ばかりもかくしおくことなかれ。

六、師つねに示めして曰く、貴賤をわかたす、賢愚を論せす、人々母の胎内にやどり、鼻口眉目やうやく全具して、十月を經て出生したり、鼻のやうす、眉毛の次第、口のつきやう、眼の体裁、千人百人といふといへとも、少しもたがはす、さてゝ奇妙の巧藝なり、これ畢竟何物のわざなるぞや、これらのことばかりにても、了簡にも分別才覺にも及はざることなり。これについても自心を悟らんとする志のおこらざることを愚なるかなゝ。さて又日月の運轉、夜かあくると明に、日か暮ると暗く、さてゝ何の道理やら、不思議奇妙の事、平日目前にあることなり。只た人々生れおちてより見なれ聞きなれて、たゝうかう

かとして氣かつかす、おしつけ人々白骨となり去ることをゝ辨へす、ただ日々の世渡にのみ一生をくるしめ、心を惱ましてあき足らず、その終りには何ほどの樂あるかを思へば、終には無間獄裡に墮在して、更に出離のたよりなし、憐れむべし悲むべし。右の理すでしも心中におかん人は、拔隊法語能くゝ拔見あるべし。

七、あるとき歸依の信者、師に呈して曰く、先の日、禪要に志ある人ともに語らんとせしによつて、某一三を語る。某曰く、この身は限あり、必す變滅す。この心は不生不滅にして、終に變易なし。たとへは出火のとき屋は燒滅すれとも、主人は走りいづが如し。この身滅する時、魂は外へ走り去るべしと。師聞きて大に呵して曰く、甚た誤れり、これ外道の惡見あり。むかし大惠和尙、一日ある居士の宅に過きる。居士、壁間に白骨の形を描き、その傍に書して曰く、尸は這裡にあり、その人いづくにかある、乃ち知る一靈皮袋に居せることをと。大惠和尙見て大に呵して云ふ、この偈は汝が作れるものか、これ即ち外道の惡見なり、汝誤れりとて、即ち改め點して曰く、即此形骸。便是其人。一靈皮袋。皮袋一靈と。これを以て知るべし、今又汝も誤れることを。元來この身にも少しも生滅の沙汰な

し、ただ是れ信不及なるかゆゑに、種々の妄念やむことなし。今日より志を改め、底をつくして修錬あるべし、必す者僧か言を錯て聞き、或は世智の賢きに奪はれて、萬刼の殃を招くことなかれ。拔隊の曰く、實か虛言か、急に眼をつけて見よと、實に此の如し。直に實悟見性して始めて知るべし、者僧に歸依することなかれ。たとひ日々に百千の黄金を供養するも、又々その親切實頭なること、者僧か二便をなむるほどなるも、實に大疑工夫におもむかされば、眞の歸依にあらず。たとひ又右の親切に十倍する人なるとも、大疑工夫にあらすんば、何を以てか此の一心佛性を悟ることを得ん、光陰をしむべし、時、人を待たず。

一八

師あるときしめして曰く、この大乘直示の法を明らめんに、工夫修行に退屈することなかれ。この故に如來、經中に喩を引て說き玉ふは、大富饒の人あり、この人ある時、年久しく心おきなくなれ交りたる男にいふやうは、我今汝に大金を與ふべし、汝が外の業をなさす、心やすく一生をわたるほどの大金なり、今汝が家のうちにおけり、汝尋ねもとめて用ゆべし。彼の金子を得たる男は、わか家の中を尋ぬるに、右の金子見えす、種々心を廻らし尋ぬるほどに、戸棚つり棚は云ふに及ばす、鍋釜桶樽のうちまで尋ぬれとも、更に見えず。この男おもへらく、彼の人は年來われとむつましく、殊に他にすぐれて懇なり、決定していつはりはあるまじ。されとも見えざるは不思議なり。これは我が尋ねやうのあさくおろかなる故ならんとて、いよ〳〵心をくだき、二階梁のうへ樽のすみまでを尋ねたり。されとも右の金子更に見えす。又々おもふやう、慥に有ることはあらんとて、板をはね、壁を倒し、柱をわり屋根をくづして尋ねたり。されとも右の金子更に見えす。又々思ふやうは、かくまで尋ぬるに見えす、これは定めて彼の人われに戲れて、我をすかすならんと暫らく分別して、又思ふやうは、彼の人はもと眞實にして、偽ある人にあらす、決定して金子を尋ね出すべしとて、大はだをぬき、鋤鍬なとを以て家の下の土を掘る、地を掘ること五六尺なれとも、右の金子更に見えす、されともあることは必定ならんと心得て、地を掘るほどに、大汗を流し地の底へ四五丈はかりも深く掘りたれば、果して右の金子へ掘り當てたりと。心地修行も亦復た此の如し。今日も明日も明々日も退屈なく、悟らずんは、いよ〳〵精力をはけまし、心を改めて何處までも、ふかく工夫をなす時は、百人は百人ともに悟らざることあるべからす、ただ自己の寶を得さることは、尋ねやうのあさくおろかなる故なり。然れとも又古人の示にも、佛法て目をつくなと云ふことあり。素とより人々

具足の佛法なれば、たのしき事とゝなり、能くく修錬あるべし。

箇一小冊、澤水老師所與求法緇白之幻藥也。毎聞筆記其精要百分一。將欲便未聞未了。宜撰遼豕。通章唯貴採實無遺漏而已。伏冀覽人勿惡言重語拙害本志。

時元文五載庚申二月中浣。近侍僧惠俊撰。

昔日梓に鏤といへとも、尚又童蒙の一助となさんと、和田氏需に應し、ひらかなに寫し、拾遺少增補して重刊す。かな字の誤は、愚なる所にして、たゞ意旨の差ざるを本とせり。

時寶暦十三癸未秋季。老杜多活明年七十敬書。

假名法語 終

正宗國師法語

解題

正宗國師白隱和尚の略傳は、法語集の與某居士法語の解題において述べたれは、此にはもらしつ。なほつばらに知らむと欲せは、荻野獨園禪師の物されたる近世禪林寶僧傳または眞言の道契上人の續高僧傳などを見るべし。

けだし正宗國師は、ふかく婆說紛々たる兒をあはれみ、横說縱說、もとも親切徹困なり。此に收めたるもの、如き即ち是れなり。

はじめの邊鄙以知吾は人の君たり民の牧たる者の箴となすべきことを述へられたるもの、邊鄙以知吾と名づくるは謙のみ。こは鍋島侯に答らへれたる消息なりといふ。さしも草は、某諸侯の請によりて、書いつけて贈られたるもの、滔々數千言、もはら爲政の要さては菩提心、養生法などを說けり。安心ほこりたゝき、大道ちよほくれ、施行歌、おたふく女郎粉引歌、見性成佛丸方書、御代の腹皷のごとき、皆言近くしてその旨遠し。

邊鄙以知吾

白隱禪師

先回は、久しぶりにて不慮の面謁、歡踊淺からず、增々道中御恙なく御在府の由、珍重ての御事に候。老夫無難に罷在候。先つ申し述ぶべきは、先頃は思しめしよらせられ、大切の寶蒸一器、手づからみづから之を賜ふ。香合もまた尋常の產にあらず、感荷のあまり、取あへず香盆を莊ひ、瓶爐に燕向す。異香ほのかに草廬に蒸徹して、栴檀の林に入るかごとく、香積の世界に遊かと怪しむ。或は且く閣下に對して談笑する心地し侍り。此において寶裏し珍藏して、閑暇の時を得て、一點を挾ひて物外の淸閑をなむ、怡悅誰にか說向せん。是の故に此度の便りに彼の寶香に少しも劣らぬ一品高覽に備へ度、彼方此方見まはし、立ちさはき侍れど、御覽の通りの野外の草廬、茄子さゝげの外、夕顏のひねくりまがりたると、冬瓜のぶらと下がりたるとのみ。あまりせんかたなさに、種々工夫の中、先頃の御仰せに、近き頃はめつらしき假名物や書ける、然るべき法語や出來たるとの御尋を去風存し出し、究竟の事こそこさんなれと、叶はぬ例の田舍文章にて、賤の緒環くりかへし、片腹

いたく思さんも恐れあれど、仁政の一助にもなれかしの寸志ばかりに、「べびいちご」と云へる假名物三篇書綴り、進覽いたし侍り。蓋し蛇覆盆子は、花も實も有りながら、春蘭秋菊の蕊もなく、黄祇砂參の藥能もなし、桂姜の温にあらず、芩連の瀉にあらず、神農氏の聖顧にもれたれども、近頃伊若水が本草には載せたり、列聖叢中尤も鄙賤の小草なる物をとゝ、此法語に名けたる事は、蛇覆盆子にも劣らぬ鄙賤のことの葉草なるそと、臣下の心なるあり。若し又或は邊鄙以知吾ならば、少しきは御政務の一助ならんか。然るに法語は古來參禪見性の指南。かゝる物はふほくは勸善懲惡の旨趣。勸善に急緩あり、見性に精麁あり。

一國一城の主たらむ人は、第一に王位を守護し、萬民をやすんせむかために保重す。邦家を保重せんとならば、先づ須らく生民を愛顧すべし。民肥へ國ゆたかなる、是れを强國といふ。强國の主として王位を守護せんとならば、先づ須らく身躰健康に壽算延長なる事を計るべし。若し夫れ多病短壽ならば、何の暇有りてか帝都を守護し、邦家を治め、生民を愛顧する事を得んや。身躰健康長壽を得んとならば、飲食を節にし、人欲の私を制して、養生の至要を求むべし。養生の至要は、良醫を近け、內觀と信力と並べ備へて、武軍を養ひ玉ふべし。殊更一方の大將たらむず人は、强敵をしたかへ、帝都を守護し、萬民を安んする大役なれは、常に信心堅固にして、武運を養ふを以て第一とし玉ふべし。去る程に源家の御先祖八幡殿の如きは、常に普門品怠らせ玉はず、常々の御仰せに、武運を養はんず武士は、物の命は猥にとらぬ者なるそと、人は申すに及ばず、虫蟻の類までも、むざとは殺し玉はざりける故にや、飽くまで武運も强く、御威德も勝れさせ玉ひけるにや、南都北嶺の貴僧高僧も加持しあやみたりける、天子の御惱を、弓のすびきして弦音にて掻き拭ひたる如く治し奉り、二をせ征夷大將軍の勅宣を蒙り、一寸八分の大士の金像を御髻の中に結ひこめおかせ玉ひ、唯一人奥州に發向せさせ玉ひ、目にあまりたる大敵を易すゝと追ひなびけ、貞任を打取り、宗任を生捕り、奴僕の如く召仕ひ、至尊の宸襟を休め奉り、美名を千載の後までに傳へ玉ふも、信心堅固の威德なるべし。坂上の田村丸、大悲の弓に智惠の箭の威力に依て、手前もおろさずして易すゝと鈴鹿山の惡鬼を亡ぼす。其外右大將頼朝、主馬の判官盛久、惡七兵衛景清、楠兵衛正成、多田の滿仲卿の如きは、信力厚くおはして、老來六角堂において念誦せさせ玉ひけるに、汗と涙を御面を打ち透しける由、末代の未練不覺のうつけ武士の曲に、如何にやさもしげに觀音抔の力をかる事のあるべき、手前相應に生れつきたる力なれは、他力のたすけに預る事はなきそとよなど、いかめしげ

にわめき廻れと、すはの大事の鉾所になりては、人先に進げ寵れて、先祖の武名をけがし腐すは、尋常こざかしく口利いて、俠立する大不覺者の常の業なり、奥の手なり。其將は安に居て亂を恐るゝと申す事の侍れは、片時も武術を怠らせ玉はで、貴體勇健に目出度國家を憐みすくひ、仁澤を千載の後までに殘しつたへ玉へかしと祈るはかりに侍るからに、先頃見參の刻、密に勸めまゐらせんと存じ付き侍りにたれと、草卒の仕合本意に任せず、此度の幸便に延命十句觀音經と申すを誂へ、進覽致候。此經は、大唐日本の間において奇妙の靈驗是れある經にて、文句も短く侍れは、閣下は申すに及はず、近侍衆中迄も毎日二三百返程宛讀誦せられよかしの寸志斗りに候。仔細は物の試しに侍れは、重病かまたは不慮の災難に逢はれ候人々に御あたへ、慰に御覽是れあるべく候。眞實にさへよみ侍れは、驚入りたる靈驗は必定決定是れあり。第一の調法は、此經を讀誦する人は、至極無病にて長壽をたもち候、誰々にも相談致度物に侍り。扨て此經を保つ者は、場所を擇ばず、時節を嫌はす、馬上にても枕上にても、行住坐臥の間において、間斷なく唯讀み得るを貴しとする由。何程御用しけき奉公人衆にても、自由に勤めらるゝ事に侍ると、別して御家中の老人達に逐一御あたへ被成候と、御家中上下の祈禱に罷成り、閣下廣大の德行に罷成る事に侍り。衆善奉行、諸惡莫作は、諸佛の通戒にて、善事ならは、假初の事にても人は告けず勸めずとも取かゝり、すておかず相勤め、惡事ならば、芥子斗りの事にてもふつと思ひ切り、二度行せさる、是れ一切の戒行を保つも同斷の事に侍り。昔し漢土に高皇と申す者、常々信心なる者なりけるか、如何なるしおちやは有る、既に誅戮にきはまりたりける前の夜、親切に觀世大士を念し申しけるに、夜半ばかりに大士の尊容目のあたり出現せさせ玉ひ、夜中に觀音經千卷讀み得たらましかは、命はたすけ得さすべきぞと御告ありしに高皇申さく、もはや夜半にて侍る者を、如何にや千卷までは讀み得侍るへきそ。然らば此經をよみてよとて口づから授けさせ玉ふ。翌日誅せらるゝに當りて、太刀鍔元より折る、外の太刀を取かへけるに、三腰までをれてければ、撿使驚き立寄り、仔細やは有るとたつぬしかゝの樣をかたりにたれは、扨てはとて赦るさる。それより此經を高皇觀音經となつく。しかりしより以來、信仰し讀誦する人、僧俗男女をゑらはす、或は難病を治し、或は災難を遁れ、剩へよむ人必ず長壽を得。閣下もまた行住坐臥の上において、毎日二三百返程宛讀ませ玉ひね、仔細は武家も出家も無病息災にて壽命長からでは、諸道成就する事かたし。殊更一方の大將たらんず人は、天下の大事有らむ時に、六韜を旨とし三軍をしたか

べし。西戎東夷を嫌はず、南蠻北狄を擇ばず、踏込みかけ入り、逆徒を碎き朝敵を挫く事大斧を撚つて枯木を裂くが如く、威雄を八蠻の外までに震ひ、聲價は四海の中を動して、帝都を守護し、萬民を安んずる大任なれは、晝夜に怠らせ玉はで、武術を精錬し、内觀と信力を兼勤めさせ玉ふ内にも、此經を讀ませ玉はゞ、自然と佛神の加被力に依て、武運も強く、御壽命もなかく、氣宇寛大にして、國家を治めさせ玉ふ事、順水に舟を棹すか如けん。古より家をみだし國を失ひ、身を亡すべき愚將は、武運を養ひ、仁澤を施し、萬民を憐みすくひ、國家を治る等の大事は存しもよらず、身上にも似合はす懸奢に誇り、美麗を好み、百石の所領にして千石の羽振をなし、千石の所領にして萬石の威勢を張り、武士にも似合はぬ綾羅絹布を目ざましく着かざり、男女室に有るは人の大倫なりとて、一人にてすむべき妻女を五人も召しかゝへ、娟にほこり寵を恃んで、内證は嫉忌妬害に一日も靜なる事なし。益なき錢財を費し盡し、領内の百姓を非道にむさぼり掠め苦しめ、酒色におぼれ、筋なき遊藝亂舞に貴き精心正意をとりみだし、身體は日々に衰へ瘁け、果は種々難治の重病さしおこりて、身命もまた保ち難きに到る。皆是れ定めてそなへたる明德を、淺猿しき人欲の私に蓋ひ奪はれ、主心つねに定まる事なきの致す處なり。後の世の報ひまでお

もひやられてあはれこそ覺ゆれ。千日養はれて一朝の急を救ふは、武士の習ひなる物を、常に美ふくにともなひ、美酒をのんでえしれぬ遊藝に耽り、軍馬の調錬は夢にもしらず、武藝は拙く弓箭は手馴れず。若し夫れ國家の大事有りて、火炮を飛はし戈戟を列ねて、兵刃已に交る時に當りて、日頃習ひおかさる御經は、齋佛事有りとて俄には讀まれぬ如く、何の備へ有りてか一支もさゝゆる事を得んや。重代高恩の主君は敵陣に取かこまれ、乳哺深恩の父母は雜兵の手にかゝつて責め屠らるれとも、かへり見る事さへ叶はで、ひた震へにふるへて、肌脊なる馬にはひのりて、あてどもなく遁げ走りて、笑を千載の後までに殘す事は何そや。是れ唯だ尋常武備を怠り文術を好ます、仁恕の道の貴きは露かへり見る事なく、武運を養ふ事の大事は夢にも知らず、油斷不覺の致す處にして、主心片時も定る事無き者のなれの果てなり。國を守り家ををさむる事、縱令彭祖か八百の歳華を保つも、暫時の夢中の戲なる者を、福貴を特み權勢にほこりて、財帛を見る事は泥沙の如く、生民を見る事は土塊の如く、追從諂戀の佞臣を近け愛し、忠諫潔白の賢臣を忌み遠け、飽き足れもなき賦税を貪り掠め、罪もなき物命を苦め害し、果しもなき罪障を積み重ねて、死後には果して三塗八難の惡處に墮す、寔に恐るべし。古來明德至善の君子、仁澤を天下に施さ

んと企て玉ふとき、最初に專ら仁吏を擇び用ひ、酷吏を恐れ遠け玉ふ事は何うや。酷吏の國祚を害し、國脉を斷つ事、鴆羽一片、河水に投じて、魚鼈皆斃れ、水銀一滴、木根に入つて、松柏俄に枯るゝが如し。酷吏は、代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兎の栖家とす、憎んでも惡んずべきは酷吏なり。酷吏は、代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神とし、依る方なきの野鬼とす、恐れても惶るべきは酷吏なり。是の故に明君聖主は、酷吏を忌み棄て玉ふ事、屍穢の如く、酷吏を憎み遠け玉ふ事、糞汚の如くす。暴君暗主は、專ら酷吏を貴び用ゆ。所以に云ふ、聖主出て酷吏ひそみ、暗君立て酷吏眉をひらくと。吏は作麼胡爲の者とかするや。彙に曰く、吏は民を治る官なりと。異に曰く、吏は民を惱す官なりと。蓋し吏に仁吏あり酷吏あり。仁吏は常に民の利害を考へ、土の濃瘠を察し、稼穡の艱難を憐み歎き、凶年饑歲には、賦稅をはぶき使役を寬めて、民をして飢凍にくるしまざらしむ、國祚を堅剛にし、君をして苛政のそしりを千載の後までにひかざらしむるを以て已か急務とす。是の故に生民之になつく事、爺孃の如しと謂つべし。民を治る官なりと敬しても敬しつべきは仁吏なり、仁吏は寔に用ひつべし。酷吏は大に是れに反す。蓋し酷とは刻剝の義なり。民を貪り苦しむる事刻ひが如く、財產をかすめ取る事剝くが如し。酷

吏は歲の凶豐を管せず、民の凍餒をかへりみず、徒に自ら奪ひ貪るを以て已か忠節とす。昔人是れを聚歛の臣とす。其奪ひ盜む事の智、君子に過きたり。是の故に云ふ、聚歛の臣あらんよりは、寧ろ盜臣あれといへり。賄賂あるの訟は、水に石を投するか如く、賄賂なきの訟は、石に水を投するか如し。譬へは張三と李四とともに爭ひ訟る事あらむに、其初め理非を分たず勝敗を辨せず、混然として日を重ぬ。張是れを愁ひて竊に寄する事有ると きは、李か空處を探りて少しく是れを呵す。李大に驚き恐れて、ひそかによする事あるときは、又張か空處を捉へて少しく是れを呵す。張李互に驚き恐れて、代る〳〵相寄すと云へとも、金鑑辨せず、玉石分たず、或は五年或は十年寄せ〳〵して、遂に財盡き力究りて一向寄する事能はざる者を捉へて、終に是れを貧處に推す。是の故に民の酷吏を恐れ憎む事、惡虎の聚落にあるか如く、疫鬼の國中に流行するに齊し。往々に世の邦君國主、夢にも是れを知り玉はず、自らふもへらく、國豐に民やすしと、いつしか君を桀紂の類にし、民を桀紂の民にすと謂つべし。吏は民を惱する官なりと憎んでも惡んずべきは酷吏なり、昔し秦、幡奢を恣にし、威權を恃んで咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を搆へて大に誇る。是の故に財用足らず、俄に酷吏を放つて天下の財利を奪ふ。倉稟みてあふる、生民いかり

うらむ。久しからずして天下大に亂る。咸陽やぶれ、阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主、各々酷吏を愛しもちひて、民をして塗炭の中にくるしましむ。果して四海の富を失ひ、萬乘の貴階を下る。元祿の初め、中國の內何某の侯の家に酷吏あり、大に民を貪りかすむ、生民悲しみ哭す。村民の長たる者あり、爭ひいさめて利害を說く。酷吏大に嗔り憎んで、竊に侯に訟へ讒して、彼の村民の長を誅す。長誅せらるゝに及んで、天を仰きて長歎して曰く、我若し罪の誅せらるべき有りて、我を誅せば則ちやんぬ。若し又罪無くして我を誅せば、爾君侯かならず三年の活を得ん。國脈必ず三年にして斷絕せん。爾か輩これを見よと云ひ畢つて死す。この時天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、其侯未だ百日を經ざるに、乍ち心痛の重病を發せんとは。百藥寸功なく、針灸しるしなくして、衆醫手をつかねて終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣子四歲なりけるを傅奏處へ奏し願ふて、家督を繼かしめんと家中の古老相添ひ、はるかに武陵に趣く。着府いまだ日あらずして、是れ又俄に早世す。悲むべし、十萬石餘の大家、乍ち根をたち葉をからす、數千人の家中、老幼尊卑東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となんぬ。寔なる哉、天將に雨ふらむとする時は、山色必ず近く。國將に亡びんとする時は、民間先づくるしむと、是れ彼の嚮きに

謂はゆる酷吏の國家をみたり、國脈を斷する現證なり。後來寶永丁亥の春、予行脚して錫を城下に留む、一日持鉢の序、道友三五輩と共に彼の侯師檀の寺に入りて、後先君の宗廟を見る。香華久しく道たえて、鬼哭し神悲むに似たり。各額を撫めて嗟悼して云はく、嗟已哉、唯是れ一箇酷吏の苛虐より起りて、終に此蕪荒を見る。一國の君、一城の主たらひ人のおそるべきは酷吏なり。是れ即ち向きに謂はゆる酷吏は、代々先君の宗廟をして荊棘の野となし、狐兎の栖家となし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神となし、依る方なきの野鬼となすの現證なり。譬へは此に賊臣有りて、秘計をめぐらし奇謀を設けて其國を亂し其家を破り其君を害し、其群臣をして東西に分離せしめ、つひに其國脈を斷たんと計らは、闔國人嗔り憎んで、皷を鳴らして是れを責めて、油にて煮、牛もて刳くと云へとも、飽き足る事無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是れより甚しき事を。然るを是れを愛し、是れを用ひは、國ろれ久しからざらむか。寔に危きかな。時に一僧あり、勃如として頭を掉つて云はく、否なり、酷は奢の影なり。奢は聲の如く、酷は響の如し。予か云はく、何といふ事そや。原ぬるに夫れ暗君國を得るときは必す奢る。奢るときは、多くは妃嬪を列ね、媛嬙を聚む。あつむるときは財用足らず。たらざるときは、百端を究めて是れ

を求む。財の物たる木についても求むべからず、水に就いても得べからず。こゝにおいて酷吏の尤けき者を擇んで。是れを民間に放つて、民の財利を掠め奪ふ。奪ふ事烈しく、得る事の多きを愛して、以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是れに賜ふに爵を以てし是れに授くるに官を以てす。此において吏族大に眉をひらきて、飛廉が肩を瞋らし、惡來か臂を張り、王莽か眸を凝し、董卓か頭を掉つて、賦稅に事よせ、官祖になぞらへ、民の穀帛を掠め奪ふ事、枯骨を絞りて汁を聚むるか如し。此に於いて國衰へ民疲る。冬暖かなれども、兒は凍へたると號び、年登れども、妻は飢へたりとなく。而して後に衆民盡く恨み背く。そむくときは、其國必す天禍あらざれば人刑あり、國夫れ久しからざらむか。所以に云ふ、鳥の將さに死なんとする時、其鳴く事悲し、國の將さに亡びんとする時、其貪る事烈しと。寔に恐るべし。吏もまた宜しく自ら計りて恐れ慎むべし。君侯の威權を借りて猥に民を惱害し、猥に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業かは。忽れてもあるべき事かは。嗟夫れ你の後を如何。豈に獨り佗の國祚を害し、他の國脉を斷ちて、而して後に徒らに休する者ならんや。自家もまたかならず爾の繼嗣を斷たんか。豈にそれ爾の繼嗣をたつのみならむや、人の臣として君の國家を亂る、不忠是れより甚しきはなし、人の臣として君の國祚を害す、罪過是れより大なるはなし。死後には必す惡處に墮して、俱底恒沙の苦患を受け、火血刀の辛酸を嘗めん。つらく〳〵おもふに、侯吏品殊に、尊鄙事異なりと云へとも、誰か其祖宗なからん。若し其果して祖宗あらは、各泉下に在りて爾か官吏にうつるを見は、必す大に啼泣してみん。焦穀芽なく、酷吏後なし。我輩久しからすして必す祭奠なきの閻神となり、依る方なきの野鬼とならむ。嗟願はくは仁吏なれや、酷吏となる事なかれと。おもふに仁酷並ひ立つといへとも、否泰はるかに霄壤なり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必す盛大なり、酷吏の部類は向後多くは郎當して道路に餓死す。四十年前、何某處役所に酷吏ありき。人民大に憎み恐る。久しからすして人刑有りて俄に其職をはがれ、改易されて牢落す。父は和樂をうたふて街市に袖乞ひし、子は戰書を讀んで人の門閭に立つと語り了つて慘然たり。或人の云はく、酷に兩般あり、曰はゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり、私は多く公は少し。公は恐るゝ處なし、公然として是れを奪ふ。私は恐るゝ處多し、必す密に村民の長を語らひ、志を同し計を定めて、官命なりと稱して恣に貪り掠め、日々に奪ひ月々に掠めて、終に其利を二つにして吏と長と是れを分つて、公は預らず。是の故に長家は日々

に繁興し、康藝か高厦を搆へ、石崇か堂奥に坐す。絃歌遠く傳へて轂車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻孥もまた養ふ事能はず、家々に苦しみ哭し、戸々に衰へ悴けて窮餓相煎す。野に菜色おほく怨恨内に逼りて、死亡もまた願みざるにいたる。こゝにおいて或は二萬或は三萬、蟻の如くにあつまり蜂の如くに起つて、恨み叫んで先つ彼の長家を圍んで、門闥を破却し、家財を粉碎す。若し彼の長を捉へは、かならず裂きて食はんとす。其勢ひ折くべからず。果では城中に込み入り狼藉せんとす。此において領内の寺院を傭ふて、だましすかして是れを治む。靜謐の後ひそかに狗をまはして、其張本を探り捉へて、或は二十或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野にあまねし。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と長なる事を。たとへば此に細民有りて、五箇三箇伴を結んで、遠く他國へ行かんに、他國の民若し其侯を指して、或は罵り或は謗る事あるときは、細民大に嗔り叫んで、打果す事もまたかへり見す。諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に倣ふて、年の凶豐を考へ、民の否泰を察して、上下利を同し、尊卑苦樂を共にせば、國君に對して豈に此凶態あらんや。窮鼠却つて猫を咬むと云はんか。然らは則ち張本は民に非ず、吏と長とに非すして何そや。古に云はく、財散るときは民聚り、財聚るときは民散すと。民散すとは、家民恨み背きて老いたるを負ひ、幼きを携へ、啼泣して境を越え、他國へ走るを云はず誹らず、境をも越えず、他國へも行かざれども、一民心疎み離る。是れを民散すと云ふ。民聚るとは、衆民悅び慕ふて他國を離れ、簞食壺漿して我國に來り聚るを云ふにあらず。民心悅ひ懷く、是れを民聚ると云ふ。國君仁德有りて、萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠け、毫釐も民を貪り掠めざるときは、衆民悅ひ懷き、市に謠ひ野に拍つて云はく我侯願はくは疾病なからんか、我侯願はくは萬歲なれや。此君の爲めにならは、白刃をも蹈まんずべし、黑火にも投じつべし。我侯願はくは萬歲なれやと。民心斯くの如く貴ひ懷く、是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪欲にして、專ら酷吏を貴び、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみにあらす、左右の近臣までも逼迫せしむ。此に於いて家民恐れ憎む事虎の如く、恨み背き、嗔り罵り、市に哭じ野に悲んで嗟く。願はくは仁人あれや、願はくは競ひ來りて文武の紂を討つか如く、劉項の秦を破るか如く、吾境に入り、吾國を領し、我國を治め、我國を靜め、逐一酷吏の輩を誅し、吾輩を救ひ、我輩を蘇せよ、我輩をして旦暮を安からしめよ。嗟願はくは仁人あれやと。天に訟へ神に祈る、斯くまて人心離れ背く、是れを民散すと云ふ。つら〳〵おもふに、世に羨しからぬ者

は、村民の長家なるめり。五十年來、予か西東二十里か内、村民の長たる家、大凡數百家の人々の末を見るに、多くは郎當落魄す。其中少しも衰減なく相續じもて行く者、纔に八九家、是れは定めて勤役中少しも貪り掠むる事なき善き人々の後なるべし。其餘は多くは根を斷ち葉をからす、纔に殘り止まる者も、必す白盲青瞽の類多し。尤も傷み悲むべきは、長家の先考宗祖なるめり。其初め微なりし時、苦寒を侵し、煩暑を凌きて、許多の艱辛を喫し盡して、歲月を重ねて、漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是れを撰ひ勤めて、終に村民の長とす。此において遠近來り賀し、親眷悅ひ走る。是より驕心きざし起り、俄に所々室家を修補し、門閭を營建し、新しき和穢踏みかふて、衣類につけ、調度につけ次第に榮耀に誇り、美麗を好んで、家財大に費ゆ。是れより竊に邪計を廻らし、奇籌を設けて、烈しく細民を貪り掠む。細民憎み恨むといへとも。各堪へ忍んて涙を含んて相隨ふ。外面は伏し隨ふといへとも、胸中の哀歎悲傷、何れの處にか皈せんや。是の故に民間に謎あり云はく、桶屋の正直なに、村民の長殿とはどうじや、村々を削り取るはさて。深山の熟柿なに、長殿の御家とはどうじや、人知らす果は皆つぶるゝはさて。是れ皆家民骨髓に徹して、憤り恨みて云ひ出す暫時の戲言なれとも、村民の長たるへの先祖と、子孫の人々

の爲めには、上も無き追善祈禱なるべし。何か故ぞ、長若し此謎を聞きて恐れ慎むときは子孫必す相續せん。若し又乍ち仁心を差起して、尋常細民を憐み救ふ心あらば、子孫大に繁榮ならん。多くは彼の謎々に少しも違はて、天理に責められ、人刑にかゝつて、悲むべし、相續し來る底の家財は、盡く沒却して、四壁は伐ちれて、竈下の薪となり、境内は鋤かれて佗の田畠となり、先祖は是れより依る方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち斷絶す。寔に羨しからぬ者は、村民の長家なり。昔し漢土に羊祜と云ひし人、襄陽と云ふ處の刺吏なりけるか、天性仁恕心厚くおはして、常に酒色を遠け、費を制し、其餘を散して以て窮民を安撫せられけれは、國家富み榮えたりけり。萬民其德を感して、羊祜遠逝の後、峴山に石碑を立ておきけるに、其邊を往來する國民、ふし拜みて感涙を落しける故、今の世に到るまで墮涙の碑と稱し、したひ悲むとぞ申傳へ侍り。三國の時、西蜀の關羽將軍と申すは荆州と云ふ處の刺吏なりけるか、純朴を常とし、驕奢を禁じ、儉約を守り、浮費を制し、天性王佐の才をそなへ、賦稅を輕くし、聚歛を遠け、生民を撫育し、毫釐も民を貪り苦しめ玉ふ事なかりけれは、荆州の民懷く事父母の如く、敬する事神の如し。將軍遠逝の後、民其德をしたひ、大社を營み、關將軍の廟と稱して、祭奠怠る事なし。一日も民の父母た

らんずは、羨むべきの芳躅なり。去る程に仁君明王と稱せられさせ玉ふ人々は、仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申すに及ばず、遠境邊土の細民に到るまで、晝夜慈悲愛顧の賢慮を廻らせ玉ひ、最初に驕奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢るときは費多し、多きときは苛政を好む。苛政は常に民を貪りかすむ。掠むるときは人民嗔り恨む。恨むるときは其國必ず亡ぶ。養生書に云はく、氣は民の如し、民衰ふるときは國必ず亡ぶ。氣盡るときは人必ず死すと。宜べなる哉、氣は一身の本元にして、民は國家の根軸なる事也。譬へは此三千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂つて、常に千秋の翠光を籠め、遠く千里の風聲を傳へて、龍吟じ蛟瞋るか如くなるも、日々に其本根を堀り、時々に其根盤を發かは、老松それ久しく青き事を得んや。須らく知るべし、日々に民を惠むは、其本根に培ふ者なり、日々に民を貪るは、日々に國家の根盤をあばく者なり。大凡公卿より下庶人に到るまでに、工あり、商あり、巫醫、樂師、百工の族までに、千萬種の人類あれども農民の膏油を舐りて立たざる者は、半箇もまたなし。民微りせは、我輩盡く焚れ、道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なる事を。是の故に豐聰王子の如きは、百姓の百の御寶とよばせ玉ひけるこそ有難けれ。然るを是れを貪り、これを苦しめ、これをな

やまし、是れを害せは、千神憎み嗔り、百靈恨みにくみて、天此に下すに災害を以てし、此か壽算を奪ふて、武運も盡き果て、國脉必ず斷絶せん。子細に見來れは、盡く是れ酷吏の貪殘より起つて、倫臣の邪計より生る。悲むべし、列國の諸侯の諸方の君子、夢にも是れを知り玉はず、常に自ら謂へらく、國泰民安、寔に延喜天曆の御代にも劣らすと。嗟危きかな。

然るに大樹神君の如きは、あくまで仁德厚くわたらせ玉ひ、民を憐み天下を愁ひさせ玉ふ事は、大凡漢士にて聖人君子と稱せられ玉ひにたりし人々よりは、遥に勝れさせ玉ふとてそ覺ゆれ。常々の御仰せに、善政を天下に施さんとならば、忠諫廉直の賢臣を近つけ用ひ、追從輕薄の佞臣を遠さけ棄て、朝暮に萬民の凍餒を長ず恐れ、稼穡の艱難を憐み愁ひ、武術を怠らざるを第一とすべし。脉を取つて死生を知るか如し。驕奢の國王は必ず貪り、貪欲の國家は必ず亂る。武家に武道のたゆるは、即ち一身の死脉と知るべし。民を貪り苦しめ、ひたすらに身の榮耀をのみ好むは、唐の太宗は、民はわれと同體なる者を、是れを貪り是れを苦しむるは我股をさきて、我腹をこやすか如しとたとへられたり。縱ひ腹は肥えたりとも、股の肉盡きなは、我身立つべきやは。安きに居て危きを忘れず、治に居て亂を恐るは

名將の習ひなれば、晝夜に怠らす、武術をはげみ好んで、油斷なきを家業とすべし。毫釐を爭ひ、賦稅をしほり取り、民のしゝむらをそぎ落して、金銀に仕かへて、公義の藏へをさむるを忠節なりとす。不忠是れより甚しきはなし。忠節とは、善き者を勸め上げて、主人に用ひさするを肝要とし、慈悲を萬の本として民を憐み、諸人安堵して、其國治る樣にするを、第一の忠孝とはするぞと仰せられたり。近頃、不慮に神君の御遺訓を披覽し奉り、且つ驚き、且つ喜ぶ。誰か計らむ、大樹神君、斯くまで仁德厚くおはして、聖知斯くまで優に渡らせ玉はんとは。仁政の美、治世の式、三台四海を照し、五緯中央を鎭して、天下を泰山の安きにおく、寔に漢高四百年の洪基にも越えたり。開闢より以來、比類こそおはせね。如何樣是れは尋常にてはよもおはさじ、法身意生の佛菩薩の、末代の衆生を憐ませ玉ひ、かりにしばらく宰官の身を現じ玉ふにやある。大凡漢家にも本朝にも類もなき寶訓、六經にも勝り、論孟にも過きたる金言なりとこそ覺ゆれ。縱に百紙に足らぬかな物なれども、當時日本の武士の爲めには、如何なる海藏龍宮の金文にも勝れ、諸史百家數萬卷の書籍にも越えたり。詮なき史記や左傳を讀み覺えて、物知りだて玉はんより、家を治め身を治むるには、此書に過きたる事や有るべき。一國一城の主たらむ人々は、朝夕の看敎誦經

の代りと思ぼしてよみ玉へかし。此書を貴び讀まんず國は、神明とこしなへに鎭護し、佛陀も擁護の陣をたれ玉ひて、其國必ず水旱疾疫の災難なけん。殊更當時泰平の御世には、一日も欠ぐべからざる金文なり。此書を貴びしたかはんず國は、其國必ず繁榮ならむ。兒孫かならず久長ならむ。此書にそむき隨はざらん國は、其國かならず災害あらん。國脉必ず久しからじ。惜むべし、此書の空しく古紙堆中に有る事。譬へは和氏の璧、照乘の美玉の泥土の底に有るか如し。彼の連城の美玉の如きは、千頃萬顆つみかさねたりとも、立處に國を利し民を救ふ事、此書の力に及ぶべき事かは。天下泰平、御世長久の祈禱のためには、此書に過きたる經陀羅尼は、是れ有るべからす。武士にも似合はぬ長經長念佛し玉はんより、此書を貴ひよみ玉はゞ、現當二世の利益を得玉ふべきぞ。如何なる金持たる後世者もあれかし、梓に命じて此書を壽し、普く世間に印施し、取分け武士たらんず人々の讀み玉ふ樣にせまほしき事よ。然らば則ち如何なる堂塔伽藍をおひたゝしく立てひろけたるより、廣大の善根なるべきぞ。沙門釋氏は吾々か先祖の佛の說きおかせ玉ひたる御法なるはとて、朝夕に讀誦する如く、當時の日本武士の爲めには、佛神にも先祖にも神君に越えたる事や有るべき。然らは則ち人々の貴ひ玉ふべきは、第一に此書にあらずや。武士にも

限らず、萬民にもかぎらず、出家沙門乞食法師の類までも、堯年舜日の恩澤に預る事は、大樹神君、慈悲を萬の本とし玉へる萬古不易の善政の威德ならずや。幸なる哉、かな物に書い留めさせおかせ玉ふこそ有難けれ。如何なる不文字大才なる武士も法師もよみえ易く、一向讀み得る事叶はぬ農工商の類は、家々の持佛堂に一卷宛納めおきて、朝夕におし戴きたらんには、上もなき家内安全の新禱なるべきぞ。人あり必すみん、鵲林俄に此書を讀して六經にも越えたりと、何ぞ考へさるの甚しきや。此漠必ず詔ひ求むる處あらんと。若しそれへつらひ求むとならば、奇謀妙算、百端千端、何ぞ必ずしも此書に限らむ。予もまた竊に諸君の考へ玉はさるの甚しきを笑ふ事あり。譬へは良醫の藥を調合するか如し。繩の木通一味なれども、便道なをさしつまりたる十死一生重病難治の人のためには、附子人參黃耆砂參も及ばざる奇功を發する事あらむ。此時人々賞嘆して、木通は附子人參にも勝れたりと云はんを考へさるの甚しきと云はんや。此書の如きは、今の世の人附子參なる事を知らずや。諸君何ぞ考へ玉はざる事の甚しきや。縱令又邪計を設けて、詔ひ求め得るも、命日既に崕嶮に逼る、果して何時をか見んや。予か如きは、寔に緇田の稗稊なれとも、世を利する心なきにしあらす。縱令世を利する心あるも、薄福暗短、此書の力に及ぶべきかは。是の故

〔大阿〕は名劍の名。
〔玉炬〕は夜光の玉。

に其人を見て此書を讀す。此書若し一國に行はれは、則ち一國の大幸ならんのみ。をしむべし世に劍を知る人なけれは、大阿も凡鐵に混する事を。後來必ず此書の世に行はるゝを見て、悅ひ敬する事、玉炬を夜途に拾ふか如く、南針を霧海に得るか如くなる者あらむ。後來此書の世に行はるゝを見て、憎み恐るゝ事、疫鬼に狹路に逢ふか如く、惡虎を幽谷に見るに齊しき者あらん。如何にや、人の君たると人の臣たると、此書を悅び敬せさる者の有るべき。如何にや、人の君たると人の臣たると、此書を憎み恐るゝ者の有るべき。云はく、此書を敬し、此書を悅ふは、禹湯文武の明主、周公召奭の賢臣。此書を恐れ、此書を憎むは、殷紂夏桀の暴君、趙高季斯の賊臣、秦火もまた計るべからず。昔し秦苛政を恣にして、趙李其政柄をとる。貪歛劫奪、大に聖賢典に違す。違するときは、謗を千載の後まで に惹かん事を恐れて、儒を抗にし、書を焚く。唐武暴逆にして、甚だしく因果を嫌ふ。僧の因果を說くを憎むで其衣を民にし、其居を廬にせしに齊し。後來世の佞臣賊士の如きは、此書の世に行はれん事を憎んで、必すみん苟くも吾か大樹神君、明德至善の遺言、豈にかろ〳〵しく世間に流布して、鄙俗の手に觸るゝ者ならむや。唯是れ十重に包裹し了て文庫の底に納め藏して、人をしてみだりに披覽せしむべからすと。若し果して然らは、吾

か十力調御の如來の如きは、種姓は即ち五印度の主、淨飯大王の太子、威德は是れ即ち三界六趣の敎主、梵釋掌を合せ、龍天是れを戴く、尊貴は大凡是れより盛なるは有るべからず。然るに其所說の經卷、民間をゑらぼす、市鄙をすでず、只其流行する事の普ねからざらむ事を恐る。是の故に卷をひらけば、多くは流通分を見る。奴隸僕御の輩といへども、或は手に觸れ、或は讀誦するを以て貴しとす。此書の世を利し民を救ふ事、荒旱の甘雨の如く、野渡の船筏に過きたり。慈悲を萬の本として、菩薩の大行に齊しき神君、豈にその利益の廣きをいとひ玉はん。然るを是れを秘し、是れをかくして、空しく蠹魚の腹の中に葬られば、かならず神君の冥慮に違せんか。當時天下の武士たらむず人、神君の冥慮に違せは、不忠是れより甚だしきは無けん。貴國は御先祖より數代以來、仁惠或は德あつくおはして、仁慈恭謙の君子多く、忠勇廉潔の人傑足がて、各王佐の才を備へて、代る〳〵仁政を輔け佐く。此において國肥へ民純にして、農に餘(あま)んの粟あり、婦にあまんの布有りて、縱に境に入れは、山光水色、俄に觀を改め、遠は近里、祥煙列り浮ふ。謂つべし、東海の君子國なりと。是の故に苛政の謗を終に世間に惹き玉はす。熟ら〳〵おもふに、閣下もまた宿福厚くおはして、かゝる目出度仁義の國の大守と生れさせ玉ふ事、前生多少戒德の致す處な

り。猶々恐れ謹ませ玉ひ、宿昔萬善萬行の廣福をつかひつくして、罪障業苦の惡因に往かへさせ玉はぬ樣の御心掛、肝要に候。誰か計らひ、今生の天子、將軍、大名、高家等の福貴自在の人々は、盡く是れ前生多少の後世者達の、淨土に生れん、佛にならんと、兩生三生、難行し、苦行し、持齋し、持戒し、讀誦し、書寫し、種々精神を苦しめ盡し玉ひにたりしし貴僧高僧及ひ一切の修行者達の再來し玉へるならむとは。縱令三界の秘密を行じ盡したりとも、見性の眼ひらけず、菩薩の大行を行せざらん限りは、成佛はかなひかたき事なり。然れども前生多少萬善の功勳空しからす、尊貴高位福貴自在の身に生れ、隔生即忘とて、宿昔の菩提慈善の志は忘れ果て、福貴を恃み威權にほこりて、生民を苦しめ、賦稅を貪り、際限もなき惡業をつみかさねて、死後には、必す惡處に墮す。此の故に云ふ、擬福は三世のあたなりと。兎にも角にも政務に御錯りなき樣、第一の謹なるべと御覺悟是れあるべく候。縱令何れの國主なりとも、仁澤を施し、生民を憐み惠み玉ふ事は、力及はすとも、華奢を禁じ浮費を制し、堅く節儉を守り玉はゞ、民をひさぼり苦るしめざる程の事は、かたからめやは。昔し高野の御室と京の御室と御連枝にて渡らせつひけるか、或時、京の御室へ入御ならせ玉ひ、來む方行く末の盡きぬ御物語に、さてもかたいなかの住居は、萬

心にまかせぬ事のみ多く、殊に所領もうすく侍るからに、あさゆふに事足らぬ勝ちにて、面白からぬ月日を送り侍りと語りもあへざせ玉はで、御目の中うるみて、打しほれさせ玉ひにたれば、京の御室の御仰せに、さればとよ、世上の人々の有様を見聞き侍るに、乏しき事も、事足らぬ思も、何れもすき好み玉ふ様に見請け侍り。是れは御仰せとも覺えぬ事を承る者かな、誰やの人か人心地有らん者の身の貧しく事足らぬを數寄好む者の侍るべきや。さればとよ、驕奢を恣にし、美麗を好むは、畢竟貧賤をすき好む者なり、三人にてすむべき從者も、五人も召伴れ、五人にてすむべき奥車などのゝめかせ玉はても、調度につけても、徒歩にてすむべき假初の物詣にも、ばゝ、萬戸侯に封せられさせ玉ひにたりとも、事足らせ玉ふ御覽えはおはすまじきぞ。おのれなどは、迚もすて果てたる出家遁世の身なれは、一尺をは五寸にしめ、一文をは五尺に省略しもて行き侍れは、事足らぬなと存じもよらず。近頃は、乞食非人を憐み、老病を惠み救ふ程の事は、苦にもならす侍りと仰せられけれは、高野の御室は、感じ入らせ玉ひ、漢和の才の優に渡らせ玉ふをさへ、浦山敷あをぎ申したるに、世間の事までも斯く賢く渡らせ玉ふ御事よと、感涙せきあへさせ玉はざりけるとぞ。寔に千載の美談ならずや。去ぬ

る寛保己巳の夏にやは有る、むくつけなき老女北八葉、予が室を叩いて、告けて云はく、我々は是れより十里ばかり北なる桂山と云へる人里もつゝかぬ山里の賤の妻どもに侍り、不思議の仔細ありて、是れまでは尋ね詣でたるにて侍り、慈悲と思ぼして、鹿猿にも劣らぬ我らが耳に入らんす御法を、一言となりとも教化せさせ、永き闇路を照らさせ玉ひてよ。且つ又是れなる老女か娘にて候者、去年の冬より重病に罹りて臥ししずみ侍りにたるか、次第によわりつかれて、事切れ侍りにたるに、胸の邊の少しく暖に侍るからに、野邊の送りも墓々敷せさりけるに、斯くて十日ヨリも過ぎにたるに、一夜ふと蘇息し起き來て、打泣き〳〵物語しけるは、扨ても過し頃、我は怪しき人々に引立てられて、谷際の如くなるほの暗くおそろしき處を十里ばかり行くよと覺えて、堪へかたく苦しかりしに、地獄とかや云へる恐しき世界を彼方此方へまはりたるに、四面眞暗にして、月日の光はなくて、無間燒熱の焔のもつともえ上る中に、わゝと聞ゆるは、罪人共のせめなやまされて泣き叫ふ聲なり。尊貴も高位も、乞食非人も、一處に追ひ籠められて、目も當てられぬ苦患をうくる中には、日頃見知りたる人々も多かり。出家沙門なども打交り、責めさいなまるゝも有りけり。又見かすむはかり廣き野原に、がきやみとか云へる者なりとて、人の形にはあれと

も、黒くもえぐいの如くなるものゝ疲せからびたるが、幾等ともなく屈み居て、ひとゝ泣き悲む有り。斯る處をはる〳〵と行き過きけるに、十丈も疊み上げたる鐵の城門にたどり着きぬ。見上ぐれば二丈ばかりも有るべき大なる額を打ちたり、是は閻羅大城と云へる文字ながと敎へ玉ひき。けたくましき獄卒の種々の罪人を引立て〳〵、出て入るは引きも切らず。彼の城門の中をおづ〳〵さしのぞきたるに、方量もなく廣き大庭に、數もかぎりもなき罪人共の、〳〵れ石の上にひし〳〵と蹲り居て、泣き悲むは目も當てられずなん有りけり。彼の者どもの口々になん云へるは、裝束にて斯く恐ろしき處ありと露しらざりし悔しさよ。法談などに說き敎ゆるをば、えしれぬ尼法師原か物もらはんとて、筋なき事のみ云ひ散らすぞと、慢り輕じめたりし匆卒なさよ。何れの日何れの月にか、斯る處を遁れ出づる事のあるべき。淺猿の今の有樣やと泣き悲む聲は、肝に答へて恐ろしかりき。其外叫喚、大叫喚、燒熱、大燒熱、黑繩、衆合とかや聞えし處々の地獄の有樣は、心も言葉も及ぶべき事かは。また古き木森の蔭のほの暗く物すごき處に、古き牢獄の朽ち腐り、破れ傾きたる中に、侍がましき者七八輩疲せ衰へたるか、袴肩絹も破れ果てたるを引きかけ、苦しげに屈み居て、人影を見付ては物乞ふ風情にて、をがらの如くなる手さし出して、ぶる〳〵

とふるへわなゝく有り。是れは八十年以前の伊豆の去る役所の人々なるよし。其邊を見廻せば、木蔭に立ち並びたる牢獄は、古きも有り、新きも有り、數も限りも無き中に、貴くをさ〳〵しき人の見馴れぬ裝束にて玉へるか、苦しげに首うちかたげて、坐しねむり玉ふも有り、また虎語はべわかれで、おそろしきかほくせしてかゞまり居たる有り、唐土日本において、國王にもせよ、大臣にもせよ、情も無く、非道に民を貪り苦しめ玉へる人々なるよし。其外處々の獄處の有樣を思出ては、身の毛だちておそろしく侍りと、むせかへり〳〵物語しけるを聞侍りては、夜とてやすく寢られ侍らね。助かるべき道しあらば、敎化せさせ玉へや。彼の娘にて侍る者も、飛立つばかり詣でたき心には侍れど、長病の身、中々一足も叶ひ侍らず、我々はかり右の物語を聞きもあへず、恐ろしさに思ひ立ちて、さまよひ來りたるにて侍りとて、名號なを乞ひ求めければ、書いてあたへ侍りき。今時往々に斯る物語を聞きては、虛說なりとし、妄談なりとして、手を拍して大笑して云はく、人は二氣の良能にして、死すれは燈なをの消えうするか如くなる物を、何の天堂かあり、何の地獄かあらむと。是はこれ斷見外道の所見にして、恐るべきの惡見なり。昏愚是れより甚たしきばなし。小智は菩提のさまたげとは、是れ等の輩を云へり。若し夫れ果して地獄なく天

堂なくんば、普天の下王土にあらずと云ふ事なし。何の佛塔神區をか留めん。率土の濱、王臣あらずと云ふ事なし。何の沙門僧尼をか容るさん。然るに天竺に祇園精舎あり、竹林精舎あり、逝多林那陀蘭寺あり、漢土に於て五山あり、十刹あり、吾日域は云ふに及ばず、多少の法窟靈場あり。若し夫れ天堂なく地獄なくんば、果して是れ何の用ぞ。佛像經卷何の閑家具ぞ。且つ又古來萬乘の尊貴、袞龍の珍御を脱し玉ひて、圓顱方袍の形をやつさせ玉ふも、其限り有るべからず。遠くは妙莊嚴王淨藏淨眼悉多太子、近くは華山の聖天子、其餘の歴代の至尊十善の帝位すべらせ玉ひては、剃髪染衣の御姿にならせ玉ひ、法王と稱せられさせ玉ふ事は何ぞや。雲鬢霧鬟の人々には、眞如大德、千代野、中條姫、祇王、祇女、佛御前、惠春比丘尼。文臣武夫には、萬里小路中納言藤房卿、最明寺入道時賴、刈萱入道重氏、佐藤兵衛憲清、熊谷庄司次郎直實、遠藤武者盛遠、岡部六彌太忠澄、其餘の英雄豪傑の人々及び古今の智者、高僧をさへに辭しかたき餘祿を辭し、棄てかたき恩愛をふり棄てゝ、あらぬさまなる艱辛を經させ玉ふ事は何ぞや。將た狂すと云はんか、將た顚すと云はんか。將た又未た天堂地獄なき事を知り玉はずとせんか。佛法中には因果を信じ、來生ある事を知り、苦報を恐るゝを以て大智惠とす。夫れ人を萬物の靈と稱して、馬牛犬

豕、豺狼麋鹿に異なるは、所以來生有る事を知り、苦報を恐るゝを以てなり。你等が所見に任せは、一切の人をして馬牛犬豕、豺狼二麋鹿に齊しくして、而して後にあき足る者ならんか。縱令閣下世を治め國を守り玉ふ事、百年にもせよ、五十年にもせよ、隨分恐れ愼ませ玉ひ、華奢を禁じ、浮費を制して、餘計あらは、民をあはれみ惠み玉ふ事、第一の德行なるそと覺悟是れあるべし。古來の聖經賢典を披覽するに、盡くみな王道を以て第一と說きおかせ玉ふ。王道を論せさるは、聖經賢典にあらず。王道は何を以てか主意とし玉ふぞとならは、第一に仁澤を施し、萬民を憐み救ひ、國家を治むるより外佗事なし。今の世に當りて、仁澤を施し萬民を憐み救ひ玉はんとならば、嬌奢を禁じて、費を制し、近頃申し惡き事なから、椒房の人を減少し、萬事を省畧し玉ふより外、別の手段あるべからず。椒房の人々も、當分は物さびしく有る甲斐もなく、心細き事に思ぼすべけれとも、君のため、國家のため、萬民のため、且つは後の世の爲めにぞならは、智惠有らん人々は、なと得心し玉はざる事の有るべき。椒房は人數多き程、悋嫉妬害に片時も心の穩かなる事なく、罪深き事のみにて、後の世のためあしき事こそ多けれ。主君もまた心あるべき事なり。かれもまた人の子なる者を、榮耀に誇り、自由をはたらき、班女が閨の恨を懷かせ、藤つぼの

夜半の涙をそゝかせ、果は地獄の衆生とす。少しも仁心有らん人の有るべき事かは。貞女兩夫に見えずとは、あまり片おちなるしおきならずや。願はくは賢夫兩婦を養はずともせまく欲しき事よ。昔し大相國入道清盛に祇王祇女姉妹二人つかへし内は、事靜にむつましかりき。佛の前獨りさしくはゝりたれば、朝夕に口をしき事のみ多くて、あるにもあられず、城中を忍び出て、二人とも尼になりけるとぞ。兎角椒房は、人すくなに靜なる程、好き事はこれ有るべからず。智惠あらん人々は、こなたより請ひ願ひ玉ひてなりとも、人をへらし、事すくなにしづかに暮し玉ひて、暇あらば後の世の事など、穩密に營み玉ひたらんは、如何ばかり目出度かるべき。往々に三百五百の金銀を指出し、上國より舞子白人とかや云へるたはれ女を買取よび下し、三三年も玩びては、又は取かへ引かへ、扇子か煙管など取かゆる樣に、心易く覺え玉ふ諸侯も是れ有るよし。去る程に、一家中、一年諸色の入目三分一は、椒房の入用につひゆる御家も是れ有る由。去りながら、天晴大福德備はらせ玉ひ金銀に持ち溢れさせ玉ひてならば、兎も角もなれども、さはなくて多くは千石の所領にして、二千兩の借義を貪ひ、萬石の所領にして、二萬兩の借義を負ひ重ねて、こゝはの大事有らん時に、箭面に立塞がり、粉骨碎身、主君の一命にも代るべき普代相傳の家臣は、目も

見やらず、困究させしめ、苦しましめ、まさかの時に當りて、合羽箱二つかつぐ事さへ叶はぬ人々に、金銀を費し、畢竟悲むべく憐むべきは、領内の萬民ならずや。一身の榮耀を極むとて、多少の人々を痛め苦しめ玉ふは、如何なる心ぞや。後の世は如何かならせ玉ふべきぞ、寔に恐るべし。扨て又列國の諸侯、參覲交代の行列を見奉るに、先きそなへ、あとそなへ、長柄何筋、鎗何筋、武具、馬具、旗竿、幕串夥しき人數にて通行せさせ玉ふ。去る程に、かりそめの川づかへにも、家から依りて、千兩二千兩の費は間々これ有る由。是れは定めて天正文祿時代の天下未だ靜ならざる時節、こゝはの大事の用心の格式なるべし。大樹神君、世を治め玉ひて、諸侯の往來にさゝ筒一筋射かけたる者とそなけれ。仁者に敵なしと申せば、隨分仁澤を施し、生民を憐み、國家を治め玉ひ、眞箇用心のためならば、普代相傳の善き人々を、前後に十騎召しつれ玉はゝ、輕薄追從のかきあつめたる雜人原千萬人召しつれ玉ひたるより、利方は遙に强かるべし。去りながら、大福力ふはして、生民をいため苦しめ玉はずは、何萬騎召つれさせ玉ふも、御心まかせなれども、何國の沙汰を聞きても、物の哀れは萬民にとゞまればなり。若し又佗日參禪見性の望み是れあるにおいては、第一に死の字を參究し玉ふべし。死の字は如何參究すべきぞとならば、死し了り燒

き了る時、主人公何れの處にか去るとい動中を嫌はず、靜中をとらず、行住坐臥の上にお
いて間もなく疑はせ玉はば、一夜二夜乃至五日三日の中には、必定決定大歡喜を得玉ふべ
し。要法も多く、指南も多かる中に、死の字は何とやら底氣味あしく忌はしき事に思ほす
べけれども、死字乍ち透過是れあるにおいては、いつしか生死の境を打越え、立處に金剛
堅固、不老不死の大神仙とならせ玉ふ秘訣の指南にて侍れば、箇程目出度法要は是れあるべ
からず。死の字は、第二武士の決定すべき主要なり、死の字を參究せざらむ武士は、身心
ともに怯弱にして、主心終に定まる事あたはず、こゝはの大事の場所になりては、思ひの
外に、臆病未錬にして、主人の專途に立つ事能はず。是の故に云ふ、驚怖みだりに起るは、
主心定まらざる故なりと。縱ひ平生武術を精錬して、太刀は九郎、鎗は眞田ほどつかひ得
たりとも、主心定まらざる人は、まさかの時に望みて、おくれふるへて、一向用に立つ事
能はず。然らば則ち萬能にすぐれたるは、主心なるべし。若しそれ主心を定めんとならば、
專一に死の字を決定し玉ふべし。死字緩に決定するときは、主心定まり立つ事、盤石な
ほをゆり居ゐたるが如しと。謂つべし。厚重山の如く、寛大海の如しと。死の字緩に決定
したらん人は、見性得悟の二大事は、掌上を見るが如けん。唯返べすがゝも主心をゆり居

ゐ、朴實に身を治めざせ玉ひ、惟今迄の百萬石の若殿樣をば、玉簾金屏の中、錦帳繡幕の
奥、雲井のあなたに休ませまし置き、大切なるべくは、高かみにおかす、危き處を嫌ふ如
く、自身は今日より引き下け、仁政孝慈の使はれ者になりて、山海遙かに隔りたる與官奴
にも大身主君の貞面をせす、朝夕の膳部も、一菜に過きす、夏冬の衣類も、多くは綿布に
して、人目を忍びては、庭の掃地や、てうづの水、或る時は、奥に乘じたる貞にて、たの
ふだ人の御馬のすそ、見馴れぬ下郎の業までも、仕習ひ手馴れ、內證は、大樹神君の聖慮
を主意とし、仁澤を生民に施させ玉はゞ、天是れに賜ふに長壽を以てし、地是れにさゝぐ
るに多福を以てして、彼の仁者は壽しと云べる本文に少しも違はず、浦嶋か長壽を保たせ玉
ひ、萬世の後までも、明德至善の名大將なりしにとあをかれさせ玉へかしとの寸志斗り。君
子も千言すれは一失あり、小人も千言すれは一德ありと申す古き言も侍れは、小人の千言
若しや半德なりとも書き當てたらましかは、御政務の寸助にもなる事もやと書き續けたる
にて、利用を世波の底につるにしあらす。豈に聲名を塵苑の哇にさしはさむ者ならんや。
一年、國清練若において見參しまゐらせしより、折ふし愚老か噂仰せ出され候由、遙に承

〔國清練若〕國清は寺の號練若は又蘭若といふ、此には空寂處といふ。

り及び感じ入り、高慮に契おべき事とは存せすなから、心の及ぶだけ書き載せたるにて侍り。左もおはさすは、七旬に及ひ老いさらほひて、本の露、末のしづくにも劣りて、朝夕を計らされは、世間の望みは一向におもひ絶えたる者を、何の追從輕薄にか、終夜老眼を摩挲し、孤燈を挑けて、斯くまでは書綴り侍るべきや。あしかれと祈らぬ小山田のいたつらならぬ僧都なりけり、いなや。且つ又禹は善言を聞きては拜すと申す事の侍り、そのかみ大禹と申し奉るは、生知安行の大聖人にておはしけれとも、樵漁奴隷の輩の語といへとも、善言を聞かせ玉ひては、拜し玉ひ、唯きく事のおそきを愁ひさせ玉ひける由。閣下も又林下野人の語といへとも、政務を助る處あらは、彼の義經か秘藏の虎の卷物に少しも劣らぬ、田舍三畧の兵書なるそと思ぼして、繰り返し高覽可給候。若し又一向筋なき事に侍らは、草卒彼の寵下に尋常相勤め罷在り候丙丁童子に可被仰付候。穴賢。

惟時。寶暦第四甲戌歳

（丙丁童子云々）丙丁童子は火なり。此にては即ち火中に投ずるをいふ。

邊鄙以知語終

さし藻草 巻一

白隱禪師

何國何某侯の殿下近侍の諸賢の需めに應じて書せし草稿

増々御機嫌よろしく御在府被レ爲レ遊候條、珍重此御事に候。老夫無難に罷在候。先可二申上一は、先回は能社被レ爲二思召出一、見苦敷草廬御尋ね被レ爲レ遊被レ下、久振にて高慮を得奉り、老來の怡悅不レ過レ之令レ存候。尋常の人君にて渡らせ玉はゞ、左計り悅入存する事も有レ之間敷候へとも、殿下の義は、天性仁恕の御志厚く渡らせ玉ひ、御領内の萬民をも、殊の外御憐愍被レ爲レ遊、御家中の諸賢をも、常々御愛賞被レ爲レ遊候事、當時無雙之評判承り及ひ如何計り悅入り、終に默止する事能はす、尋常纔に憶持し、記持する所の古の仁君賢士の遺言性行、既に十數紙を書す。筆を留めて熟々顧ふに、君子に對し、片言隻字を進むるに、必ず急綏有り、先後有り、一國の主として萬民の父母たらんず君には、最初第一に仁政を專らにし、賦税を輕くし、課役を寛め、窮民を助救ひ、國家を安撫し、第一酷吏の輩を忌み棄て玉ふ事を、勤め奉るを以て至要とす。然るに此に一人の仁君おはして、如何計り仁

政を施し、萬民を利濟被ゝ成度大望おはすと雖も、若し夫れ多病短壽ならば、中々叶ひ難き事に侍り。去る程に、第一には仁政、第二には養生を御勤め可ゝ申事に侍り。去りながら暗君庸主の類ひ有つて、內觀と養生と共に並はせ雙べ貯へて、彭祖が八百の壽算をたもち、浦嶋が五百の歲時をかさね玉ひたり共、徒に仁恕の御德行もなく、日々に驕奢を窮め、多く婢嬪の妖色を貯へ、歛臣酷吏の盜臣を愛し貴び用ひ、聚歛酷剝、萬民を貪り掠め、國家をせめ苦め、左ながら虎狼の山岳に靠り威獰を長じ、長壽を保ちて、生命を殘害するに異なる事なく、果しも無き大惡業を作り重ねて、死後ゑは必らず無間燒熱の難所に墮じて、無量劫數の苦患を受く。然らば即ち長壽を保つて限りも無き罪障を積み重おるより、如かず、一日も早く根の國底の國へ歸つて、少しなりとも罪障の輕からんが益し成るべし。是故に仁恕兼ね備はらせ玉ふ國君は、仁政を第一とせさせ玉ふ習ひに侍り。然るに此度殿下へ進覽致し候法語には、養生を先きにし、仁政を第二に書綴り申し候。仔細は先回久振にて高慮を得、御樣體を窺ひ申し奉り候所、先年よりは格別御顏色の樣子、輕弱に御見え被ゝ成候、是れは定めて日頃御持病の痔疾の御痛み故と推察致し候へ共、昔の五人力の御元氣は透と相見え不ゝ申、第一は水分御不足と見請け候。寔に一髮千均、至極御大切之時節にて

〔根の國底の國〕幽界の事なり。歸るとは死するをいふ。

候、隨分萬事御慎み、御養生第一なるゞと御覺悟可ゝ被ゝ爲ゝ成候。尋常並々の國主にておはさば、其分の御事に侍れど、殿下は格別御仁德厚く渉らせ玉ひ、常に萬民を赤子の如く憐愍せさせ玉ふ由、日頃承り侍れば、陰ながら至極御大切に存じ暮し侍る者を、萬一の義にても是れ有り候ては、御家中は申すに及ばず、御領內萬民の悲歎は如何すべきゞと被ゝ爲ゝ思召ゝ候哉、過去の萬善萬行の功德に依りて、縱ひ今世には梵漢和三國を所領せさせ玉ひたり共、御壽命無いゝ之候ては、一箇の細民にも劣らせ玉ふ者には有ゝ之間數候哉。偶々うけ難き人身をうくとてそ申し侍り、六趣輪廻の巷には、人身ほど大切なる事は無ゝ之覺え侍り、寔に天上の善果にも、遙に勝りたる事共多き中にも、一國一城の大守とも生れ付かせ玉ふ事、千生にも萬劫にも逢ひ難き御身を持たせ玉ひながら、御覺悟惡敷、御養生の御心掛も無ゝ之、日頃勤め勵み玉ひたりし仁慈の御德行を、思召す儘に積み得させ玉ふ事も果させ玉はで、故の三塗の舊里へ闇々と立ち歸らせ玉はんは、如何計り殘念至極の事とは思召されず候哉。近頃何某の候、御遠逝のよし、是れも至極大切の仁君にて渡らせ玉ひけれ共、七旬に餘らせ玉ふ御老身にておはしける由、是非なき御事に侍り。殿下の如きは、未だ半百にも及ばせ玉はで、只今盛の御身をもたせ玉ひながら、御不養生ゆゑ病身にならせ玉ふゞやなど、

世間の評判も苦々敷事に侍れば、萬事を慎み、萬緣を抛下し、御養生一片に御成可レ被レ成候。寔に薄氷をふむより危き御事に、乍レ陰氣遣敷存じ暮し候。別けて御不足の御病症には、第一の禁物の若き女中衆抔、御近所に被二指置一候事、堅く御禁制可レ被レ成候。左も無二御座一候ては、遂と御全快は計りがたき者に被レ存候。良藥は口に苦く、忠言は耳に逆ふと申す古言も侍るからに、少しは御心に障り申す事も侍るべけれ共、至極親切に存し候故の事と被二思召一、御免可レ被レ下候。此等の趣きも直談に申し演べ度、秋冬の間には、出府仕り度存じ暮し候得共、種々無レ據故障多く、本意に任かせず、殘慮至極に存レ存候。來春は是非々々出府致し、御目に可レ懸候得共、夫れ迄を待ち兼ね、老眼を摩搓して、終宵燈下に書き認め分二進覽一候。老夫親切の程をも御考へ被レ成、隨分御慎み御養生、本の如くに御達者に御成り被レ成可レ被レ下候。千萬所レ希に御座候。唐書に曰く、唐の太宗皇帝功天下を蓋ふと雖も、身危きに幾し、玄齡如晦に賴つて策を決す。二賢詳に民衰へ國危きの大本を說く。此において即位の初め、勅じて宮女三千人盡く放逐し玉ふと。寔に千歲の美談ならずや。又或る說に曰く、唐の大宗興國元年、帝即位久からずして、不慮に難治の重症を發す。衆醫眉をしばめ、力を盡すと云へ共、百藥寸功なし。時に周南の傍に神醫有り、何れの所の人と云

ふ事を知らず。氏姓もまた無し。齡算三百七十歲、能く人の病性を察し、死生を見る。帝遥に使を發して、召して診候を親はしむ。老翁二見して容を改め、頭を擡めて曰く、大難く、諸君の種々藥劑を盛り揃へて、陛下に擎げ玉ふは、譬へば此に蘭陵の美酒有らんに、一口の破瓶を居ゑ置き、盛湛へて納め貯へんとするが如し。久しからずして必ず涓滴もまた無けん。今此破瓶天下に滿つ、公卿大夫及び士庶人をさへに、共に合せ並べ貯へて、資產總に盡き、室家あれ傾けども、すべて顧みず。破瓶は常に人の齡算を縮め、人の榮衛をうばひ、人の身財を損ひ破る、破瓶は國家を治るの才なく、破瓶は萬民を助け救ふの德なく、破瓶は逆賊を防ぐの備にあらず、破瓶大に人に害有り、破瓶は毫釐も人に益なしと云つて、暫く眉を皺めて坐す。帝深く其意を感じ玉ひ、即日群臣に命じて、宮女三千同時に放逐し玉ふと。希有なる哉、玉體日あらずして快復ましく、次第に健康にして、仁政萬民を救ひ、德功四海を蓋ひ玉ひけるとぞ。實に貴ぶべし。蓋し斯く云へばとて、陰陽兩儀の世の中なれば、夫婦の配偶は、缺ぐべき事にしあらず、去りながら神代の昔より二柱の御神と申し傳へ、父母は天地の如しとも語り傳へ、男女室に在るは人の大倫なりと云へる金文も有るからに、一男一女にして事足ちんのみ。天に二つの天なく、地に二つの地なき故

に、然るをいつの頃よりの習はせにや、二地三地四地五地十地百地數千地に到れ共、飽足る事無きものの如し、斯くては中々長壽長命は保ち難かるべし。豈に是れ君子の志ならんや。豈に是れ仁人の樂みとする所ならんや。椒房の人にも亦宜敷心得是れ有るべき事なり。天下國家の爲め、萬民豐饒富樂の爲め、主君の御壽命長久の爲めにそならば、椒房は常に人少く物さびしきに越えたる事は是れ有るべからず、近習の召し使ひも、兩三人にして事足るべき事なり。縱ひ兩三人と云へ共、心得有るべき事なり。年の頃五十以上隨分長低くて色黑く、鼻ひしげ、ほう先き高く、見苦るしきお多福と云へる美人を擇び擇んで、二三人に過ぐべからず。此外は八九才の兒女子なり共、一人も椒房の邊へ寄せ近づくべからず。是れ即ち椒房不斷無事安樂、御主君御壽命長久大秘密の定法なり。譬へば此に層臺飛殿有りて、石崇が富貴に誇り、始皇が驕奢を窮めて、歌臺の暖響春光融々たり、舞殿の冷袖風雨凄々として、李娘は紫錦の裳、角婢は紅羅の襖、華貫紅顏袂を連ね、峨眉翠黛裳をかゝげ、蕭笛琴皷響を揃へ、美酒鼎肴器を並べて、縱ひ歡樂極まるも、盡く是れ民間の油ならずや。其樂ゝ光音化樂の諸天にも越え、梵輔梵衆の歡樂にも勝りつべく見ゆれど、胸中は刀兵災の時の衆生より嫉妬妬害の心多く、憎愛嫌擇の恨みを結んで、藤坪の胸の焰を燒き

〔光音、化樂、梵輔、梵衆〕共に二十八天中に屬する天なり。

上げ、祇王が袂の涙を滴でゝ、限りも無き無量の罪障を積み重ね、果ては燒熱無間の惡處に墮して、無量劫數の苦患を受く。打見たる所は綾羅錦繡を重ね纏ひて止むことなき雲の上人におはせど、罪深き所は民間寵下の奴婢臭婆の類には遙に劣れりと云はんか。世間の人君國主もまた宜しく心得おはすべき事なり。自已の暫時の榮耀をきはめ、自身の淫樂を極めんが爲めに、罪なき人の子を集め抱へて、黎民の膏油に飽しめ、暖に着せ、恣に臥さしめ、吝惜嫉忌妬害種々の大惡業を積み重ねしめ、果ては叫喚燒熱紅蓮大紅蓮の大難所に墮在し、永く呑磨の大苦患を受けしむ。其初め是れ何人の所爲ぞや、其罪誰が身のうへにか集まらんや。恐れても恐るべきは六趣輪廻の受苦、悲しんでも悲しむべきは三塗八難の厄惱。誰か計らん今の世の高貴高位王侯貴人福貴自在の人々の前身は、盡く是れ過ぎし世の勇猛精進信心堅固の後世先達の再生し來り玉ふなることを。前の世に在りては淨土にむまれん、成佛をとげんと持齋し、持戒し、長坐し、不臥し、難行し、苦行し、秩父なるは、坂東なるは、西國三十三所なるはなど、種々精神を盡くし玉ふと云へ共、隻手の聲を聞き得、音聲を止め得、見性の眼を開き得玉はざらん限りは、成佛は存じも寄らず、淨土の片端も亦見付け玉ふ事能はじ。然れども前生にて積み置き玉ひたりける、萬善萬行の功德は

〔叫喚、燒熱、紅蓮、大紅蓮〕皆地獄の名なり。

〔四弘誓〕 弘は廣なり、誓は制なり。菩薩廣く誓願を發して其心を要制し志求滿足するをいふ。一に衆生無邊誓願度、二に煩惱無邊誓願斷、三に法門無盡誓願知、四に佛道無上誓願成、委しくは止觀大意などを見るべし。

少しも滅せず、高位高冠福貴自在の身と生れ、福貴を恃み、威權に誇りて、萬民を貪り苦しめ。美女を貯へ、憍奢を窮めて、有らぬ樣なる罪障を積みかさねて、死後には必ず三塗の難所に墮す。是故に云ふ、癡福は三世の寃なりと。癡福とは何ぞや、譬へは茲に信心の後世者有らんに、見性得悟の願心なく、四弘誓菩提心を發せず、唯單々に自利の善行のみ有りて、佛を求め祖を求めて、多拜多禮して、萬善行を修す、是れを癡福と名く。三世の寃也。向に謂ゆる六趣輪廻の内には、人身程得がたく大切成る事は是れ無く覺え侍り、寔に天上界の善果にも遙に勝れりと社覺え侍りとは、如何なる子細ぞや、返す〳〵も心得難き事にこそ有るめれ。如何となれば、大凡古今の智者高僧及び世間の限りも無き後世者達まで、生天の福報をとて皆盡く戀ひ求め玉ふ。去る程に一子出家すれば、九族天に生すと說き置かせ玉ふにあらずや。人界若し其れ遙に天上に勝れる事多くば、何の天上の善果を求るに足らんや。大に怪しむべしとならば、大凡一切の入類正了緣とて、三因佛性の妙義を具足する故なり。一に凡有心者是正因種、二には隨聞一句是了因種、三には彈指散華是緣因種、是れを因三佛性と云ふ、大凡の高貴位より、下賤貧窮の細民及び牛羊狐兎狸狢の畜類に至る迄に、正因佛性の大事を具足せずと云ふ事なしと云へ共、善友の提携に隨ひ、

〔妙覺の十力〕 妙覺は究竟の佛果、十力は十智力をいふ。佛、實相の智を證得し一切に了達すと雖も、約して十を擧げたるなり。

眞正の智識に見ゆて、一句半偈の敎戒を受け、乍ち大勇猛の精心を憤起し、一旦豁然として見性了悟の正眼を開く。是れを了因佛性と云ふ。彈指散華是緣因種とは、佛像祖像及び諸佛の寶塔等の前に、香華を擎け、佛道の正緣を結ぶ。是れを緣因佛性と云ふ。三因佛性の中、正因佛性は、六趣の衆生同しく共に具足し、十方法界、有情非情、草木國土まで、皆盡圓融周徧充滿せりと云へ共、了緣の二因は人間界を除いてより、地獄餓鬼畜生修羅及び天上界に至るまで、五趣の衆生は、其趣類に隨て思ひ〳〵の障碍有りて具足する事を得ず、如何となれば、地獄は種々の苦患にさへられ、餓鬼は饑渴にさへられ、畜生は愚癡にさへられ、修羅は刀兵の瞋恚にさへられ、天上は飛行遊戲の歡樂にさへらる。故に了緣の二因を缺く。二因なければ、正因佛性は大事に本く事を得ず。去る程に光音梵補等の諸天も、前生多少萬善の福力つくるときは、果して下界に生下し來て、故の凡愚の衆生とむまれ、或は直下に衆合等活等の惡處に墮す。是故に云ふ、生天の福は箭を仰いで虛空を射るが如し、勢力盡くるときは箭却て落つと。人界は即ち然らず、若し人綫に菩提心を起し、次第に進み進んで退かざるときは、いつしか聲聞緣覺の二階を超過し、圓頓菩薩の階位に登り、果して果滿妙覺の十力を成就す。即ち受け難き人身は、遙に天上の善果に勝れる現證なら

ずや。蓋し斯く云へはとて、我々は遙に餓鬼修羅等の四趣をも超過し、光音梵輔等の天上の善果に勝れる人間界に出生したれば、浮木の龜や優曇華の華、待ち得たる心地なるはとて、飽まで食ひ、暖に着て、看經せず、坐禪せず、善友の提携にも隨はず、智者高僧の法施の席にも臨まず、因果有る事も知らず、來生三塗の苦患有る事をも恐れず、徒に放逸無慚にして一生を送らば、外面は受け難き人身を受けたるに似たりと云へども、內心は悲しむべし、牛羊犬豕の無智昏愚なるに異る事無き事を。只今世間此等の類多しをしむべし。受け難き人身を受けながら、心は全體畜生道に在るを、寔に憐れむべし。六趣の中に在りて取分け人間の貴き事は、來生有る事を知り、地獄有る事を恐れ、菩提を求むるに便り有る故なり。中に就いて貧窮下賤の者共は、苦患の事多き中にすむ故に、教へされ共自然に無常を觀じ、來生を恐れ、菩提を求る者多し。高官尊貴の人々福貴高位の出家の如きは、動もすれば來生有る事を知らず、惡趣を恐れざる人々多し。萬事心に任ずる故に、福貴にめで、威權に誇りて、無常を感せず、地獄を恐れず。菩提を求るに暇なし。火宅の中に在りて推付け生死到來する事をも知り玉はず。三塗六趣などの苦患は、露塵顧み玉ふ事なし。寔に惜むべし。故に拙偈一篇を賦す、題して勸發菩提心の偈と云ふ。

〔五趣〕地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天なり。

〔三惡趣〕地獄、餓鬼、畜生。

〔聾啞〕盲聾瘖瘂の者は、佛の出世に値ふも見る能はず、說法あるも聞く能はず、故に八難の中に數ふ。

〔世智辯聰〕世智辯聰の者は、唯ゝ外道の經書に耽りて、出世の正法を信ぜず、故に之も亦八難の中なり。

〔佛前佛後人〕八難の一なり。蓋し業重く緣薄き者は、佛前佛後に生

勸發菩提心偈附、御垣守

熟觀二世無常迅速一　見二飛華墜葉一有レ感　恰如二常在二火宅內一
況於二其餘五趣中一　剩聽二正法一有二八難一　此時不二恐勤一待レ何
地獄鎭碍二咨磨苦一　餓鬼永劫惱二饑渴一　畜生愚癡無二餘念一
修羅瞋恚鬪諍在　天上耽二歡樂一無レ暇　特指二人間一最爲レ貴
悲其中有二三惡趣一　聾啞及世智辯聰　且又佛前佛後人
今時世智辯甚多　世間若儒家者流　或又神家者流類
纔看二讀三五卷書一　且聽二五七座寶講一　乍起二斷無惡邪見一
不レ知二來生不如意一　沉復地獄道苦患　無智將其何似哉
馬牛犬豕豺狼麋　奴婢僕從屠貼販　尋常對レ人亂說曰
人自二二氣一良能一生　魂歸二溟漠一魄歸レ泉　死了燒了更何在
供佛齋僧何揑怪　茶湯香華寔可笑　生死涅槃兎角枝
煩惱菩提眼裏華　盡是浮屠虛誕說　佛像經卷須二棄擲一
聞レ之在家信男女　盡言久被二僧家欺一　父母塚墳亦不レ拂

れ、佛の出世に遇はずして、見佛聞法するを得ざるなり。
〔斷無の惡邪見〕色受想行識等の五蘊は、今世に滅し已りて更に復た再生せずと計す、是れ斷無の見なり。
〔屠酤販〕梵語に旃陀羅といふ。即ち我國の穢多の類をいふ。
〔五逆〕殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧、
〔虛無寂滅〕虛無は老子の說をいひ、寂滅は佛敎を指す。

盂蘭盆供亦不設
有頭角者必無牙
面前譽者背後謗
錯了自見須任爾
多敎壞善信人故
盡言天堂地獄說
及談五戒十善異
須知浮屠落魄族
依生前罪障深重
一人自冥府歸來
若有事跡試舉見
燕雀睨視鳳鸞類
自冥府歸來甚多
吾不計見閻王廳

古人有言實誠哉
遲筆者必字形正
世智勝者必邪見
導人邪見將何心
死必墮拔舌泥梨
異端虛無寂滅敎
徧搜索五典三墳
爲口糊四方所設
今墮三塗受苦惱
談地獄苦者誰在
寔憐爾輩甚無知
跛鼈望禹門者也
八幡太郎義家卿
王命善惡兩部童

有四足者必無翼
頓書者必筆勢亂
辯才好者必無實
其罪勝五逆重罪
及入無間燒熱底
動說三塗六趣苦
無此無義荒唐說
其現證開闢以來
捨文一送者全無
是盡無地獄現證
若以無智輕忽智
漢土不知本朝內
自冥府歸來語曰
點檢吾一生作業

時階下多罪人在
彼昔獨發向關東
王若此者賜吾輩
卒徒黨一屬來訟
忽然來下告閻王
上令義家行誅罰
俱歸閻浮修萬善
我豈毫釐奉違背
常勤精修萬善行
於此不覺蘇息來
危哉流石義家卿
乍無念可被責惱
以黃金鑄大士像
流石弓箭取身者

〔閻浮〕この娑婆國土をいふ。

競來敷訴閻王曰
殺戮吾黨數萬兵
打寄圍責散鬱憤
時空中有大圓光
彼被誅戮自業果
初非義家私所爲
閻王合掌低頭曰
大士歡喜告義家
憤發勇猛大忠節
語了及落淚數行
若夫非大士加護
御生涯信心厚空
御髻內結籠置給
信心社有間欲飛

伏願義家賜我輩
我輩冥府待彼人
回頭貞任兄弟者
可貴觀世大薩埵
剩欲叛逆奪寶祚
義家幸壽算未盡
大慈薩埵大慈念
善哉你速歸閻浮
守護王位扶萬民
聞人皆悲歎合掌
閻々獨爲貞任囚
關東獨御發向時
尋常假初御物語
隨你等世智指南

佛像經卷棄擲給
昔元祿初頃歟豐
堂頭南山老古佛
夢佛餉靈供膳在
又問地獄實在否
曰庭上積並赤何
晴宵夢御用心哉
驟雨烈洒將來時
可立忍木陰亦無
無地獄即是可也
恐可立忍木陰無
侯且低頭合掌己
死後獨駕白馬來
且又如敏行朝臣

豈其斯大幸增在
阿州侯先君忌日
且對坐熟話之序
幽魂盡來享否哉
師微笑見外面已
用心雨具合羽籠
侯曰用心國不亡
和尙如何差排給
師曰無餓鬼趣止
半頭撚鐵鞭奉待
用心國不亡不言
寔千歲不美談哉
入建長水陸會裡
死後來紀友則許

寔武門好手本哉
詣城下慈光禪林
侯問只今見佛殿
師微笑吹煙管已
時童子擎茶菓來
師聞呵々大笑曰
天若不雨即止矣
上下盡七顚八倒
若有佛餉大善事
君侯如何廻避給
健時君侯宜用心
如梶原平三景時
語地獄苦患乞救
乞供佛齋僧追福

〔三明六通〕宿命明、天眼明、漏盡明を三明といひ、天眼通、天耳通、知他心通、宿命通、身如意通、漏盡通を六通といふ。
〔八部衆〕天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺これなり。
〔八風〕利、衰、毀、稱、譽、譏、苦、樂を八風といふ。是れ世間の愛する所價

語三塗春磨苦患
死後詫其妹娘來
十句經靈驗記中
且又地藏靈驗記
記所逐一擧無暇
一向無地獄沙汰
備生智安行聖德
曾無因果報應變
裟婆往來八千度
徹見三界如掌果
無一法爲人可說
且說半滿諸經論
芥納須彌針鋒海
梵天帝釋四大天

正三因果物語曰
涕泣說地獄苦患
駿西葦嶋於蝶事
其外字治拾遺等
莫言三代前後時
皆是異端之妄說
未具三明六通德
況地獄天堂輪轉
其中辛勤精修功
山河大地唯一人
越發無緣大慈悲
滿字無相平等法
半字差別無量法
天龍夜叉八部衆

遠州濱松邊一女
子向所編集印施
備前座頭緣都靈
及多少假名物中
且又秦漢以前書
伏羲神農堯舜禹
是故全無三世說
忝如吾大覺調御
具足三明圓四智
無能見了無所見
爲利濟一切衆生
十方無大地虛空
地獄天堂佛界魔
盡衆會靈山會上

む所にして能く人心を扇動すること八風の吹が如くし。故に名けて風と云ふなり。苟くも心正法に安住せは八風も吹動すこと能はざるなり。

膽仰尊顏歸命禮
八萬四百妙義內
周公孔子莊老列
然近代世智辨聰
入拔舌泥梨部屬
可憐邪智斷無見
人不恐來生苦
天堂地獄餓鬼畜
受別離苦怨憎會
動生厭離穢土心
幸有佛法僧三寶
外面智行兼備僧
福貴自在高官位
纔嗔上下盡戰栗

可惜三代以前時
若一法有到唐土
總爲有道君子人
如朱晦菴韓退之
三代前後佛前人
誇你纔小智小見
不異馬牛犬豕類
特指人身爲貴何
求不得苦生老死
果發欣求淨土願
唯恨澆末僧寶內
內心劣在家奴僕
日窮憍奢誇榮耀
空送光陰無慚愧

佛法未涉東漢地
伏羲神農堯舜禹
何人不信受奉行
偏執邪智斷無見
又云三惡趣人乎
空打失難受人身
茫々六趣輪廻中
利衰毀譽稱譏苦
有此八風八苦故
誰計衆苦交煎內
無慚無愧贋緇多
依過去宿善行力
拍手老幼皆奔波
不看經兮不坐禪

〔法施利濟〕法を說き施して衆生を救濟するなり。

四事供養〕衣被を食、臥具、醫藥いふ。

見性悟道全無望
不恐死後墮三塗
來世必入八難數
是非生如是不祥
無法可說無可修
求心歇處即是佛
聞之皆謂眞正道
勤學無念皆有念
重歲月全無寸功
其內爲心無遣方
看板第一殊勝貞
全不說世間是非
盡言肉身佛菩薩
似繩絞下黑暗谷

見八善事盡誹謗
況於法施利濟事
九族生天隔雲泥
盡依老婆禪指南
素本地儘立儘佛
尋常無智無學去
並坐列睡學無心
力求無心皆有心
志倦體疲發虛勞
有運世智求名利
收目結口長念珠
行則低聲唱佛名
四事供養如泉湧
死必墮黑繩地獄

聞催法會動障碍
恁麼稱入三寶數
十類各墮泥梨底
婆禪常教其徒言
一生歇得馳求心
諸方愚魯癡瞎禿
掉長竿如掃雲煙
似展隻手遮河流
未到三十多物故
求名利善巧方便
逢人說無念無心
於此在家信男女
胸中臭煙毒霧深
是依最初信邪法

錯了一生寔可憐
可恐施主一粒米
擇眞正抱道善友
信受向上奪命符
蹈碎萬重玄關鎖
永發不退大勇猛
尋常勤行大法施
同共成無上菩提
道勸發菩提心偈
縱雖一回打發去
更無一法可掛懷
盡墮天狗道部類
碧巖虛堂宗鏡錄
老僧二十四歲時

〔傳燈會元廣續燈〕 傳燈錄は宣慈道元禪師の著、會元は五燈會元、廣燈錄は李遵勗の著、續燈錄は佛國

偶打失難受人身
果成萬石熱鐵丸
共走善智識輪下
劈裂無明黑暗坑
而後莫得小爲足
常精修菩薩大行
永離四弘誓願輪
虛空盡弘願無盡
古人不知此意多
不聞眞正指南故
從此發斷無惡見
不知悟後修所致
及一切諸經論中
在越英巖乍打發

永沈惡趣誰所爲
誓避此等惡部屬
鑿破八識荒田畠
擡着惡毒熱鉗鎚
必誓休正證取位
徧集無量大法財
利濟一切苦衆生
是名當家眞種草
不知此意落邪道
虛豁々地空蕩々
有憍慢心無所作
傳燈會元廣續燈
何專不示悟後修
從此慢幢如山聳

見一切人如草芥
不計謂正受老人
卽震勇猛大精心
後來二十七歲時
碎予慢幢如累卵
凡狗婁孫佛以來
於此不覺寒毛卓
讀誦書寫是菩提
神慮定有所指揮
若其無春日神慮
本地地藏願王尊
自愧無力報神恩
徒空望西禮三拜
士大夫豈不死人

惟白禪師の著にして皆紀傳の書なり。
〔碧巖、虛堂、宗鏡錄〕碧巖は碧巖集、虛堂は虛堂愚和尙の語錄、宗鏡錄は永明智覺禪師の著なり。
〔砂石〕無住法師砂石集なり。

自謂凡三百年來
擧惡毒數段因緣
咬破多少惡毒話
在荒井龍谷隱寮
昔年春日大神君
一切智者及高僧
其後久疑菩提心
禮拜恭敬是菩提
後來四十二歲時
我輩盡皆入魔道
初似利解脫一人
神恩遙超過佛祖
無智者多聞此偈
君子豈不求菩提

如予打徹亦復稀
使予乍喪身失命
不覺竊並呑諸方
竊讀砂石大恐怖
告笠置解脫上人
無菩提心墮魔道
世間何事非菩提
況又於智者高僧
決定菩提四弘輪
可貴春日大神君
後來閉幾入邪道
紛骨碎身不足酬
必言不宜士大夫
君子行善有邪正

（武帝問二達磨一）帝問曰。朕即位已來。造寺寫經度僧不可二勝紀一有何功德。祖曰。並無二功德一。帝曰。何以無二功德一。祖曰。此但人天小果有漏因。如二影隨一形。雖有非實。帝曰。如何是真功德。祖曰。淨智妙圓體自空寂。如是功德不二以世求一。會元に見ゆ。

多爲二名聞利養一走
多費二國家一苦二萬民一
稱二堯舜君一不可一誣
祖師直答無功德
祖遙凌二萬里波濤一
若人欲レ成二菩提道一
養生與二見性一二全
鍊丹秘訣無二餘蘊一
親告二石臺先生一曰
聚二元氣一要在レ凝レ心
丹成則主神先全
是故古人曾有レ曰
須レ知山河及大地
可レ貴一粒大還丹

或欺二誑貪欲賢緇一
是邪法全非二菩提一
武帝問二達磨一大師一
雖二此話非一無二子細一
留二梁魏間一凡九年
特無レ越二見性大事一
勤力須レ鍊二大還丹一
只在二勇猛一念心一
凡鍊二神丹一有二至要一
心凝二丹田一則氣聚
主神全則壽算長
可レ貴還丹一滴粒
立地現二出法王身一
直是價直三千界

建二大伽藍一大供養
以二其財一用救二萬民一
建レ寺度レ僧有二功德一
須レ知凝福三生寃
專勤二見性一無二佗事一
茲有二一舉兩得術一
還丹一粒本有性
昔有二仙人吳契初一
須二元氣一聚二丹田間一
氣聚則神丹作成
直是不死大神仙
轉二鐵圍山一爲二眞金一
此時初成二大菩提一
草木國土悉皆成

龍女獻レ佛一顆珠
天上善果不レ如レ之
爲二勇猛精進衆生一
涅槃涉二三祇百劫一
空打二失難レ受人身一
恨今無二眞正指南一
出レ人大凡不レ記レ數
士大夫若成二菩提一
主心不レ定恐悲起
喜怒憂思悲驚恐
主心中心無二兩般一
外面似二文武兼備一
非レ爲二行列飾二外面一
若主心不レ定武臣

王母進レ君千年桃
見性在二直進不一退
成佛唯在二一念子一
勉旃莫錯過二一生一
雖二士大夫及庶人一
出レ人無レ越二向上關一
各了二畢音聲大事一
尋常須二勤定主心一
恐悲人無二必忠節一
名レ之曰二客塵煩惱一
中心直是見二忠字一
內心全是無二忠節一
茲者大事指起時
恰如二老婆挾二刀一

神仙壽量不レ可レ及
昔世尊告二阿難一曰
爲二懈怠懶惰衆生一
可レ惜無二人求二此術一
綫積二三日功一立成
老僧有二隻手小關一
而有二萬重玄關鎖一
太公望三畧卷曰
不レ能レ立二主君專途一
客塵盡則主心立
宜哉主心不レ定人
國君多養二育武臣一
爲レ成二一小口堅一也
或又似二法師貯レ榔

〔國光〕國光は、古への名高き刀工なり。

〔四頓難思〕四は性海圓融緣起無碍相即ち人を說くの四敎を云ひ、頓は地位の漸次に依らず一念不正を明めて佛と爲すの頓敎にして共に絕言難思の敎なり。

〔摩耶〕梵語譯して意と云ふ。

〔大圓鏡光〕即ち大圓鏡智にして四智の一なり。蓋し如來の眞智は、本性淸淨にして諸塵夢を離れ、內外に洞徹し、幽として燭さゞるなく、恰も大圓鏡の萬物を洞照して明了ならざるなきが如し。是を大圓鏡智と名く。

〔平等性智〕これ亦四智の一なり。如來が一切法と諸衆生とを悉く平等なりと觀して、大慈悲心をもつて其根機に隨つて示現開導し、其をして證入せしむ、是を平等性智と名く。

〔上求下化〕上求菩提、下化衆生を畧したるなり。

有レ敵來取二圍主君一　恐戰遁走不レ能レ顧
何時報二主君重恩一　腰間國光將何用
主心專武士所レ貴　定二主心一須レ止二至善一
至善中心中心忠　知レ止而後若有レ定
丹成長生久視人　直是一粒大還丹
直是諸佛大禪定　上下四維全無レ敵
儒門道二明德至善一　神家皆盡指二此處一
或又言二四達四通一　一以貫レ之能新レ民
時有二魔軍竊競起一　此時心王上二寶殿一
煩惱業障報所知　時有二文武征夷將一
六賊動牢二過宮牆一　煩惱業障報所知
時有二魔軍竊競起一　此偈稱二御垣守一何
稱言二破順障善道一　須レ知法盛魔亦盛
部屬八萬四千在　隨二貪瞋癡慢逆徒一
隨二貪瞋癡慢逆徒一　竄二賴耶含識之中一
吹二暗鈍昏愚毒霧一　捲二憎愛妬害臭煙一
捲二憎愛妬害臭煙一　卒二放逸無愧賊兵一
四維上下盡魔界　時有二文武征夷將一
時有二文武征夷將一　心王驚動失二所在一
激二忠膽義腸精兵一　稱道二大智惠到彼一
見二此暴亂一大憤發　列二本有圓成大旗一

鳴二悉有佛性貝鐘一　伏二圓頓難思奇兵一
先陣卽上求菩提　時根本無明大王
走二七識摩耶奏者一　卒二貪欲瞋怒雜兵一
煩惱業苦旗推立　備二叫喚悲泣後陣一
黑繩無間根城在　塵勞無明螺吹立
殺盜邪淫箭先揃　時純圓獨妙王子
石炮棒炮包烙炮　拈二起金剛王寶劍一
勝負兵家不レ可レ期　常侍二心王一護二法城一
乍煥發大圓鏡光　以二此趣一能利二益人一
震二平等性智大勇一　唯願利二濟無緣人一
一刀兩斷沒商量　此偈若有レ行二世上一
此時特四弘誓在　此外更無二菩提心一
稱曰御垣守宜哉　
全無二六賊窺二宮牆一　
上求下化盡圓成　
老來强非レ好二文術一　
世上若好二陰德一人　
竊印施此偈一利レ衆　
利レ人菩薩大善行　
盡利二虛生浪死人一　
願以二此功德一普及二於一切一
我等與二衆生一皆俱成二佛道一

さし藻草　卷一終

さし藻草　卷二

白隱禪師

、何國何某の君侯殿下近侍の諸賢の需めに應じて書せし草稿

劉向が新序に曰く、堯昔天下を始め玉ひし時、伯成子高封せられて諸侯たりき。堯天下を舜に授け、舜禹に授け玉ふに到て、伯成子高諸侯たる事を辭して、竊に民間に隱れて、朝夕に田疇を耕して以て生計(すぎはひ)す。禹微行して行きて是れを窺ひ見玉ふに、耕して野外に在り。禹趨て下位について問ひ玉はく、昔堯天下を治め玉ふ時、吾子(ぢし)立て諸侯たりき。其後堯天下を舜に授け玉ふ時、吾子猶ほ存して諸侯たりき。今寡人位につくに及んで、久しからずして諸侯を辭して、竊に耕作する者は何ぞや。伯成子高が曰く、昔堯の天下を治めさせ玉ふ時、常に國家を愁ひさせ玉ひ、萬民の窮困を憐愍せさせ玉ひ、太子はおはせど賢德の人を擇んで、天下をあげて是れを大舜に傳へさせ玉ふ。是れ寔に至無欲なり。熟々願ふに天、王位を定め、君皇を居ゑ置かせ玉ふ事は、逆徒を隨へ、國家をしづめ、萬民を安撫せしめんが爲めなり。是れ寔に仁智兼備はらせ玉ふ聖君明主の任にして、暗君庸主の及ぶべき所に

しあらざる故なり、誠に至無欲なり。賢を擇んでその位を讓り玉ふは至公なり。至無欲至公の德を以て天下に示し玉ふ。是故に賞せずして民勸め、罰せずして民畏るゝ事もまた然り。今君天下の政務を領じ玉ひて、初より賞罰嚴重なるのみ、全く民間の否泰を察じ玉はず、歲の凶豐を顧み玉はず、稼穡の艱難を知し召さず。越において黎民旦暮に欲有り、且つ內外の私多し。是れ君が懷く所の者は私なり、百性是れを知て貪り、爭の端此より競ひ起つて、民心離れ背き、德日々に是れより衰へ、刑是れより多からん。われ是れを見るに忍びず、是故に野に處して耕す。今君何事ぞ我を見る、君行け、吾事を留る事なかれと云つて耕して顧みず。記の檀弓に曰く、孔夫子泰山の側を過ぎ玉ふ時、夫人有り墓の側に哭す。哀音聞くに堪へず。夫子子路をして是れを問はしめて曰く、子が哭することや、重ねて憂ひ有る者に似たり。曰く然り、昔舅虎に害せられて死す、吾夫もまた同じく虎に死す、吾子もまた同じく死す、其悲泣比すべからず、心も言葉も及ぶべき事かは。夫子曰く、胡爲ぞ去らざる。一件去り難きこと有り。曰く何ぞや、此所苛政なし。夫子曰く、小子是れを記せ、苛政は虎よりもたけきことを。苛政とは何をか云ふや、異國にもせよ本朝にもせよ、暗君庸主は自らの分量を計らず、飢に自ら惱奢をきはむ、此において財用たらざる

則は、多く酷吏の輩を擇び揚げ、是れを民間に放つて賦稅を重くし、課役を重ねて國家をせめ苦しめ、民間を貪り掠む。是れを苛政と云ふ。即ち是れ亡國の大兆なり。虎は纔に一人二人を害す、苛政は國中萬民を苦しむ、果は國家を滅亡するに到る。寔に恐るべし。古に云く、夫れよく萬民の危きを救ふ者は、天下の安きに據る、よく萬民の憂ひを除く者は則ち天下の樂みを享く、能く萬民の禍ひを護る者は、必ず天下の福ひを獲、故に澤萬民に及ぶ則は賢人盡く是れに歸す、雖の不才なるは其卵必ず殿ゆ、其君不才なるは其民必ず窮すと。寔に恐るべし。又云く、天下は一身の如し、臣佐は譬へば肱の如く、萬民は股の如し。强暴酷剝、聚斂不祥の臣佐有りて、萬民を貪り掠め、責め苦しむるは、肱の力を假りて、股の肉を殺ぎ落し食ふが如し。腸胃は能く太く肥に脺るべけれ共、股の肉盡きなば、其人必ず立つ事得じ。立つ事得じとは。民衰へ國亡ぶるを云へり。昔後漢の時、侯瑞と云ひし人、暫く淮平と云ふ所を治めたりしに、天性仁德厚くおはして萬民懷くこと父母の如し。國替の時、百姓共老幼相携へて、車をさへぎり、道路に臥し、號哭して云く、我が君侯何事ぞ我輩をすてゝ、何國へ行かせ玉ふやらんと歎き悲しみける由。寔に貴ぶべし。此等の人々の如きは、梵釋鎭へに其頂を撫で、天神地祇盡く擁護の眸を垂れ玉ひて、王基鞏固、國泰民安、

（梵釋）梵天および帝釋天をいふ

御當家御代長久の祈禱の爲めには、上も無き大忠節なるべし。縱ひ天下の貴僧高僧を集めて、千部萬部の大法祕法を、行じ盡くしたりとも及ぶべき事かは。昔漢土に羊祜と云ひし人、襄陽と云ふ所の刺史なりけるが、天性仁恕の心厚くおはし、常に酒色を遠け、浮費を制して、其餘を散じて以て窮民を安撫せられければ、襄陽次第に富み榮えたりけり。萬民其德を感じて、羊祜遠逝の後、峴山に石碑を立て置きけるに、其邊を往來する國民は、伏し拜み、感涙を落しける故、今の世に到る迄、墮涙の碑と稱して、仁德を慕ひ、祭奠怠る事なしと。一日も民の父母たらんず人々は、羨むべきの芳躅ならずや。昔子產鄭に相たり、其卒するに及んで、國民巷に哭し、商人市町を罷めて、哀んで、涕を流して、三月琴竿の聲をきかず、郊野を傾けて哭し悲しみけるとぞ。是れ又仁德の致す所にあらずや。漢の孝文帝の如きは、狄國より千里の駿馬を獻ず。帝上覽有りて打笑ませ玉ひ、此馬千里の能有りと云へ共、黎民を蘇するの才無しと綸言有りて、即ち路費を與へて返しめ玉ふ。御即位二十三年、宮室園囿車騎服御等に到る迄、華麗は必ず民を助る備に非ずと御仰せ有りて、減少せさせ玉ふ所多く、增益せさせ玉ふ事なし。御寵妃愼夫人御小袖地に曳く事を禁じ玉ひ、又或る時の御仰せに椒房の婦人は國家を護するの備にあらず、盡く是れ民を貪り國家

を苦しむるの本根なりとて、大半捨て退け玉ひけるとぞ。一年群臣衆議して露臺を造立せん事を勸め奉る。上即日匠工を召され、はからしめ玉ふに百金と答ふ。帝曰はく、百金は即ち中民十家の產なり、露臺豈に國家を治め、萬民を助け救ふ功能有らん哉とて、停止せさせ玉ひけるよし。貴ぶべし。漢の孝宣帝四年、渤海の地凶年相續き、民間皆苦しむ。吏更に是れを憐まず、賦稅を責め貪る、生民嗔り恨みて、國中大に亂る。上即ち龔遂を選び擧げて是れを治しむ。龔遂が曰はく、是れを治るの要彼の兆本を捉へて、逐一是れを誅戮せんより外、奇計是れ有るべからず。帝曰はく、汝知らずや、黎民は盡く是れ我が赤子なる事を。然るを人臣の身として、主君の赤子を捉へて、是れを誅戮せんとす。豈に臣佐の道ならんや。不忠是れより大なるは無けん。遂が曰く、是れを爲さん事如何。帝曰はく、大凡國家を治むるの至要は、賦稅を引下げ、課役を寬うし、自身は專ら節儉を守るより外、縱ひ堯舜禹湯の君と云へども、別の祕計是れ有るべからず。帝即ち移書を制して遂に授け玉ふ。遂即ち傳に乘じて渤海の堺に到る。群民盡く兵を發して遂を迎ふ。遂遙に一見して書を移して吏官を引替へ、賦稅を引下げ、課役を寬うすべき等の王勅を傳ふ。群民盡く天を仰で泣哭し、從上の苛政は、皆盡く酷吏の所爲にして、君王の御心に非ることを悟りて、隨ふ事

水の如く、懐く事父母の如し。此において遂心に任せて仁德を施し、永く渤海を治めて、終に二人を戮せずと。寔に貴ぶべし。後漢の武帝、臣董仲舒に命じ玉はく、縣令は民の師仰なり。承流して宣化せしむる所なり。列侯郡主をして、各々吏民の賢なる者を擇んで、歳毎に各々三人を貢せしむべしと。是れ又萬民を憐愍せさせ給ふ宸襟より指し起りたる勅命ならずや。漢の孝宣帝四年、大司農耿壽昌に命じ玉はく、今歳より邊鄙皆倉を作らしむべし。穀賤き時は價を増して糴して以て農を利せよ。穀貴き時は價を減じて糶して以て民を利せよ名けて常平倉と稱すべしと。至れる哉。唐の大宗皇帝曰はく、朕若うして弓矢を好む、良弓十數を得て、自ら謂らく以て加ふる事無しと。即ち良工にしめす。工の申さく、皆是れ良材に非ずと。朕其故を問ふ。工の曰く、本心直らざれば脉理皆邪なり、弓は強しと云へ共發して大に直ならずと。朕初めて悟る、向きに是れを辨ずる事猶ほ未だ精しからざりし事を。朕弓矢を以て四方を定む、是れを知る事猶ほ未だ盡す能はず。況んや天下の務め其能く徧く是れを識らんや。京官五品以上に命じて、中書内省に宿せしめ、數々延きまみねしめ、問ふに民間の疾苦を以てし、及び政事の得失を持論せさせ玉ふ。傳に曰く、國の將に興らんとする時は、君子自ら以て足らずとせさせ玉ひ、其將に亡びんとする時は

餘り有るが如し。大宗弓を知る事未だ精しからざるを見て、天下の理を知る事全くつくす事あたはざる事を知し召して、常に臣に問ひ謀つて自ら用ひ玉はず、此れ其興る所以なりと。魏徵が曰く、古人の曰く、禮と云ひ禮と云ふ、玉帛をしも云はんや、樂と云ひ樂と云ふ、鐘鼓をしも云はんや、樂は誠に人の和と民間の豐なるとに在るらくのみ、聲音の間には在らじ。帝曰はく、近頃群臣を見るに往々に表を擎げて祥瑞を賀す。夫れ家給し民足らば、縱ひ祥瑞は無く共堯舜たるに恐れ無けん。民苦しみ百姓怨みなば、縱ひ祥瑞は數々見ゆ共桀紂たるに違ひなけん。大宗曰はく、朕が爲めには民を憐み養ふ者は、只都督と刺史に在るらくのみ。朕其名を屏風に書して坐臥に是れを觀る。其官に在て善惡の跡皆名の下に註して以て黜陟に備ふ。帝侍臣に謂て曰はく、人盡く言ふ、天子至尊にして懼るゝ所なしと。朕は即ち然らず、上皇天の監臨を畏れ、下群臣の瞻仰を憚る、兢々業々として猶ほ天道に副はず人望に合はざらん事を恐る。魏徵が曰はく、是れ誠に治を致すの要也。陛下願くは終を愼しみ玉ふ事、始めの如くし玉はば則ち善けん。君は人を知るを以て明とす、臣は職に任ずるを以て良とす。君人を知る則ば賢者其學ぶ處を行ふ事を得、臣其職に任ずる則ば不賢者苟くも朝に入る事得ず。上侍臣に謂て曰はく、朕二喜一懼有り、民間比年豐

稔、斗粟三錢なるは一つの喜びなり。北虜久しく服して、邊鄙慮り無きは二つの喜びなり。天下治安なれば驕侈生じ易し、驕侈なれば危亡立處にいたる。是れ一つの懼れなり。上曰く、甲兵武備誠に闕くべからず、然るに煬帝が甲兵豈に其れ足ざらんや、卒に天下を亡せり。若し夫れ公等力を盡くして、百性をして豐安ならしめば、此れ即ち朕が兵なり。帝曰く、萬民國家の爲めに人を擇ばゞ造次にすべからず、一君子を用ゆる則ば君子皆到る、一小人を用ゆる則ば、小人盡く競ひ進む、類を以て集る習ひなる故に。又曰く、富んで貧きを忘れざる則ば、能く其富を保つ、貴うして賤きを忘れざる則ば、能くその貴を保つ。夫れ萬乘の貴き、四海の富みを以て、猶ほ以て足らずとする事は何ぞや。其始めの貧賤を忘れ、欲大にして窮り無ければなり。此を以て周公書を作て、以て成王の常に萬民稼穡の艱難を知玉はずして、驕逸ならん事を恐れ玉ふ。帝又曰く、朕兆民の主として、日々に是れをして富貴ならん事を欲す。役を輕うし、賦稅を薄うし、是れをして各々生業を治めしむる則ば、民間必ず皆富貴ならん。もし夫れ家とみ人たらば、朕管絃を聽かずと云へ共、樂しみまた其中に在るらくのみ。上又侍臣に謂て曰く、大凡人は銅を以て鑑として、以て衣冠を正すべし。朕は古を以て鑑として、以て興替を知り、民を以て鑑として、以て治亂を知

り、人を以て鑑として、以て得失を明む。朕常に此三鑑を保て、以て己れが過を防ぐ。今魏徵沒ず、朕一鑑を失ふと。或る時上侍臣に謂て曰く、朕太子をたてゝより、物にあふ毎に即ち誨ふ。其飯するを見ては即ち曰はく、汝稼穡の艱難を知らば、即ち常に斯飯有らん。其馬に乘るを見ては即ち曰く、汝其勞を知り其力を竭さずんば、即ち常に是れに乘る事を得ん。其舟に乘るを見る時は即ち曰く、水は舟を載する所以也、民は猶ほ水の如し、君は猶ほ舟の如し、民を憐み國家を貪り苦しむる事無くんば、長く福貴を保ち王位を失ふ事無けん。愼まずんば有るべからず。漢の孝文帝詔して、窮をすくひ老を養ふの令を定む、其民を憐むに切なるの意を見る、未だ一年に及ばざるに、帝の善政蓋し已に班々たり。記しつべし、漢地の興る事それ宜べなる哉。上每朝郎從の官書疏を上つるや、未だ嘗て輟を留めて其言を受け玉はずんばあらず。言用ゆべからざれば是れをおく、言用ゆべければ是れを采る、未だ嘗て善を稱し玉はずんばあらず。詔して曰く、農は天下の大本なり、民の恃んで以て生ひする所なり、民或は其本を務めずして末を事とす、故に生ひとぼず。今玆群臣を率ゐて農以て是れを勸む、其民に田租の半をたまふ。又曰く、天下は大器なり、今の人器を置くに、是れを安き所におけば安く、是れを危き處に置く則ば危し、天下の情と器と、

以て異ることと無し、天子の是れを置く所に在り。湯武は天下を治めて禮樂に置く、子孫を累ぬる事數十世、是れ天下共に聞く處なり。又曰く、一日も國家の主として民の父母たらんず人々は、尋常愼しみ恐れて、萬民の心を考へ知し召すべし。民は何事をか苦しみ、何事をか悅び、何事をかうらみ、何事をか瞋るとを。此義を考へ明に察し玉ふを、是れを仁君明主と名け、此義をつゆちり知り玉はぬを、是れを暗君庸主と云ふ。民の瞋り恨むは、賦稅の重きと課役の繁きなり。民の悅び樂しむは、賦稅の輕きと仁澤のおこなはるゝなり。仁君明主はながく天下國家をあわれむ。詔に曰はく、禍は怨みより起る、福は德より起る、百官の非はよろしく朕が身に由るべし。いま祕祝の官禍を下にうつす、朕甚だ是れを取らず、それこれを除け。夫れ人の性たる一日に再食せざれば饑ゆ、終歲衣を制せざれば寒し、腹饑れ共食すること得ず、膚寒むけれ共衣る事得ずんば、慈父と云へども其子を保つ事能はじ。君安んぞよく民をやすんずる事あらんや。是故に明君は五穀を貴んで、金玉を賤んず。方に今の務め民をして農を務めしむるに若くは無きのみ。癸卯晦日、日食する事あり。帝曰く、群臣悉く朕が過失を思識して以て朕に啓告せよ、乃公賢良方正よく直言極諫する者をあげて、朕が及ばざる所を匡さしめよと。昔唐の大宗貞觀二年、蝗有り。

上苑中に入て蝗を見る。數枚を掇つて此を祝して曰はく、民は穀を以て命とす、而るを汝是れを食ふ。是れを食て萬民を悲歎せしめんより、寧ろ吾が肺腸を食へと云て、手をあげて是れを呑まんと欲し玉ふ。左右諫めて申さく、惡物なり、必ず疾ひを成さん。上曰はく。朕民の爲めに災を受く、何の疾か此を避けんと。遂に是れを呑み玉ふ。是歲蝗災を爲さず。上曰く、良君は將に善を賞し、淫を刑して、民を養ふ事一子の如く、此を益ふ事天の如し。昔呂望、文王に告げて申さく、天下は一人の天下にあらず、即ち天下の天下なり。天下の利を同うする者は即ち天下を得、天下の利を擅にする者は即ち天下を失ふ。天に時有り、地に財有り、能く人と是れを共にする者は仁なり。仁の有る所は天下是れに歸す。人の死を免し、人の難を解き、人の患を救ひ、人の急を濟ふ者は德なり。德の有る所は天下是れに歸す。人と愛ひを同うし、樂みを同うし、好きを同うし、惡きを同うする者は義なり。義の有る所は天下是れに赴く。凡そ人死を惡んで生を樂しみ、德を好んで利に歸す、能く利を生する者は道なり。道の有る所は天下是れに歸す。文王再拜して曰く、允なる哉、敢て天の詔命を受けざらんやと云つて、載せて俱に歸りて、立て丶師とし玉ふと。我朝仁德天皇の如きは、御即位四年春二月巳未、葛城二見山の岑に上らせ玉ひ、遙に民間を望

み見させ玉ふに、前後の數村窮困して煙氣起らず、唱然として悲歎して勅し玉はく、朕は貧しき哉、朕は乏しき哉。左右奏して申さく、貴き事天位に在ず、富み六合を保ち玉ふ、何ぞ貧乏の愁ひ坐しまさんや。帝勅して曰く、今是れ國民貧し、何ぞ六合を保ちて利と云はん、今是れ百性乏し、何ぞ天位に在りて高しと云はんと。夫れより浪華の御殿に歸らせ玉ひ、群臣に勅し玉はく、朕高き山に登りて、遠く民間を望むに、遠村近里斷えて煙氣起らず、是れ百性都て貧窮にして家に一粒も炊ぐ物無きの致す所に非ずや。古聖德の君王の御代を傳へ聞くに、萬民盡く富み榮えて、日々に君王德澤の徧き事を贊歎し、家々盡く康らかなる哉と歌ふと聞け。朕いま即位三年、歌頌の聲終に耳に入らず、炊く煙幽にして斷えゝなり。即ち知る、五つの穀もの登らず、百性已に窮乏なる事を。封畿の內すら斯の如し、況んや畿外においてをや。三月朔已酉群臣を召して、歎き詔して曰く、今より後三年悉くに課役を除いて、調貢を納めず、百性の辛苦を休へしめよ。夫れ熟々天理を考れば、天皇は國民の父母、大臣は國民の兄みなり、國民の爲めに身をくるしめよ。若し然らずんば理に當らじ。儉約を守らずんば、何ぞ三年を保たん。朕と群臣と心を一つにして身を苦しめ節儉を守り、勤めて萬民を救はん。誠に是れ國家の父、萬民の兄みの道なりと。

時に大臣及び群臣大に悅んで、皆落涙して前み奏して申さく、臣等が身命は盡く皆天王に擎げ奉る、只今飢ゑて死すとも惜しむ所なし。況んや大道の爲め、萬民の爲めなるをや。道のため民のために饑寒を忍ぶに、何の恐るゝ所か是れ有らんと。君臣相議して、初めて三年の法を定め、諸國萬民の宅に配して、田租の半を賜ふ。天皇も、大臣も、是れより麁衣麁服、鋪衣鞋履弊れ盡きて而して後に作り、溫飯暖羹酸餒して而して後に易ふ。君臣上下共に携へて、嘉肴美酒を禁じ、妃嬪妖嬙を退く。民間の窮餓を救ひ、國家の艱辛を蘇せんが爲め、自家の榮耀を制し、互に節儉を守り、限りも無き困苦を嘗め玉ふ事、上も無き陰德行ならずや。上下いつしか面上覺えず菜色を浮べ、互に相見て計らず涙痕を帶ぶ。日々各々清閑無事を樂しませ玉ふ。越に於ていつしか宮垣傾き崩るれ共修せず、茅茨壞れおつれ共さらに以て葺かず、風雨すきまを穿つて鄉衣の袂沾し、星辰屋壁を穿つて霜露床蓐に滿つ。不思議なる哉、其後年々風雨時に順て、五穀豐なり。未だ三年を經ざるに民間盡く富饒なり、頌音野にみちて炊煙浮び繞る。七年夏四月辛未の朔、二見山に天皇自ら登らせ玉ひ、遠く民間を望み見させ玉ふに、祥煙連り浮び、瑞靄遶り圍む。天皇限り無く御歡喜まし〳〵、打笑ませ玉ひて、御製有り云はく、「高き屋に登りて見ればけむり立つ民の

寵は賑ひにけり」と。即ち浪華の御殿に還り入らせ玉ひ、皇后に對し御仰せ有りしは、悦ばせ玉ひてよ、朕今既に富めり、何の愁る處か是れ有らんと。皇后答へ申し玉はく、宮垣破れて髪毛盡く風に枯れ、殿屋破れて衣襟露に曝さる、何の富めりと宣玉ふ御事か是れ有らんと。天皇重ねて勅し玉はく、夫れ天の君皇を立て置かせ玉ふ事は、百姓を安んせんが爲めなり。然らば即ち天下に君たらんず人は、百性を以て本とず。是を以て古の聖主は、國中一人も飢寒する者有れば、盡く是れを顧み、是れを聞き、是れを問ひ尋ねて、身を責め吾を辱めて、天に謝し玉ふ。今百性貧しきは則ち是れ朕が貧しきなり、百姓の富めるは則ち是れ朕が富めるなり。神代より以來未だ有らじ、百性貧しうして天皇富めりと云ふ事はと。皇后御手をつかせ玉ひ、貴ふとやな有難やな、君は正しく漢家にも本朝にも比類もおはせぬ仁君にてわたらせ玉ふ嬉しさよと。御涙せきあへざせ玉はざりける由。寔に千載の美談ならずや。古來世間の暗君庸主は即ち然らず。内には苦諫を擊ぐる老臣なく、外には國家を愁ふる賢佐無きが故に、獨り自ら富貴を恃み、威權に誇りて、徒に日々人欲の私勝ちて、驕奢を究むるを以て自家の勤めとし、稼穡の艱難を顧みず、國家の窮困を察せず、黎民の油を絞つて、美酒嘉肴殿中に溢れ、嘉果珍饈堂上に充つ、蛾眉列り逸り、美質紅顔前後に

圍ひ、絲竹管絃の音晝夜に斷ゆる事なく、簫笛琴瑟の響蚤暮に息む時なし、其の浮費秦楚の富みと云へども足るべからず。此において多く酷吏の輩を尋ね擇び、是れを民間に放つて國中を貪り掠め、黎民を責め苦しむ。恰もしめ木を扣へて油を絞るが如し。賦稅は年々五分三分宛切り上げ、課役は月々に二種三種宛觸れ增す。萬民の悲泣は叫喚燒熱の衆生の如く、國家の苦惱は黒繩衆合の罪人の如し。此等の苛政は國君人主等の御身の上にはつゆちり知し召さゞる事ともなり。皆是れ中下の人々の、忠節に事寄せ、竊に組み立て玉ふ私曲なり。外面は忠義に似たりと云へ共、内證は上もなき大不忠節なり。國家を苦しめ、萬民を責め惱ますの罪障、積り〳〵て誰が身の上にか歸せんや。勿體なくも畢竟皆盡く主君の御身の上に積み集めて、御武運を殺落して御壽命を切縮め、果ては國家を亡し、御子孫を斷絶せしむるに到る。古來明德至善の君子、仁澤を天下にほどこさんと思ぼし立ち玉ふとき、最初に專ら仁吏を撰び用ひ、酷吏を恐れ遠け玉ふ事は何ぞや。酷吏の國祚を害ひ、國脉を斷つ事、鴆羽一片河水に投じて、魚鼈悉く皆斃れ、水銀一滴木根に入りて、松柏俄に枯るゝが如し。酷吏は代々先君の宗廟をして荆棘の野と成し、狐兎の栖家とす。憎んでも惡んずべきは酷吏なり。酷吏は代々先君の神靈をして、祭奠なきの閑神とし、依る方な

きの野鬼とす。恐れても惶るべきは酷吏なり。この故に明君聖主は、酷吏を忌みすて玉ふ事屍穢の如く、酷吏を憎み遠け玉ふ事蔡汚の如くし玉ふ。暴君暗主は專ら酷吏を貴び用ゆ。是故に云ふ、聖主出て酷吏ひそみ、暗君立て酷吏眉を披くと。吏は作麼胡爲者とかするや。彙に云く、吏は民を治むる官なりと。異に云く、吏は民を惱ます官なりと。蓋し吏に仁吏有り酷吏有り、常に民の利害を考へ、土の濃瘠を察し、稼穡の艱難を憐みなげき、凶年饑歲には賦稅を寬め、課役をかるうし、民をして飢凍に苦しまざらしめ、國祚をして堅剛にし、君をして千歲の後までに苛政の謗を引かざらしむるを以て已が急務とす。是故に生民なつく事爺孃の如し。謂つべし、民を治むる官なりと。敬しても敬しつべきは仁吏なり。仁吏は寔に用ひつべし。酷吏は大に是れに反す。蓋し酷とは刻剝の義なり。民を貪り苦しむる事刻むが如く、財產を掠め取る事剝ぐが如し。酷吏は歲の凶豐に管せず、民の凍餒をかへり見ず、徒に自ら奪ひ貪るを以て已が忠節とす。昔人是れを聚斂の臣とす。其奪ひ盜む事、智君子に過ぎたり。故に云ふ、聚斂の臣有らんよりは寧ろ盜臣有れと。賄賂あるの訟は水に石を投ずるが如く、賄賂無きの訟は水を石に投ずるが如し。譬へば張三と李四と共に爭ひ訟ふる事有らんに、其初め理非を分たず、勝敗を辨せず、混然として日を

かさぬ。張是れを愁ひて竊に寄する事有る則ば、李が空處を探つて少しく是れを呵す、李大に驚き恐れて、竊に寄する事有る則ば、又張が空所を捉へて少しく是れを呵す、張李共に互に驚き恐れて、代る〳〵相寄すと云へ共、金錄辨せず、玉石分たず、或は五年、或は十年寄せ寄せて、遂に財盡き力窮りて一向寄する事能はざる者を捉へて、終に是れを負所に擠す。是故に民の酷吏を恐れ憎む事、惡虎の聚落に在るが如く、疫鬼の國中に流行するが如し。往々に世の邦君國主は夢にも知し召さず、自らおもへらく、國豐に民康しと、いつしか君を桀紂の君にし、民を桀紂の民にす。謂つべし、吏は民を惱する官なりと。昔秦憍奢を恣にし、威權を恃んで、咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を構へて、大に誇る。是故に財用足らず、俄に酷吏を放つて天下の財利を奪ふ。倉稟充ち溢れ、生民瞋り恨む。久しからずして咸陽燒れ阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主、各々酷吏を愛し用ひて、民をして塗炭の中に苦しましむ。果して四海の富みを失ひ、萬乘の貴階をくだる。須らく知るべし、民は國家の本なる事を。民は一身の元氣の如し。是故に云ふ、氣盡くる則は人死し、民衰ふる則は國亡ぶ。諺に是有り、云く、天將に雨らんとする時は、山色必ず近く、國將に亡びんとする時は、民間先づ苦しむ。元祿の初め中國の內、何某の侯の家に酷吏有り、大に民

を貪り掠め、生民悲しみ哭す。村民の長たる者有り、爭ひ諫めて强く利害を說く。酷吏大に瞋り憎んで、竊に讒へ讒して、彼の村民の長を誅す、長誅せらるゝに及んで、天を仰いで長歎して云はく、我若し罪の誅せらるべき有りて、我を誅せば即ち止まんぬ。若し又罪無うしてわれを誅せば、爾見よ君侯必ず三年の活を得ん、國脉必ず三年にして斷絶せん、爾が輩是れを見よと云ひ了つて死に就く。天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、其侯未だ一兩日を經ざるに乍ち心痛の重痾を發せんとは。百藥寸功なく針灸しるし無うして衆醫手をつかねて終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣子四歳なりけるを、傅奏所へ奏し願ふて家督を續がしめんと、家中の古老相添ひ、遙に武陵に趣く。着府未だ日あらずして是れ又俄に早世す。悲しむべし、十萬石餘の大家、乍ち根を斷ち葉を枯し、數千人の家中、老幼骨鄙東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となりぬ。是れ彼のさきに謂ゆる酷吏の國家を亂り、國脉を斷つ現證なり。後來寶永丁亥の春、予行脚して錫を其城下に留む。一日持鉢の次て、道友三五輩、伴つて彼の侯の師檀の寺に入りて、先の城主の宗廟を見る。香華久しく道絶えて、鬼哭し、神悲しむに似たり。各々額を掛めて嗟悼して云はく、嗟己んぬる哉、唯是れ一箇酷吏の苛虐より起つて、終に此荒蕪を見る。一國の君、一城の

主たらん人々の恐るべきは酷吏なり。是れ即ちさきに謂ゆる酷吏代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兎の栖家とし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神とし、依る方なきの野鬼とするの現證なり。譬へば此に賊臣有りて祕計を廻らし、奇謀を設けて、其國を亂し、其家を破り、其君を害ひ、其群臣をして東西に分離せしめ、終に其國脉を斷たんと計らば、國國人皆盡く瞋り憎んで、皷を鳴らして是れを責め、油もて煮、牛もて裂くと云へ共、飽き足る事無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是れよりも甚だしき事を。酷吏は外面は忠節に事寄せ、萬民を貪り、國家を苦しめ、三代相恩の主君をして此天誅を招かしむ。其中には人知らぬ私曲有り、然るを是れを愛し是れを用ひば、國夫れ久しからざらんか。寔に危いかな。時に一僧あり、勅如として頭を掉て云く、否なり、酷は奢の影なり、奢は辭の如く、酷は響の如し。予が曰く、何と云ふ事ぞや。原ぬるに夫れ暗君國を得る則ば必ず奢る、奢る則ば多く妃嬪を列ね、妖嬙を聚む、あつむる則は財用足らず、たらざる則は百端を究めて是れを求む。財の物たる木に就いても求むべからず、水に就いても得べからず。越に於て酷吏の老けき者を擇んで、是れを民間に放つて、黎民の財利を掠め奪ふ。うばふ事烈しく得る事の多きを愛して、以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是れに授

くるに官を以てし、是れに賜ふに爵を以てす。此において吏族大に眉をひらきて、飛廉が肩を瞋らし、惡來が臂を張り、王莽が眸を凝らし、董卓が頭を掉つて、賦稅に事寄せ、官租に擬へ、民の穀帛を掠め奪ふ事、枯骨を絞つて汁を求むるが如し。越において國衰へ、民疲る、冬暖なれども兒は凍ゐたりと號び、年登れども妻は飢ゑたりと泣く。而して後に衆民盡く瞋り恨み、愁ひ背く。そむく則ば其國必ず天禍あらざれば人刑有り、國夫れ久しからざらんか。是故に云ふ、鳥の將に死なんとする時、其鳴くこと悲し、國の將に亡びんとする時、其貪ること烈しと。寔に恐るべし。吏もまたよろしく自ら計りて恐れ慎しむべし。君侯の威權を假借して濫に民を貪斂し、濫に民を惱害し、濫に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業かは。忘れても有るべき事かは。嗟夫れ爾の後を如何。豈に特り他の國祚を害し、他の國脉を斷つて、而して後に休する者ならんや、自家もまた必ず〳〵爾の繼嗣を斷たんか。豈にそれ爾の繼嗣を斷つのみならんや、人の臣として君の國家を亂る、不忠是れより甚だしきは無し、人の臣として君の國祚を斷つ、罪過是れより大なるは無し、死後には必ず無間燒熱の惡處に墮して、俱底恒沙の苦患を受け、火血刀の辛酸を嘗めん。熟々顧ふに、侯吏品殊に、尊卑事異りと云へども、誰か其祖宗なからん、

若し其れ果じて祖宗あらば、各々泉下に在て、爾が官吏にうつるを見ば、必ず大に啼泣して云はん、焦穀芽なく酷吏後無し、我が輩久しからずして必ず祭奠なきの閑神と成り、依る方なきの野鬼とならん、嗟願くは酷吏なれや、順吏と成る事なかれと。顧ふに仁酷並び立つと云へ共、否泰遙に霄壤なり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必ず盛大なり。酷吏の部類は向後多くは郎當落魄して、道路に餓死す。四十年前何某の處の役所に酷吏有りき。人民大に憎み恐る。久しからずして人禍有りて俄に其職を剝がれ、改易せられて牢落す。父は和樂を歌ふで袖乞ひし、子は軍書を讀んで人の門閫に立つとかたり終て慘然たり、或人の云く、酷に兩般有り、謂はゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり、私は多く、公は少し。公は恐るゝ所なし、公然として是れを奪ふ。私は恐るゝ所多し、必ず密に村民の長を語ひ、志を同うし、計を定めて、而して後に官命なりと稱して、恣に貪り掠め、日々に奪ひ、月々に掠めて、終に其利を二つにして、吏と長と是れを分つて公は預からず。是故に長家は月々に繁興して、康藝が高廈を構へ、石崇が堂奥に坐し、絃歌遠く傳へて、穀車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻孥もまた養ふ事得ず、家々に苦しみ哭し、戶々に衰へかじけて、窮餓相煎ず。野に

來色多く、怨恨内に逼る。此において或は三萬、或は三萬、蟻の如くに聚り、蜂の如くに起ち、恨み叫んで先づ彼の長家を圍んで、門閫を破却し、家財を粉碎す。若し彼の長を捉へは、必ず裂いて食はんとす。其勢折くべからず。果ては城中に込み入り、狼藉せんとす。此において領内の寺院を傭て、誑し騙して是れを治む。靜謐の後、竊に狗を廻はして彼の張本をさぐり捉へて、或は二十、或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野に偏し。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と村民の長となる事を。譬へば此細民有りて、五箇三箇伴を結んで遠く佗國へ行かんに、佗國の民若し本國の侯を指して、或は罵り、或は謗る事有る則ば、彼の細民大に嗔り叫んで、打果す事もまた顧みず。諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に習て、年の凶豐を考へ、民の否泰を察して、上下利を同うし、高鄙苦樂を共にせば、國君に對して豈に此の凶態有らんや、窮鼠却て猫を咬むと云はんか。然らば即ち張本は民にあらず、吏と長とにあらずして何ぞや。故に云く、財散ずる則は民聚り、財聚る則ば民散ずと。民散ずとは、衆民恨み背きて、老ひたるを負ひ、幼きを携へて、佗國に走るを云ふにあらず。境を越えず、佗國へも行かざれ共、民心疎み離る。是れを民散ずと云ふ。民聚とは、衆民悅び慕ふて、佗國を離れ、簞食壺漿して我國に來り聚るを云ふにあらず、民心懷き悅ぶ、是れを民聚ると云ふ。君仁德有りて萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠け、毫釐も民を貪り掠め玉はざる則ば、衆民悅び懷き、市に謠ひ、野に拍つて云く、我が侯願くは萬歲なれや、此の君の爲めにゞならば、白刃をも蹈んづべし、黑火にもまた投じつべし、我が侯願くは萬歲なれやと。民心斯の如く貴び懷く、是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪欲にして、專ら酷吏を貴び用ゐ、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみならず、左右の近臣までをも逼迫せしむ。此において衆民恐れ憎むこと怨鬼の如く、恨み背き、嗔り罵り、市に哭し野に悲んで云く、嗟願くば仁人あれや。願くば多く豪傑の武臣を卒して、競ひ來て文武の紂をうつが如く、劉項の秦を破るが如く、吾境に入り、吾國を治めて、逐一酷吏の輩を誅して、吾輩の貧困窮餓を助け玉へかし、吾輩の旦暮を安らしめ玉ひてよと。天に訟へ神に祈る、斯く迄人心離れ背くを、是れを民散ずと云ふ。熟々顧ふに、世に羨からぬ者は村民の長家なるなり。五十年來予が東西二十里が間、村民の長たりし人々の家、大凡數百家の末を見るに、多くは郎當落魂、盲人と成る有り、希有の難病を受けて癈人と成る有り、其中少しも衰滅無く相續し、繁昌しもて行くもの、纔に八九家、是れは定めて勤役の中少しも貪り掠むる事無き、善き仁德